

GGOで好き勝手書いてみた短編集

rockless

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

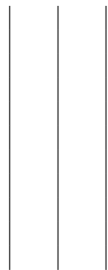
異形のモンスター、狂った機械、殺人を好むプレイヤーが跋扈する世界、ガンゲイルオンライン

そんな世界で生きる1人の糞虫の話
だっただけだなあ・・・

目次

7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	2025年12月	戦争のお時間	レンちゃん危機一髪?!	シノンさん危機一髪?!		
151	136	121	107	92	75	57	36	18	1			
19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	2026年1月	10話	9話	8話
319	306	295	282	267	253	239	226	212	196	183	168	

2 2 2
2 1 0
話 話 話



354 343 332

シノンさん危機一髪?!

「どうやって帰ろう・・・?」

ダンジョンである遺跡からフィールドへ出てきた少女、シノンはそこで初めて自分の置かれている状況を知った

つい先ほど、遺跡の下層のボスをメインウエポンのスナイパーライフルの全弾を撃ち込んで倒したばかりである。サブウエポンは射程も威力も心許ないハンドガンのみ。こんな状態でフィールドを歩いてグロッケンまで戻らなければならぬ。そんな装備で大丈夫か?

この状況で対人プレイヤーに襲撃されたら?間違いなくPKされるだろう。普段のシノンならば、それも仕方ないと受け入れられるが、残念ながら今だけはダメだった。なぜならボスからレア銃であるアンチマテリアルライフル、ヘカートIIをゲットしてしまったからだ。死に戻りでフィールドにこれを落としてしまえば、彼女は恐らく二度とGGOにやってくることは無いだろう。しかしそのヘカートIIもドロップしたばかりで、生憎弾が無いという状況である

「なんとしても、生きて帰らねば・・・」

生還への決意を胸に、状況打開の策を考え始めたそのときだった。すぐ近くでエンジンの始動する音がした。プレイヤーの気配を感じ、すぐに身を隠すシノン。そしてエンジン音のするほうに意識を集中する

「このエンジン音、車にしては・・・?」

半年前まで東北地方で暮らしていたシノンの中の人は、この音が自動車ではないことに気付いた。そして、この音を発生させる乗り物、それに近いこのゲーム内の乗り物にも心当たりがあつた。操作が難しく誰も乗れないと言われていたあの乗り物・・・

「3輪バギー、つまり」

—相手は1人か2人だ

彼女の中に、1つの解決策が浮かんだ。なんとか交渉して一緒にグロツケンまで帰ることはできないだろうか、と・・・現状、他のプレイヤーと接触するのは推奨できる行動ではないが、運がよければ無事生還できる

つと、そうこうしているうちに、3輪バギーのエンジン音が一層大きくなった。恐らく走り出したのだろう。音がドンドン近付いている。彼女が隠れている場所から外を窺うと、1台の3輪バギーが走ってくるのが見えた

—運転者の後ろにプレイヤーは、いない?! やった!!

シノンはグツと拳を握った。勢いに任せて3輪バギーの進路に飛び出す

「止まってーっ!!」

両手をバツと前に出し、思い切り叫んだ。あれ?これ下手したら轢かれるのでは?と、自身の早まった行動を反省した彼女だったが、幸運にも3輪バギーは減速し、彼女の前に停止した

「お願い!!グロッケンまで乗せてください!!」

3輪バギーが停止したのを見ると、すぐに近寄って交渉をする。近寄ったのは交渉のためではあるが、もしも交渉が決裂して戦闘になっても、向かい合って1メートル以内のこの距離ならば、ハンドガンでもワンチャン勝ち目があるかもしれないからだ

「うーん、乗せてって言われても・・・」

バギーを運転していたプレイヤーが、バギーの後部座席に視線を送る。そこには旅行用のトランクケースのような箱が積んであった

「このケースの上でいいならいいけど・・・落っこちても知らないよ?」

「ホント?ありがとう!!」

交渉が成立し、シノンが後部座席にあるケースの上に乗る

「あ、俺に掴まるのは無しね。運転に影響が出るから」

「わかったわ」

バイクの2人乗りよろしく運転者に掴まろうと手を出そうとしたシノンだったが、注

意されてしまい。仕方なく自分が乗っているケース自体にしがみつ়くことにした

「えつと……出すよ? 本当がいい?」

「ええ、いいわ」

じゃあ……つとプレイヤーはバギーを発進させる。不整地を走るため、時折大きな揺れが発生したが、歩いて帰るよりはマシ……つとなんとか耐えるシノンだった

そんな感じで5分ほど……

シノンもやつとバギーの乗り心地に慣れてきて、周囲の景色を楽しむ余裕ができてきた。グロツケンに戻ったら自分でも運転できるように練習するのもいいかもしれない……なんて考えていた、まさにそのとき

「チツ……ちよつと飛ばすからしつかり掴まってて」

「え? わ、キヤツ」

その言葉とともに、バギーのエンジンは吼えるように回転を上げ、バギーは加速していく。そして揺れも今まで以上のもものになり、シノンは慌ててケースにしがみつき直す

「ちよつと、一体何?!」

「お客さんだよ!!」

ハンドルが切られ、進路を変えるバギー。そしてそんなバギーを追い駆けるように猛スピードでこちらに向かってくる3台の車。不整地でも走れる軍用の高機動車、ハンヴィーである

「ハツハアーツ!!今日こそお前を殺してドロップ品を奪つてやるぜ!!」

「お?カワイ子ちゃんもいるぜ?」

「構うもんか、殺せば関係ねえよ!!」

ハンヴィーの銃座にいる3人が叫びながら機関銃をバギーに向け、発砲する。銃座に取り付けられたM249機関銃から5.56×45ミリ弾が発射されていく。小口径だが、バギーを破壊するには十分の威力を持った弾である。バギーはさらに加速し、左右に進路を振って弾を回避する

「ちよつと、なんなのよーっ!!」

強烈な揺れに耐えつつ、運転者のほうを向いて問いかけるシノン。運転者とはとうと、右手はハンドルとアクセルを保持したまま、左手でいつの間にか抜いたハンドガンのスライドを、口でくわえてスライドさせてコッキングしているところだった

「(っ)う(っ)と、だよ!!」

運転者は左手に持った銃を後方や左に向けた。シノンの目の前に武器がやってくる。運転者はバギーに付いているサイドミラーを通して狙いを定め、発砲。直後、ガラ

スの割れる音がシノンの耳に届いた。彼女が後方に目を向けると、1台のハンヴィーの運転席のガラスが割れていた。そのハンヴィーの運転席のプレイヤーは顔面にダメー
ジエフェクトを散らし、消滅した

「嘘、でしょ・・・?」

シノンは目の前で起こったことが信じられなかった。走行中のバギーから、ミラー越しに狙いを定めて、同じく走行中の車の運転席のプレイヤーの頭に当てる。神業と言ってもいい射撃であった。しかも・・・

「デザートイーグルの片手打ちで、なんて・・・」

「あ? 41口径のだから反動は軽いもんだって」

大口径マグナムを装填したデザートイーグルでそれを行うなんて・・・シノンは背筋がゾツとした

「クソツ、やりやがったな!!」

「調子のんなよ!!」

1台のハンヴィーが脱落し、残り2台のハンヴィーからの射撃が一層激しくなる。バギーは左右に蛇行を繰り返しながら、運転者は再び射撃を試みるが、同じ手は食うまいとハンヴィー2台も進路を揺らす

「それなら!」

「運転者はバギーの進路を左に取った。1台のバギーと2台のハンヴィーが左にカーブする中、運転者は発砲した」

「ハッ！どこを狙って、うおっ?!なんだあああっ?!」

「わーバカ！こっちくんじゃねえええ!!ぬわー!!」

運転者が放った弾を車体下部に食らったハンヴィーが、突如横転したのだ。横転したハンヴィーはもう1台のハンヴィーを巻き込み派手にクラッシュした。発射された弾丸は、左カーブで荷重のかかったハンヴィーの右サススプリングに命中。損傷したサススプリングはハンヴィーの車重と旋回Gに耐え切れず破損し、車体はバランスを崩し横転した、というわけである

「まだ負けてねえぞーっ!!」

「しっこいなあ・・・」

残り2台をまとめて仕留めて、片付いたと思ったら、最初に脱落させた1台が再び追走してきた。最初の1台目は運転席のプレイヤーを殺しただけなので、銃座にいたプレイヤーが運転席に着き、追い駆けてきたというわけである。しかし、それはつまり銃座には誰も着いていないので、射撃ができないということである

「射撃じゃなくても、バギーとハンヴィーの車重差なら体当たりで吹っ飛ばせるんだよ!!」

「ま、当てられたら、な」

ハンヴィーの体当たりを、バギーは難なく回避した。当然のことだが、バギーとハンヴィーならば、小回りが利くのはバギーである

「それじゃ、お疲れさんつと」

運転者はデザートイーグルでハンヴィーのある部分を狙って発砲した。狙い違わず命中したその部分、給油口から炎が噴き出し、燃料タンクが爆発。ハンヴィーは炎上しながら前方へ一回転半してスクラップと化した

「あなた、一体・・・?」

「さて、グロツケンへ急ぐかな。ちよつと遠回りしちまったからな。うかうかしてたらまた襲撃されちまう」

バギーがグロツケンまで戻ってきた

「マーケットには向かわず、付き合ひのあるバイヤーの店に向かうから、降りたいところ
で言ってくれ」

「じゃあその店まで連れてってもらえないかしら? 弾の補充をしたいから」

「オツケー」

2, 3分ほど走ったところでバギーは1軒の店の前で止まる。運転者がバギーから降りたので、シノンも同じく降りる

「ブラツクアロー?」

店の名前が書かれた看板を見上げるシノン。運転者はシノンの下にあつたケースを重たそうにバギーから降ろし、店に持って入った

「おーい、着いたぜ」

「お、帰ってきたか、おかえり。っと、珍しいな、連れがいるとは」

「帰りに拾ったヒツチハイカーだよ。弾の補充をしたいんだとよ」

「そうかい。何の弾だい?」

店主のプレイヤーがシノンに向き直つて対応した。シノンはストレージからヘカートIIを取り出した

「これの弾なんですが」

「ほお、こりやあまた・・・すごいのがきたな」

店主が驚きの表情を浮かべた

「今日入手したばかりかな?」

「ええ」

「ちよつと見てもいいかな?」

シノンからヘカートⅡを受け取った店主は、マジマジと舐めるようにそれを見始めた
 「PGMヘカートⅡ、フランスの対物用の大口径ライフルで、弾は12・7×99ミリの
 NATO弾だな」

「対物ライフルか、結構なレアリティだな」

「そうだな。未使用品みたいだし24メガ、いや25メガクレジットつてところか？今
 日ドロップしたならどうだい？売る気は無いかい？」

「あの・・・その・・・」

GGOは公式でリアルマネートレードが可能なゲームで、ゲーム内クレジットを現実
 の通貨に換金することができる。変換レートは100クレジット＝1円となっている。
 つまり店主はヘカートⅡを25万円で買いたいと持ちかけていることとなる。今年高
 校生になったばかりのシノンの中の人にとっては困惑する金額であった

「そういうのはお前、あの銃売ってからにしろよ。いつになったらアレ売るんだよ」
 「バツカ、お前、アレ売ったらウチの看板がなくなっちゃうだろ!!1億クレジット出され
 てもアレは売らねーよ!!」

ここまでバギーに乗せてもらった運転者のプレイヤーが、顎でしゃくって店主の後方
 の壁に飾ってあるライフルを指して言う。その銃を見た瞬間シノンは圧倒された

「何、あれ・・・？」

ヘカートⅡよりも長大な全長、漆黒の本体に銃口の先には対物ライフル特有のマズルブレーキを備えたその銃は・・・

「ツアスタバM93ブラツクアロー。セルビアの対物大口径ライフルだ。弾は12・7×108ミリ。ヘカートⅡに使用する12・7×99ミリより高初速で長射程、貫通力もある。間違いなく現在このゲーム内最強の対物ライフルだ」

「すごい・・・」

「ちなみに面白い取り価格は、未使用で80000万^{80000万}は、8000万・・・」

シノンはゲーム内なのに軽く眩暈を感じた

「まあ、売る気になつたらウチにおいて。中古でも2100万^{2100万}から2200万^{2200万}は出すからさ」

店主は持つていたヘカートⅡをシノンに返し、カウンターの下から、12・7×99ミリの弾丸を1箱出し、シノンがクレジットを支払って売買を終えた

「それじゃ次は俺だな」

店主とシノンのやりとりが終わるのを、持ち込んだケースに座って待つていたバギーの運転者は、そう言つて立ち上がると、重たいケースをなんとか持ち上げて、カウンターの上に載せた。シノンは好奇心から、その様子を近くで見ている

「さて、今日はどんなものが出てくるかな・・・」

店主が恐る恐る持ち込まれたケースを開けると、そこにはアサルトライフルとサブマシンガンがギッシリと入っていた

「まずはアサルトライフルだな。SIGに、H&K、うわ、ステアーまである・・・」

店主がアサルトライフルを1丁ずつ取り出してカウンターに並べていく。SIG S G 5 5 0、SIG S G 5 5 2、H&K G 3 6、H&K H K 4 1 6、H&K H K 4 1 7、ステアーAUGが取り出され、並べられた

「次はサブマシンガン・・・メーカーは同じか」

そう言っつて、次はサブマシンガンを取り出し始めた。SIG M K M S、H&K M P 5、H&K U M P、ステアーT M Pの4種類が仕様違いで複数丁。全てカウンターに並べられた

好奇心で見えていたシノンは開いた口が塞がらない。ここにある銃だけで、数百万クレジット、下手をすれば1000万クレジットに達していてもおかしくないのだ

「それで? ストレージのは出さないのか?」

「まだあるの?!」

「こんなのまだ前座だよ。一番大事なものはストレージに入れておく。当たり前のことだろ?」

もう勘弁してくれ、そんな思いで口から出たシノンの言葉に、店主が返す。ケースに

入れてバギーの荷台に積む。確かにそんな運搬方法だと、プレイヤーが倒されなくても、ケースだけ奪えばいいのだ。通常、このゲームでドロップ品の売却で利益を上げているプレイヤーたちは、複数人でチームを組み、1人を運搬役としてストレージを空けさせておくのだ。ケースを使用する方法を取るプレイヤーなど普通はいない

「フツ、見て驚くなよ。2丁あるからな」

そう言つてウインドウを操作して、ストレージから2丁の銃が出てきた。独特のフォルムを持つその2丁の銃。シノンはその銃が何かわからなかったが、店主たちはどうやらわかっているようで、シノンがヘカートIIを出したときより大きな驚き、驚愕の表情をしていた

「H&KXM8とXM29か・・・初めて見たぜ。ヤバイなこれ」

「ああ、ヤバイ。特にXM29のほう」

「あの・・・なにがそんなにヤバイの?」

2人が重苦しい雰囲気に含まれている中、シノンが意を決して問いかける

「この銃はな、括り言えばアサルトライフルなんだが、部品交換により、サブマシンガンからスナイパーライフルまで、使用方法を変えることができる。それだけならH&KH K416なんかも似たような感じなんだが、コイツはその部品交換を道具を使わず素手で行える。汎用性の高く、さらに装着可能なオプションも多い。本体重量もXM8は

3. 4キロしかないと言う点も脅威だ」

「さらにヤバイのはXM29だ。XM8の汎用性をそのままに、20ミリのグレネードランチャーを合体させた代物だ。それで本体重量5.5キロだからな。対人プレイヤーたちなら5000万でも6000万でも出しかねんな」

本体重量の軽さは装備時の要求STR値に影響する。必要なSTR値が少なくて済むということは、GGOが始まってからずっと強いと言われているAGI型ビルドを行っているプレイヤーにとつて、好ましい銃ということなのだ

「さて、いくらで買い取る?」

「そうだな・・・この2丁は一先ず置いておくとして、ケースに入ってた銃は、まとめて600万で・・・」

「600万つてお前、それは買い叩くにもほどが」

「まあ最後まで聞いてくれ。正直バイヤーとしてプレイしてる俺でも、この2丁、特にXM29はいくらの値まで上がるか予想がつかない。このゲームの対人戦特化のプレイヤーの欲には底が見えん。さっきのブラックアローだって、いつか本当に1億クレジットを提示してくるヤツが出てきそうなくらいだ」

GGOというゲームで強くなる方法は主に3つで

1つ、モンスターを倒し、経験値を得てレベルアップし、ステータスやシステム上の

スキルを上げる

2つ、地道な練習でプレイヤー本人のスキル、プレイヤースキルを伸ばす

そして、一番手っ取り早く簡単に楽なのが・・・

3つ、高性能の武器を使う

である。1つ目や2つ目と違い、3つ目はお金で解決できる以上、GGOの対人戦が盛り上がりれば盛り上がるほど、現実の金に糸目をつけないプレイヤーが次々と現れることとなるわけである

「つでだ、とりあえずXM8を30000万、XM29を50000万で買い取る。それで、この2丁の利益分の半分を後払いで上乘せする。どうだ？」

「・・・信じていいのか？」

「俺だつて、お前のおかげでたんまりと稼がせてもらつてんだ。ここで裏切つて、もうウチに卸に来なくなると大損する。確実に約束は守る」

「2丁それぞれの利益だからな？どつちかで損失出したから、もう片方の利益で補填して支払い分を減額とか無しだぜ？」

2人がガンを飛ばし合う。GGOには契約書を作ることができないので、こういった取引は口約束になる。だから相手を信用するかを慎重に判断しなければならぬ

「いいだろう。交渉成立つてことで」

シノンの目の前で、2人が8600万クレジットという途方も無い金額の取引が成立する

「ああそうだ。これも買い取ってくれ。それと預けてたアレ、出してくれないか?」

「もう使うのか? 早いな」

カウンターに41口径のデザートイーグルが置かれ、それ用の予備マガジン、使用されなかった弾丸も置かれた。店主は、店の倉庫ウィンドウを開き、同じ種類の銃を取り出した

「いよいよ44口径か。それで物足りなくなったら50口径を使うのか?」

「どうだかな・・・41口径と44口径はマガジンの装弾数が8発だが、50口径は7発だからな。リロード回数が増えると面倒だしな」

「なるほど」

銃の動作を確認しホルスターに納め、追加で出された44口径マグナム弾と予備マガジンをストレージに入れていく

「それじゃ、今日はこれで」

「毎度あり。って、おーいお嬢ちゃん。いつまでそこにいるの? 寝オチしちゃった?」

「っ!」

シノンが店主の声で我に返った。目の前で行われたあまりにも自分の常識の外のやり取りに、呆然としてしまっていたのだ

「す、すみません。失礼します」

「今後ともご鼻屑にね」

慌てて店を出て行くシノンを見送る店主

フィールドでの戦闘、店での途方も無い金額の取引、この日起こったことが、今までこのゲームで、ただ我武者羅に『強さ』を求めてきたシノンに、どんな影響をもたらすのであろうか……？

レンちゃん危機一髪?!

不慮の遭遇により、プレイヤーと戦闘に発展。それに勝利したレン

「これ、使えるかも・・・っ!」

自身の着衣のカラーが現在位置の砂漠の保護色となり、視認されにくいことに気付くと同時に、聞き慣れない音が耳に入ってくる

「エンジン音? 誰かがこっちに向かってくる?」

—さっきのやつらの仲間? いや・・・

音の聞こえてくる方向に、レンは頭の中に浮かんだ可能性を否定する。その音は先ほどのプレイヤーたちがやってきた方向とは逆から聞こえてきた

—もっと遠くで狩りをしてた人が、帰り道にここを通るんだ・・・さっきのでプレイヤー殺しちやったし、それが1人増えるだけ・・・

先ほどの戦闘で自信がついたレンは、続けてPKをすることを決める

奇襲するために地面に伏せて身を隠し、エンジン音が近付いてくるのを待つ

—よし、やってやる!

少しすると、砂埃を巻き上げながら走る3輪バギーがレンの視界に入ってきた。レン

はバギーの進路を読み、タイミングを計り……

—今！

バツと起き上がり、AGIに任せた高速ダッシュでバギーの左側から突っ込む。距離が目測で30メートルほどから射撃を開始するが、数発撃った弾が光弾防護フィールドに防がれる。しかし、例えそれが無かったとしても、自身の射撃が全て相手に当たらないコースであることにレンは気づき、顔を顰める

—なんで?!バレットサークルのほとんどが相手に被つても命中コースに弾が飛んでいかない?!

自身がダッシュしながら、走行中のバギーの運転者を狙った射撃のため、バレットサークルが大きい状態で狙いが定まらないのは仕方が無いことだが、それでも今までにない現象に、レンは疑問を持った

射撃を受けたことで、襲撃に気付いたバギーの運転者は、逃走を図ろうとアクセルを吹かしバギーを加速させた

—それでも、近付けば……

対してレンは弾道の疑問は一旦置いておき、まずは光弾防護フィールドを抜ける距離まで近づくことを優先させようと射撃を止めてダッシュに専念する

「っ?!」

つと次の瞬間、レンの頭に向かってバレットラインが伸びる。バギーの運転者が左手でデザートイーグルを構えていた。即座に横に跳び弾丸を回避したレンに、再度バレットラインが伸びる

—近づけない?!なら・・・

先ほどの戦闘と違い、完全に自身が捕捉されていることを悟ったレン。すぐに作戦を閃き、バギーの後方に入って砂埃に紛れ、運転者から隠れる。そのままバギーの右側へ出て、AGIをフルに使った全力疾走でバギーに追いつく

—左手に持った銃で右側後方のこの位置は撃てないはず

そう思ったレンは銃を構えた。左手に持った銃をこの方向に構えるのは、かなり無理な体勢を取らねばならない。なぜなら、右手はハンドルにあるアクセルを握っていないければ、バギーが止まってしまいうからだ

—この距離なら防護フィールドも抜ける!取った!

勝利を確信し引き金を引く・・・まさにそのとき、バギーが急減速した

「えっ?!ちよ、まつ、グヘエ」

バギーの減速に対応できず、レンは猛スピードでバギーの右後輪のカウルに突っ込んだ。ぶつかった勢いのまま空中を舞い、バギーの前方に落下した。衝撃で目を回したレンに、バギーがゆっくりと近付いて止まり、運転者が右手に持ち替えたデザートイーグ

ルをレンに向ける

「一人でよく頑張ったけど、ちよつと詰めが甘かったな」

「っ！」

デザートイーグルの引き金に指がかかり、銃口からレンの額にバレットラインが伸びる

—あとちよつとだったのに、悔しいよっ!!

負けの悔しさから、ギユツと瞑ったレンの目から涙が一筋流れた

しかしここでよく考えてほしい。GGOでは珍しいレンのロリアバターで、そんな表情をするとどう見えるのか？

「・・・その見た目でそれはズルイだろ」

どう見ても子どもをいじめているようにしか見えないこの状況に、襲われた側のバギーの運転者が居た堪れない気持ちになり、苦々しく言葉を漏らした

やがて、引き金から指を離して、バツの悪そうにため息をついた。レンはそれに対し、止めは刺されないようにだと、倒れている状態から上半身を起き上がらせる

「にしても、PKやるなら実弾銃だろ。チュートリアルやつてないのか？」

「やったけど・・・初めてフィールドで他の人と出会ったから、とにかく戦わないとって」
呆れ半分に話すバギーの運転者に、レンは負けたショックで凹みつつ返す

「はあ、マジかよ・・・初めての遭遇戦を単独でここまで・・・未恐ろしいな」

「そうなの？負けちゃったから実感無いけど」

「自分で言うのもなんだが、俺はレアドロ目的のMOB狩りメインのソロプレイヤーだけど、フィールドに出たらほぼ毎回襲撃されるが、もうかれこれ半年以上はキルされないからな。正直ここまで接近されたのも初だ。久々にヤベツて思ったな」

「そうなんだ・・・」

励ましの言葉を受けてレンの表情に明るさが戻り、表情には出さないが内心でホッと一安心したバギーの運転者であつた

そうして、その場がやや和やかな空気になる

が、そこに招かれざる客が・・・

「つたく、今日はツイてないな！」

バギーのエンジン音よりも大きな重低音を響かせ、小型の軍用トラックが2輛、猛スピードでこの場に突撃してくる。荷台にはそれぞれ2人のプレイヤーが自動小銃を装備して射撃の態勢をとっていた

急いでバギーのエンジンを掛け直し、バギーを発進させる運転者。運転者はちゃんと避けるつもりでハンドルを切っていたが、右後輪に轢かれると思つたレンは、咄嗟に後部座席に置いてある大きなケースに飛び乗った

「おいおい、付き合う必要はないぜ？」

「あ、あのまま置いてかれても助かる保障なかったし!!」

—しまったー。轢かれそうだったからつい飛び乗っちゃったけど、逃げる選択肢もあつたんだ・・・

どう考えても狙いが目の前のプレイヤーなのだから、逃げて砂漠に隠れたほうが生存確率は高かったことを、レンは後悔する

「ま、まあ、やられたのに止めを刺さないでもらった借りも、あるわけだし？」

銃を構えつつ顔を逸らし、判断を誤ったことを誤魔化すレンだった

そうこうしているうちに、2輦の軍用トラックがバギーに追いついた。それぞれバギーの左右斜め後方に位置取り、荷台の4人が個々に装備している自動小銃を狙いをバギーに定める

「ここであつたが百年目!!お前をふち殺してアイテムゲットだぜ!!」

「おうおうツレがいんぜ?!彼女と狩場デートか?!リア充爆発しろ!!」

遠目からでも女の子だとわかるレンの姿に、襲撃者たちは一層いきり立って、バギーに向かって射撃を始める

「ひいー、あ、あたっ、当たる?!やられるー?!」

「やられるかよ!!」

4丁の自動小銃から発射される弾を避けるバギー。揺れるケースの上で器用に頭を守るように伏せるレンが半ばパニック気味に叫ぶ

「全部5・56×45か。スコードロンで弾統一して弾薬費節約か」

避けながらも運転者は相手の装備を観察する

「昔のCMでもあつたしな。『よくかんがえよー、おかねはだいじだよー♪』ってな」
「反撃しないの?！」

一方的に撃たれながらも暢気に歌つてる運転者にレンがツツコミを入れる

「まあ慌てんなよ。相手の観察は戦闘の基本だ」

襲撃者たちのトラックは、荷台のプレイヤーを守るために装甲板が設置されていて、簡易的なガントラック化されていた。キャビンの窓にも同様に、運転に必要な最低限の視界を確保した上で装甲板が付けられていて、装甲板を避けつつガラスを抜いて運転者を狙うのは角度的に不可能であった。エンジンや燃料タンクは、軍用トラックであるため堅牢に守られていて破壊は不可能。タイヤを狙っても、軍用トラックのタイヤはパンクしてもある程度の距離は走行ができるような構造になっている

はつきり言つて、44口径のデザートイーグルでは手も足も出ない相手であつた

「ハァー、コレ高いから使いたくないんだけど・・・ま、仕方ないか」

デザートイーグルの代わりに、ストラップで肩から腰辺りに提げているモノを左手で

取る。そのまま親指で安全装置を解除した

「なにそのへんなの？」

ピストルグリップにフォアグリップ、ショルダーストックと一見サブマシンガンに見えるが、しかしマガジンが無く、照準具が側面に付いている・・・

「M320グレネードランチャー」

レンの問いに答えると同時に、左後方のトラックにそれを向ける

「吹っ飛べ」

相手のトラックが左ハンドルの為、フロントウインドウのやや左側を狙って榴弾を撃ち込む。運転席前の装甲板とガラス、屋根などが吹き飛んだ。運転していたプレイヤーも死亡し、誰もいない運転席が露になる

「やった！」

「つてか借りを返すつて言ったよね？とりあえず弾込めなおすから、右の相手してくんね？」

減速して離れていくトラックに小さくガッツポーズをするレンに、運転者が片手でランチャーの薬室を開けながら言う

「乗り物相手なら光学銃のほうが比較的ダメージ通るんだから、適当に応戦してて」

「う、うん、わかったよ」

レンはケースに伏せたまま銃を構え、トラックに向かって撃ち始める。ペチペチとトラックに弾が命中するも、全く相手にされていなかった

「効果が感じれないんだけど・・・」

「そりゃー軍用トラックだし耐久値高えからなー。ある程度までは無視するよ」

「むうー」

不機嫌そうに頬を膨らませるレン。とはいえ、運転者が右手でハンドルとアクセルを操作してバギーを走らせて射撃を避けつつ、左手でグレネード弾の装填をしている様を見ていると、これ以上文句も言えなかつた

そこでレンはふと思い出す・・・

—そういえば私もグレネード持ってたな・・・

つと・・・本来の目的だったMOB狩り用に使用するためにトラップ用とは別に投擲用のハンドグレネードを用意していたのだ

レンは射撃を止めて、ウインドウを操作してストレージからハンドグレネードを出す。そしてなんと揺れるバギーの中、ケースの上に立ち上がると・・・

「てやあーっ!」

なんて声を上げながらトラックに向かって、スイッチを入れたハンドグレネードを力いっぱい投げた

投擲されたハンドグレネードは、やや高めにトラックまで飛んでいき、キャビンの屋根でワンバウンドして荷台へ……

「なかなかエグイことするなあ……南無南無」

運転者が咄くと同時に、トラックの荷台でハンドグレネードが爆発した。爆発により荷台のプレイヤー2名はもちろん死亡。トラックの燃料タンクも破壊されて燃料に引火し爆発。運転席のプレイヤーまでも死亡した

恨みを買うと面倒なので、襲撃者でもやり過ぎず、適度にあしらうようにしている運転者は、レンの行為にドン引きする

「やったあー！」

運転者の心情などお構い無しに大喜びのレンだった

ともあれ、襲撃者を返り討ちにした2人だった……

グロツケンに戻ってきた2人

「おっと、ついそのまま連れてきてしまった。悪い」

「ううん、別にいいよ」

運転者のいつもの癖で、レンを乗せたまま付き合いのある個人ショップ『ブラック

アロー』の前にバギーが止まる

ケースの上からレンがピョンと飛び降り、運転者がそのケースをバギーから降ろし、店に向かう

「じゃあな、戦友」

なんてカツコつけて別れの言葉を言っただけで店に入る運転者だったが、その後ろにレンもついて行く

「いらつしやい・・・っっておお、来たか」

「おお来たぜ。買い取り頼む」

店内のカウンターでだらけていた店主が、ケースと一緒に入店してきたのを見て喜色を浮かべた

「あら、ラツシユじゃない？久しぶりね」

「シノンか。最近結構有名になってきてんな。冥界の女神サン？」

「もう、やめてよ」

店内にいたお客、シノンもそれに気付きやってくる。以前の一件以来、消耗品はここで揃えるようにしていて、なんだかんだで常連となっているシノンである

「・・・」

そして2人はレンの姿に気づき、ジト目を向けた。おい、どこで攫ってきたこの子

「?つと・・・そこで初めて運転者、ラッシユはレンがまだついて来ていたことに気付く
「うおつ?!なんでまだいるんだ?さつき別れたろ?」

「いやー、ケースの中身はなんだろうなあーって」

「ああ、そういうことか・・・ま、いつか」

「いやいや、まずお前らどういう関係よ?」

店主が耐え切れず問い質す

「1人で果敢に襲撃してきたPK。ぶつちやけ強いし・・・エグイ」

ハンドグレネードの件を思い出し、嫌な表情になるラッシユ

「今日初めてだったらしいけど、バギーを止めるくらいには追い詰められた」

「へえー、そりやすごいな」

「このナリだから止め刺すのも気が引けてたら別のが来て・・・軍用トラック2台だけ?

マジついてねえよ」

「襲撃遭遇率150%は伊達じゃねえな」

フィールドに出ると100%の確率で1度は襲撃され、さらに50%の確率で2回目
の襲撃に遭うという。治安の悪い都市のコピペのような日常であった・・・

「ぶつちやけ今回は不漁だな」

つと言いつつラッシユがケースをカウンターに置いた。シノンも見ながら店

主がケースを開けた

「確かにあんまりだな」

「前のところが使えたらいいんだけどな」

「まあ、仕方が無いだろ。億レジットの狩場なんだから」

「億れじつと?」

唯一事情を知らないレンが聞いた

「第2回B o Bの前。俺がとある高性能銃を2種類ここに卸した。その販売価格が2丁合わせて1億クレジットに達したって話」

「1億クレジットって・・・100万円?!」

「ホント対人戦専門のプレイヤーの欲は底なしだよ。取引の情報は漏らしてないのに噂って怖いよな。以来、その狩場は億レジットの狩場と呼ばれて、ラッシュみたいになレアドロ漁りのプレイヤーが取り合う、超ホットスポット化したってわけ」

「取り合いになり過ぎて、MOB狩りと対人戦を同時にしてるようなもんだ。弾がいくらあっても足りやあしない」

なんて話ながらも、ケースから銃が取り出されてカウンターに並べられていく

「アサルトライフルはAK—47、AK—74の外国版ばっかだな」

「AK—47・・・アイドルみたいな名前」

「鉄板のボケをありがとう」

レンのボケに場がホツコリとした。銃がメインのGGOでは某芸人の『ネットのヤホ
●で検索』並みのテンプレのボケである

「ギネスにも載ってる有名な銃よ。元はソ連が開発した銃なんだけど、砂漠でもジャン
グルでも、どこでも使えるから色んな国がそれを基にした銃を設計してるのよ」

「あとはそんな加工精度が求められないから、テロリストが密造してたりな。だから映
画とかでの『悪役の銃』だな」

「ふーん……」

特に興味惹かれる内容ではなかったのか、シノンとラツシユの解説をレンは聞き流し
ていた

「それで、サブマシンガンは……UZIか。こつちも悪役系か……売れつかない？」
そんな感じで全ての銃がケースから出された

「ついで？ストレージは？」

「ん、今出す」

ラツシユがウインドウを操作してストレージから1丁の狙撃銃を出す

「ドラグノフ」

「知ってた」

店主とシノンが驚く素振りも見せず言った。AKシリーズの銃がケースから大量に出てきた時点で、この流れは容易に予想できたことだった

反応が薄い2人に凹みつつ、もう1丁・・・

「VSS」

「知ってた」

「お願いだから、もうちょっといい反応して・・・」

ラッシュユとしては、必死こいてドロップさせた取って置きの銃なのである

「あれ?でもちよつと待って。今、セミオートの狙撃銃ってあったかしら?」

「そういえば・・・PSG-1やWA2000がドロップしたって話は聞かないな。じゃ

あ、結構レアか?」

「でも・・・」

つとここでスナイパービルドのシノンが少し考え込む

「スナイパーの最大の強みは、相手に最初の1射目のバレットラインが見えないことだから、すぐに2射目を撃ててもバレットラインが見えるから回避は可能よ?」

「対人戦のプレイヤーには需要が薄いか・・・でもMOB狩りには使えそうだな」

「VSSはサイレンサー付きなのはいいけど、それも結局2射目以降はバレットラインでわかるわけだし。あと専用の弾で補給が難しいのがねえ・・・」

「あの、お願いだからそういうのは買い取ってから言つて？こつちは結構苦勞したのよ？」

なまじ不漁であつたことを自覚してる分、強く言えないラツシユであつた

「全部合わせて1000万^{1,000万}メガつてとこだな。狙撃銃はそれぞれ300万^{300万}メガ。残りはまとめて400万^{400万}メガ」

「かあー、厳しい」

査定結果にラツシユが項垂れた。しかし、1000万クレジツト \parallel 10万円なので実は結構な稼ぎである。ちなみに、トッププレイヤーの月当たりの稼ぎが20万 \sim 30万円と言われている。ラツシユはその半分を1回のレアドロ漁りで稼いだことになる

その後、弾代等の消耗品の補充の支払い分を差し引き、900万クレジツトで取引を完了させたラツシユであつた

「またどつか別の狩場でも探しに行くかな・・・荒野、砂漠のダンジョンは行つたし、次は森林、山岳、雪原あたりか？」

「あー、そのことなんだが・・・取り戻すつて考えはどうだ？」

今後の方針を悩むラツシユに、店主がプランを提案する

「今回の件はどうやらお前さんの同業者だけじゃなく、俺のような商人ロールが、対人専門のプレイヤーを傭兵として雇つて荒らしてるのもあるっぽいんだわ。あれで俺も結

構儲けたからな」

「出る杭は打つてか。ネットゲプレイヤーの嫉妬は怖いよな」

「それに今後、お前さんがまたいい狩場を見つけたとしてだ。それが噂になってプレイヤーが集中したらまたお前さんは別の狩場を探すのか？」

「はいはいわかったって。で、どうすんだよ？ 同業者も傭兵も皆殺しにでもしろと？ 俺一人じゃ厳しいぜ？」

「いるじゃねーか。ここにもう2人」

つと店主はシノンとレンを見る。急な話に2人、特にレンは驚く

「ぶっちゃけあと1人、腕の立つやつが来ねーかなと思ってたところだ。報酬は1人100万クレジットで弾代はこっち持ち。3人だから移動は俺がハンヴィーを出してやるわ」

「マジか。じゃあミニガン付けようぜ」

「ゴメン、それはマジやめて。毎分3000発で破産しちゃう」

「そこはブローニングM2でしょ。ヘカートIIと同じ弾なんだから」

「M240機関銃で勘弁してください・・・」

「あ、あれ？ 私だけ？ 違和感持つてるの私だけなの?!

いつの間にか自身の参加が決まっていること、誰もそれに異議を申さないことにレン

はさらに驚く

「あ、あの！本当に私も参加するの・・・？」

「嫌か？」

うーん・・・つとレンは考え込む

「今日初めてPKをしてどうだった？俺に負けてどう思った？」

もつと上へ・・・強くなりたくはないか、おチビさん？

ラツシユの言葉に、レンのモヤモヤした感情は吹き飛ばされた

—私は何のためにこの世界に来た？可愛いレンのアバターでいるためだ。今日初めてプレイヤー相手に負けた。殺されなかったけど、悔しかった。もうあんな思いは嫌だ。じゃあフィールドに出ない？そんなリアルの私のような生き方をレンにさせたくない

強さが、ほしい・・・

「やる。強くなりたいから」

「上出来だ。よっしゃ、勝つぞ！」

「「おーっ！」」

戦争のお時間

荒野を1台のハンヴィーが走行していた

「あーあー、テストス、マイクチェック。本日は晴天なり」

『リアルは雨だけどね』

『それな』

『まったく折角の日曜日に雨なんて・・・』

銃座に就いているラツシュがインカムの調子を確認していたが、車内の3人から鬱陶しそうに返され、涙目になる。そもそもGGO内では、専用の妨害機器を使用されない限りはインカムが不調になることはないのです。敵のいない現状で確認する意味すらないのである

「にしても、決行日がちょうどリアルが雨でよかつたな。しかも全国的に雨とききた」

『ああ、休日の日曜日に雨とくれれば、プレイヤーはほぼログインしてるだろうさ。おまけに、こつちは今日まで一切動きを隠してない。どんなバカでも、なんかやらかすと気付いてるだろうさ。それを予見して逃げるやつらなら、最初から仕掛けては来ない』

『もしかしたら、向こうのプレイヤーたちが結託してるかもしれないわね』

『かもな。どちらにせよこれから行く先にいる奴らが全部、俺らの敵であることに変わりはないが』

1回の戦争で敵をまとめて皆殺しにできるように、店主が意図的な情報流出をして敵側を動かしていた。面倒事が嫌いなラッシュは、1回で済ませられるならと、それを知っているながら放置していた

『大丈夫かな・・・？』

『大丈夫よ。この数日間、ラッシュに付き合っつてMOB狩りして、キャラの強化とプレイヤースキルを練習したんでしょ？』

「ああ、結構筋がいいから、あつという間にモノになった。ぶっちゃけ強いよ。戦術の読み合いなんかはまだ経験不足だけだな。見えてる目の前の敵ととにかく戦えつて場面なら、BOBファイナリストクラスに匹敵するだろうさ」

これからの激戦に、レンが不安になる。しかし、シノンが言ったとおり、戦争の準備と平行してレンはラッシュから戦闘の訓練を受けていた。MOB狩りをしてキャラのレベルを上げ、クレジットを稼いで装備を更新し、ラッシュからプレイヤースキルを学んでいた。この数日間で、レンの強さは格段に向上していた

『にしてもラッシュよ？お前のその格好はなんだ？』

「これからカチコミに行くんだから、正装するのが礼儀だろ」

店主の指摘に、ラッシュユがさも当たり前のように返した。そんなラッシュユの格好とは、高級感のある上下黒のスーツに、真っ赤なワイシャツ、元から金色だったアバターの髪をオールバックにまでして、●クザと見紛う格好であった。首にはLUK型を示すかのように金色の四葉のクローバーのペンダントをしていた

「キマッてるだろ？防弾素材を使ってDEF防御力との両立したから結構高かったんだぜ」

『アホだ』

『アホね』

『アハハ・・・』

酷評の店主とシノン。自身もピンク一色のレンは苦笑いを浮かべることしかできなかった。そんなレンも、ラッシュユからのアドバイスで、目元を隠すミラータイプのゴーグルを着けていた

「おっと、そんなことよりお迎えがきたようだ」

ラッシュユがそう言うと同時に、銃座のM240機関銃を構える。待ち伏せをするために隠れていた敵のハンヴィーが3台、加速して追いかけてきた

「こないだの奴らかよ。燃えた1台を新調したようだな」

ラッシュユの見立てどおり、以前シノンをバギーに乗せたときに襲ってきたプレイヤーたちのように、燃えてスクラップになった1台を新たに購入、他の2台を修理して使い

続けているようだった

『面倒だ。全部スクラップにしちまえ』

「当然」

敵のハンヴィーの銃座からM249軽機関銃の射撃が行われる。しかし、以前に比べて弾幕が薄かった

「持続射撃してーのか、弾代ケチりてーのか知らんが、そんなチマチマした射撃が意味あると思ってるのか？」

発射レートを毎分100発に落とされたM249軽機関銃の発射に対し、ラッシュユが銃座からM240機関銃で7・62ミリ弾を撃ち返す。初期設定の発射レートである毎分750発もの早さで連射される弾丸で、敵ハンヴィーの運転席を集中的に攻撃。最初の十数発はフロントウインドウが耐えたものの、その後は貫通を許し、運転席のプレイヤーは死亡した

『ブローニングM2ならもつと楽にやれるのに』

「そういうなら、ヘカートIIでやってくれよ」

失速していく敵ハンヴィーの進路にラッシュユはハンドグレネードを投げ落とす。敵ハンヴィーの真下でそれは爆発し、銃座のプレイヤーごと敵ハンヴィーを完全に破壊する

そんな攻撃の様子を窓から見ていたシノンがじれったそうに言い、2台目への攻撃に移っているラツシユが返す

『嫌よ。50キャリバーは安くないのよ。この先でたつぷり使うから無駄撃ちしたくないわ』

「その本来の用途は対物だろー!」

シノンの拒否に、ラツシユは叫びながら2台目の運転手を殺した。それと同時に100発給弾のベルトを1本撃ち尽くした。1台目と同様にハンドグレネードで2台目を処理する

「だー、めんどくせー!」

給弾ベルトの交換の手間を惜しみ、M320グレネードランチャーで40ミリグレネードを3台目に放った。ボンネット上で榴弾が爆発し、衝撃波と弾殻の破片がフロントウインドウを破壊して運転手を殺すと同時に、ボンネットを突き破ってエンジンを破壊した

「クソツ、50キャリバーより数を用意してない40ミリグレネードを使ってしまった・・・」

『このチーム、大丈夫かな・・・?』

『さあな・・・ま、鉄火場になればキツチリ呼吸を合わすだろうさ』

荒野の先にある遺跡を模したダンジョン。その中層にある少し開けた空間。バラけて沸くMOBを集めて一網打尽にすれば、それはそれは美味しい狩場になる、ラツシユのお気に入りの狩場の1つだった場所。そんな場所に4、50人ほどのプレイヤーが集まっていた。MOBが沸くにもかかわらず、誰一人として光学銃を装備していない異様な集団である

「道中の襲撃を担当した奴らから連絡が来た。全員やられてグロツケン送りだよ」

「使えねーな、おい」

「ま、元々あいつらで片付くとは、欠片も思ってたがな」

そんな言葉に、集団に下品な笑いが広がっていく

「それで？ここにはいつ来るんだ？」

「まあ待てよ。上の遺跡入り口にスカウトを忍ばせてるから、そつちからの連絡待ちだ」
「早く来ねーかなあ。ここでぶち殺すために、わざわざ遺跡内の道中にトラップを1つも仕掛けなかったんだからな」

集団のプレイヤーたちは、これから来るラツシユたち4人を殺すために集まった傭兵であった。もはやドロップ漁りのプレイヤーたちは、襲撃による弾代の出費と狩場の利

益が割に合わないほとんど撤退してしまっていた。一部諦めの悪いのが商人ロールのプレイヤー同様、傭兵を雇ってこの場に送り込んでいた

「まだ連絡は無いのかよ?」

「そう慌てるなつて、仮に連絡あったからつて、そこから徒歩でここまで降りて来るんだ。まだまだかかる・・・」

だろうよ。つと言いかけたプレイヤーの言葉が止まった。否、この場にいるプレイヤーが動きを止めた。普段、ダンジョン内ではまず聞こえない種類の音が聞こえ出したからだ

それは車の、エンジン音だ!

「襲撃だ! 来やがった! 奴らダンジョン内をハンヴィーで突っ込んできてるぞ!」

「イカレてるぜ!!」

「スカウトの連中はどうなつてんだよ?!」

一気に慌しくなる集団。準備もまだ整わないそんな集団の前に、ハンヴィーが1台突入してくる

「ハロー! 機嫌いかが?!」

銃座から7・62ミリで掃射しながらラッシュが集団に向かって叫ぶ。ハンヴィーは開けた空間でドリフトターンで車体を180度旋回、銃座のラッシュもそれに合わせ

て動いて照準を集団からブレさせない

「パーティーだ！盛り上がりすぎていいこうぜ!!」

ベルト一本撃ち尽くすと、銃座からルーフに登ってM320グレネードランチャーを発射、HPの削れていたプレイヤーをまとめて死亡させる。そのままラッシュはルーフから飛び降り集団に突撃する

後部座席のドアからレンが飛び出てラッシュに続き、ハンヴィーは一旦入ってきた道を戻って戦場を離脱する

「敵は2人だ！殺せ！ぶっ殺せ！グホオアツ！」

「指示がないと動けねーのかよ？程度が知れるぜ」

やたらと叫んでいたリーダー格と思われるプレイヤーに、ラッシュがセミオートショットガンのスパス15で軍用の6粒の散弾をお見舞いした。自動小銃を構えていたそのプレイヤーは、頭部、左肩、左肺、腹部2箇所、左大腿部に弾を喰らい死亡した「さあ踊れ！つまんねーステップ踏んでるヤツからブチ抜いてやる」

それにしてもこの男ノリノリである

一方そのころレンは・・・

「ロリだ。ロリがいるぞ・・・」

「お嬢ちゃん、ここは危ないよ。お兄さんが殺して安全な場所に送ってあげ・・・っ?!」
変態ロール(?)のプレイヤーがレンに狙いを定めた瞬間。レンの姿がブレて消えた。そのプレイヤーは次の瞬間、顔の下から不自然な風を感じ、目線を下に向けた。「確かにこの程度なら私でも戦えそうかも」

1メートルも無い距離までレンが接近していて、下から自身の頭にミニUZIを向けられていた。そのまま9ミリの連射を喰らって変態は死亡した

「このロリ強いぞっ?!」

「うわ幼女つよい!」

傭兵たちがレンに対する認識を改め、銃を向けた。だが、レンがミニUZIを横に振って薙ぎ払うように弾をバラ撒き、彼らは一瞬動きを止められてしまう

「ハッ、所詮は9パラだ。アーマー来てりやダメージなんざ・・・」

弾を喰らった1人が少ない被ダメージ量に強気に出ようとしたそのとき、足元にハンドグレネードがコロコロと転がってきた

「グ、グレネツ?!」

最後まで言い切りことなく爆発に巻き込まれ、まとめてグロツケンに送り返された。その間にレンは空になったマガジンを交換して次の敵に向かっていた

「なんだこの幼女?!中身闇風かよ?!」

「幼女怖い！」

かのGGO対人戦最強と謳われるプレイヤー、闇風を彷彿とさせる戦闘スタイルに、傭兵たちが恐怖する

そこへ、一時戦場を離脱していたハンヴィーが戻ってくる。銃座にはヘカートIIを構えたシノンがいる

『どんくらいヤってる?』

「多くて10人くらいってところよ。よかったわ。出番が残ってる」

っと言つて歯を見せて笑みを浮かべ、狙撃に入るシノン。50メートルもない距離の狙撃に、バレットラインによる予告などもはや意味は無く、傭兵は頭をブチ抜かれた

『一応言つとくが、お前さんの最優先事項はこのハンヴィーの防衛だからな。2人の支援はその次だ。歩いてグロツケンまで帰りたくなかったら、キツチリ役割を全うしてくれよ』

「わかってるわよ」

運転席の窓から1人、高みの見物と洒落込む店主であった

快進撃を続ける4人(3人?)。ラツシュとレンが集団の中に飛び込んで戦っている

ため、敵が同士討ちを警戒して攻撃しにくい状況であることも大きく、すでに30人の上をグロツケンに送り返していた

「なんかさつきから、予測線のない弾が飛んできてんだよな……」

ラツシュが戦いながら、自らを掠めるように飛んでいく弾に不思議がる。1射目を射撃後は強制的に発見状態となり、一定秒数後の認識リセットが行われるまでバレットラインが表示される仕様のGGOにおいて、それは違和感のあるものであった

「シノン、なんかラインが見えない射撃で俺を狙ってる奴がいる。頼めるか?」
『わかったわ』

インカムに手を当ててオンマイクにしてシノンに支援を要請する。集団の中でも一人だけスーツ姿の異様なラツシュはすぐに見つかり、スコープ越しにラツシュを見た。相手をしている傭兵たちとは別の方向から弾が飛んできているのが見え、それを追って射手の居場所を探すと、戦場の隅にある倒れた柱を台にして、狙撃をしている大男がいた

「なるほど、トリガーに指をかけると同時に引くことで、バレットラインが出ないわけね。そんな方法があったとはね……ラツシュ、少しでも耐えてなさい。どうせ当たってないならいいでしょ?」

『なるべく早くしてくれよ?』

シノン は 敵 スナイパー の 動き を 観察 し、 ライン 無 し 狙撃 の 原理 を 見破 っ た

「ちよつとアンタ、銃座こじに就きなさい。優先順位が変わつたわ」

「オーライ。だが期待せんでくれよ」

「歩いて帰りたくないなら、しつかりやることね」

シノンは銃座からルーフに登り伏射の体勢になると、敵スナイパーを狙う前に試しに他の傭兵を、同じ方法で狙つてみる

—トリガーに指をかけないから、バレットサークルも出ないってことね・・・

シノンはとりあえずスコープに付けられた十字の照準を当てにして撃つてみた。しかし撃つた弾は相手の頭上を通過して外れた

「オーケー、大体わかつたわ。つまりはシステムアシスト無しの完全にマニュアルで照準を定めるわけね。上等よ。やってやるわ」

たつた1射でライン無し狙撃の理屈を理解したシノンは、いよいよ相手のスナイパーを狙う

—銃口初速825メートル毎秒の弾が、約50メートル進むのにかかる時間、その間に重力によつて落ちる高さ。それと今のヘカートIIのゼロインの距離を考えて・・・風は屋内だからほぼ考慮しないでいいだろう・・・

シノンの頭の中で様々な計算がなされ、ヘカートIIの照準が定まっていくな。大きく息

を吐き、集中を高める

——(こ)！

一気にトリガーに指をかけて引く。ガク引きによる照準のブレを警戒して、グリップを握る手にはやや力を込めて銃を固定する

「まあ、ビギナーズラックってどこかしら？これは要練習ね：ラツシユ、敵スナイパー沈黙したわ」

シノンが撃った弾は、敵スナイパーの頭にギリギリで命中し、大口径弾のインパクトダメージでHPを削りきって殺していた

ふうつと一息つき、少し疲れた声で目標の撃破を伝えたシノンだった

「スマン、助かった。別に当たりはせんがチラチラ飛んでる弾が見えて、気が散って仕方が無かったんだ」

「チツ、エムが死にやがった。あいつリアルで覚えてるよ・・・」

狙撃の支援が途切れたこと、そしてラツシユがシノンに礼を言っている内容が聞こえ、スナイパーが死んだことを知り、舌打ちをした女性プレイヤーが1人。そのプレイヤーはラツシユに向かおうとして、付近にいた別の傭兵の腰にあるハンドグレネードを見つけ、ニヤリと顔を歪ませた

「おらよつとー！」

その傭兵をドロップキックでラツシュに向かってふっ飛ばす。それと同時に銃でグレネードを撃ち抜いた

「っ?!」

「なにしやが・・・」

蹴り飛ばされたプレイヤーは、味方とは言わないまでも、最低限敵ではないとする協定を結んでいた同じ傭兵からの攻撃に怒りを露にした。しかしグレネードが爆発寸前なため、ラツシュにショットガンを撃たれて押し返され、最後まで言い切る前に爆発四散した

「お前！なにやって・・・」

「敵の前でゴチャゴチャうっさいんだよ」

女性の行為に文句を言おうとした傭兵が逆に女性に撃ち殺される

「なんだ仲間割れか」

「仲間？アハッ、仲間ねえ？」

ラツシュの言葉に、女性は狂ったように笑う

「命も匿名性も担保されたVRゲーで仲間？笑えるわ・・・笑いすぎて死んじゃいそう」

「あー・・・なら勝手に死んどけよ。笑って死ぬるのはいいことだ」

ラツシユは女性が狂人ロールだと思い、まともに付き合おうと疲れそうだと適当に返した

「じゃあ殺してよ。じゃないと殺すから」

「おーおー、おつかねえ。僕泣いちゃいそう」

挑発に挑発で返して撃ち合いが始まる。しかしラツシユにとつて敵は彼女だけではない。他の傭兵をSTR任せのスパス15の片手撃ちで片付けながら、左手でデザートイーグルを抜いて彼女に応戦する。LUK補正の効いた弾を彼女は避けてみせた

「ほう、避けることができるのか・・・レン、シノン、生きてるか？」

『生きてるよー』

『生きてるわよ』

スパス15の弾が切れ、苦しくなってきたラツシユ。デザートイーグルで周りを牽制しつつ下がって距離を取り、インカムをオンマイクにして2人に生存確認の連絡を入れた

『俺はどうでもいいのか？』

「ハンヴィーさえ無事なら、俺が運転して帰るだけだからな。それより手練と当たった。ザコを裁きながらじゃ少しキツイ。フォローしてくれ」

店主のツツコミを流しつつ、2人に援護を頼んだ。デザートイーグルの残弾を女性プ

レイヤーに連射する。デザートイーグルがホルドオープンすると同時に最後の弾が彼女の足を掠めた。命中により僅かな硬直が発生した隙に、ラッシュは急いである場所に向かう

『あの女ね？確かにやるわね。躊躇が無いっていうかなんていうか・・・』

『まるでタイのどこぞにある犯罪者の街から来たようなプレイヤーだな』

「ああ、イカレ具合が特にな！こいつは俺がやるから他を頼む」

他の傭兵たちをレンとシノンに任せ、ラッシュは敵スナイパーが使用していた倒れた柱を飛び越え、一旦身を隠すと柱に背中を預けてスパス15とデザートイーグルのマガジンを交換する

「つたく、マガジンの装弾数が少ないのがコイツらの欠点なんだよなあ。サブにマシピスでも持つて来るんだった」

スパス15もデザートイーグルもマガジンの装弾数が10発にも満たない

ボヤいてる間に女性プレイヤーがラッシュに迫る。柱の上に飛び乗り、上からラッシュに銃を向ける

「休憩？殺してあげるからゆっくり休めよ！」

「吹くなよ死にたがり。深追いは二流のすることだぜ」

ノールックでスパス15を彼女に向けて撃つ。彼女は咄嗟に仰け反って回避するが、

6粒の内3粒が腹部と左右の胸_{下チ}下部に当たる

「っー！」

「残念、貧乳だったらもう2個は避けられたのになっ!!」

散弾を喰らった衝撃で彼女の体は浮き上がり、空中で隙が生まれる

「コノヤロオツ!!」

「あばよ死にたがり。強かったが、つまんねーダンスだったぜ」

ラツシユは仰向けになりながら柱を蹴って背中地面を滑って距離をとり、彼女にスパス15を撃ち込み倒した

「絶対ぶつ殺してやる・・・」

終始笑みを浮かべて戦っていた彼女だったが、最期は怒りに表情を染めてグロツケンに送り返されていった

「そんな捨て台詞は聞き飽きたよ。なんだ、死にたがりの癖に、やられりや怒りの感情も沸くんじゃねえか」

『負けて怒ってたわけじゃないと思うけどなあ・・・』

『ラツシユ最低』

レンとシノンの冷たい声での非難がインカムに入り、ギョツとする。ラツシユは援護を頼むときにインカムをオンマイクにしてから、オフマイクにするのをすっかり忘れて

いたのだった。戦闘に夢中で普通にインカムで会話をしていたことに気付かなかつたのだ

「え？なに？聞つこえなーい。インカムの不調かなー？」

立ち上がったラツシユは、冷や汗が出てきた気がしたが、すつ呆けることにした

『まだ敵残つてんだから油断すんなよ。戦争は最後の1人を以つて半分と思え、だ』

「手練はあいつくらいだろ。あとはザコばかりだ」

戦場を見回し、残りの敵戦力を分析する。ラツシユの言うとおり、残りは10人ちよつとだが、強そうなプレイヤーは見当たらないようだった

「ま、キツチリ全員グロツケンに送り返してやるさ。徒歩で帰らせるのは可哀想だからな」

ちなみに、最後まで残つた敵がグロツケンに送り返されたのは、この3分後にことである

「コレで全部かー？」

「ええ、もう無いみたいよー」

戦場に散らばっている、死亡したプレイヤーがドロップしていった銃を1箇所に集め

る

「おーおー、随分あるなー。これ全部売ったら30000万^{30000万}はいくな」

「ちよつと、もつたいないかも・・・」

山のように積み重ねられた銃を見て、レンが残念そうに言う。なんと積み重ねられた銃の下には爆薬が仕掛けてあり、これから爆破して全ての銃を破壊するので

「ま、これで俺らも・・・ってか俺の店も、今回の戦争での収入はゼロで大赤字ってことだ。傭兵の雇い主共も大損こいたんだから、痛み分けてやつさ」

店主が撮影端末を準備しながら淡々と事情を説明する

ラツシユやレン、シノンは店主から報酬の100万クレジットが渡されるので収入が無いわけではない。しかし店主は今回の戦争で一切の収入は無く。その上さらに、3人の弾代、ハンヴィーに付けたM240機関銃の弾代に、ハンヴィー自体の燃料代と整備費、爆薬の費用などの支出があるのだ。その額は数百万クレジットに上る

「ちなみに俺も報酬の100万じゃ、このスーツのジャケットも買えんから、大損なんだけどな」

「そんなことは知らん」

「私も銃やゴーグル買ったから、丸々100万クレジットじゃないなあ・・・」
「なら丸儲けは私だけね」

シノンが少し勝ち誇った表情をした。今回の戦争の準備でシノンが新たに購入した装備は無く、弾は店主持ちなので経費に入らず、100万クレジット丸々懐に入ることになる。しかも戦いの中でバレットライン無しの狙撃という新たな技術まで学んだのだ。まさにシノンの一人勝ち状態であった

「よし撮影準備できたぞー。そんじゃファイナーレだ」

動画撮影を開始し、ハンドグレネードを1個投げる

「これにて戦争終結つと」

グレネードの爆発が爆薬を誘爆させ、全ての銃の耐久値が一瞬で全損し、銃は木っ端微塵に吹き飛び、光となって消えていった

この後に、特定のプレイヤーの狩場の占有や締め出しを禁止したりといった、所謂暗黙のルールが広められ、この1件は終息した・・・

・・・わけではなく

「全く、対MOB屋だからザコだつて？騙しやがつてあの糞バイヤー共」

「ぶっちゃけ、あいつがああ狩場を回せば、レア銃が多く出回るんだろ？いいんじゃないね

？」

「そうだな。俺ら対人戦屋からすればそっちのほうが得だし、ほっとこうぜ」

傭兵として参加していた対人戦プレイヤーたちが、自分たちの利益を取り、雇い主だった小狡い商人ロールのプレイヤーたちと距離を置いたことで、本件は終息を迎えるのであった

2025年12月

1話

1人の女性がいた

—うう、やつぱり見られてる・・・ハア、早く帰りたい

周囲が振り返るほどの高身長・・・スタイルのよさで、颯爽と歩く女性、小比類巻香蓮。GGOでレンのアバターを動かしている女子大生である

—東京に来れば、何か変わると思っただけだな・・・

高身長故に周囲から浮いた存在となり、嫌気が差して半ば無理やり北海道から大学進学と共に上京してきた彼女。しかし価値観が多様化した大都市東京であっても、彼女の高身長は好奇的であった

そんな周囲からの視線を不快に感じている香蓮は、帰宅のために駅へと向かう足を早めた

—今日もGGOに入ろう・・・そういえば今週末は確か大会が・・・BOB、だっけか？どうしようかな・・・シノンさんは出ると言ってたな。店主さんは出たほうがいいって言ってた・・・けど、ラッシュュさんは出ないみたいだし・・・この間の戦争は楽

しかったなあ。また一緒に戦いたいなあ・・・

気付けばネトゲの思い出に浸っている自分がいることに、ちよつとイヤな気分になる
—ダメだダメだ。これじゃネトゲ廃人一步手前だ・・・切り替える。今はまだ現実世界に
界にいるんだ

足を止め、軽く頭を振って悪い思考を振り払う

「ん？」

つと、そんなふと足を止めた場所、そこから見えるビルの間の細い路地、奥でなに
かをしてる集団がいた。少し目を凝らしてみると、その集団は制服姿の女子高生であつた
「朝田さん、また貸してくれない？あたしら友達でしょ」

「まだ前の返してもらってないけど・・・」

「それは今度返すって」

—これは所謂、カツアゲというあれですか・・・？うわあー東京恐ろしー

自身が高身長故、特になにかのスポーツをしていたわけでもないのに体格がよく見え
ることから、実家が裕福でもそういう方向のトラブルには縁がなかつた香蓮。ほんの少
しだけその身長に感謝した瞬間であつた

「いいから、とつとと出せって言ってんだよ!!」

—どうしよう・・・関わらないのが一番だけど、見ちゃったもんなあ・・・

空を見上げ、手で顔を覆った香蓮。GGOのレンならば間違いないほつといて逃げただろう。あれはそういう世界観のゲームでもあるが・・・

なんて香蓮が躊躇している間に、事態は悪化する。お金を集められている少女が、口を押さえて嘔吐しそうになる。明らかに体調の急変に、香蓮は咄嗟に体が動いた

「なに、やってるの、あなたたち・・・？」

路地に足を踏み入れ、声を出す

「なにオバサン？関係ないんだから引つ込んでよ」

「その子、嫌がつてるじゃない」

—お、オバサン?!このクソガキが！私はまだ19歳だ！

女子高生の物言いにイラツとするが、GGOでの経験からこの手の言葉に乗るのは悪手であることは身に染みており、サラツと流す

「友達同士でじゃれあってるだけじゃん。オバサン、そんなこともわからないの？」

「その友達、体調悪そうだけど？友達なら休ませてあげるのが普通じゃない？」

「いちいちうつせえんだよ！どっかいけよババア！」

—あ？今何だったこのガキ？

地元の人付き合いで色々不快な経験をし、耐性のついている香蓮も許容できる範囲というものがある。未だ体調が悪そうな被害少女のことを考えると、早期に事態の解決を

図りたかったこともあり、強攻策に出る

「言つていいこと悪いことつてあるんだよ?」

所謂目の笑つてない笑顔で、カバンを地面に置く。拳の関節をポキポキと鳴らしながら、不良女子高生たちに近付いていく

「うっ・・・」

「なんかヤバくね?」

やや細身とはいえ体格がある香蓮のその行為に、調子づいていた不良女子高生の氣勢が削がれる。もちろん香蓮にケンカの経験などなくハツタリであるが、その体格がそれを感じさせないのだ。本来ならコンプレックスである高身長。しかし、どんな外見も使い方で大きな武器になる。それはGGOで学んだ、現実で使える数少ないことの1つであつた

そして不良女子高生の目の前に立った。不良女子高生はほぼ真上から見下ろされ、圧倒される

「オバサンじゃなくてお姉さんでしょ?・・・クソガキ」

「っ?!」

最後だけ声を低くして脅すように言う。圧倒されていた不良女子高生は言い返す心が折れ、顔を逸らした

「チツ、行こう」

「じゃあ朝田さん。また学校で」

逃げるように去つていく不良女子高生。本当にケンカ沙汰にならなくてよかつたと、香蓮が内心ホツとする。不良女子高生が路地からいなくなると、香蓮は被害少女に向き直る

「あなた、大丈夫？」

「はい．．．なんとか．．．」

未だ口を押さえ、嘔吐感を堪えている少女の体を支える

「あなた、名前は？」

「朝田、詩乃、つです．．．」

—朝田詩音しのんさんかな？ん、シノン？まさかね．．．

香蓮が少女に名前を聞く。少女が乱れた呼吸の中で答えた名前を、香蓮は僅かに聞き間違える

「私は小比類巻香蓮。苗字長いから香蓮って呼んで」

こうして、2人は出会った

「本当に、ありがとうございます」

詩乃を休ませるために、近くの喫茶店に入った香蓮。体調も少し回復した詩乃からお礼を言われる

「ううん、気にしないで」

—あの不良たちもあなたと同じ学校みたいだし、明日以降のあなたのことを考えると、助けたどころか事態は悪化したかもしれないんだけど・・・

イジメ問題の解決の難しさは社会問題として、よくニュースに取り上げられている。それを知っている香蓮は、詩乃のお礼を素直に受け取れなかった

—教師でもない私がイジメ問題に向き合うとは・・・でも首突っ込んだ以上、もう投げるわけには・・・それに・・・

香蓮は、もしかしたら目の前の彼女がGGOのシンンなのではないか?という可能性をまだ捨て切れていなかった

「あ、あのね、やつぱり、ああいうのは親とかに相談したほうがいいと思うよ?」

「親は、いません・・・1人暮らしで、親は地方で」

「そっか・・・1人暮らしか。私と一緒にだ。この春、北海道から大学進学でね」

つとと言う香蓮だが、姉夫婦の暮らす高級マンションの別の部屋で暮らしている自身と、単身上京してきた詩乃では全く違うのだが・・・まあそれは置いておくとしよう

「じゃ、じゃあ、これからは私に言つて？ 私も、この高い身長で、嫌な経験一杯してきたから、わかるんだ。こういうのは溜め込むと悪い方向にしかいかないし、私になにかできるかわからないけど、とにかく話を聞くことだけならできるから」

普段の詩乃ならば、GGOで最強になることで自身の銃のトラウマを乗り越えようとしていて、誰の助けもいらないと心に刻んでいる彼女は、この申し出を断っていただろう。しかしなぜだろうか、同じ地方出身で上京してきた者同士だからか・・・

「ありがとうございます・・・」

詩乃はその申し出を受けた

「それなら、早速連絡先交換しよっか」

そう言つて香蓮と詩乃は、スマホを取り出して連絡先を交換する。電話番号からメルアドレス、トークアプリのIDまで・・・

—これから少しの間、GGOへのログインを控えないとな・・・この子のことを気にかけたいし

ついさつきまで楽しみにしていたGGOのプレイができなくなることに、憂鬱さは全く感じない。この子の助けになることで、自分も前向きになれるのではないか、とさえ思えていた

「レン・・・」

「いつでも連絡してきて大丈夫ですから。詩音^{しのん}さん」

スマホの画面に表示された、香蓮のトークアプリのハンドルネームを呟いた詩乃に、少し距離を詰めようと香蓮は詩乃の名前を呼んだつもりだった

そして、忘れていた可能性が蘇った

「ピンクの暴風・・・」

「っ?!」

詩乃の呟いた言葉に、香蓮がビクツと反応した

「え、ウソ、でしょ・・・?」

スツと顔を逸らす香蓮。もはや肯定しているも同然であった

「そういう詩音さんは・・・やっぱりあのシノンさん?」

「ハアー・・・どこで気付いたのか知らないけど、そうよ。私がGGOのシノン」

大きなため息とともにテーブルに向かってガツクリと項垂れる詩乃

「え?どこって本名・・・」

「私の名前は詩乃よ」

「あー・・・」

—聞き間違っただけか。でもなんていうミラクル

どうやらGGOへのログインは控えなくてよさそうであった

レンとシノン
レンとシノンは早速GGO内で落ち合った。ログイン前に連絡し合っていたこともあり、ログイン地点で2人は合流した

「現実を知っていると、こうも違和感が沸くものなんだ・・・ですね」

「あーうん、今までどおりでいいよ。敬語とかも使わなくてもいいから」

レンの姿を見たシノンがなんとも言えない表情をして思ったことを言う。レンも似たような表情をし、気を使った

「こうなると、ラツシユさんや店主さんのリアルもちよつと気になるかも・・・」

「コラコラ、リアルの詮索はマナー違反でしょ」

興味津々のレンを窘めるシノン。現実とは年齢の上下が逆になったようである

「それじゃ、どこか行く？それとも、ブラックアローで話す？」

「うーん、折角だしどこか入ってのんびりと話したいな。フードエリアのほうに行こうよ」

2人は、いつも向かうブラックアローではなく、飲食が楽しめるフードエリアに行くことにした

ログインエリアから10分ほどグロッケン¹の街を歩くと、レストランやバーが建ち並

ぶフードエリアに着いた

「そういえば私、フードエリアって始めてかも。こっちで食べても何の栄養にもならないからって」

「ならお店は私が選んでいいかな？たまに来てるから」

「ええお願い」

今まで強くなることのみを重視していて、ゲーム内での食に無頓着だったシノン。対して、適度に熱中して楽しむことが目的だったレン。長距離狙撃のスナイパービルドと近距離戦闘のAGI型ビルドなど、正反対なことが多い2人であった

レンの案内でフードコートの中の1つのレストランの前までやってきた

「この海鮮がおいしいんだー。たまに地元の海鮮料理を思い出してここに来るんだ」
「へえー」

そんなことを言いながら、レンがレストランの入り口のドアを開けようとしたときだった。レンがドアの取っ手を掴もうとする前に、中からドアが開けられた

「おっと」

「あつと、悪い。大丈夫か？」

咄嗟に下がってぶつかるのを避けたレンに、ドアを開けたプレイヤーが謝った。もちろん街の中なのでセーフティエリアとなっていて、ぶつかったとしてもHPが減ること

など無い・・・つと、そんなことなど、どうでもいいとばかりにレンとシノンとは固ま
た

「ラツシユ?!」

「ゲツ、なんでお前らが・・・?」

ドアを開けた人物がラツシユであつたからだ。しかも先の戦争のときに作つたとい
う防弾スーツまで着ている。レンとシノンに気付いたラツシユは露骨に嫌な表情をす
る

というのも・・・

「ラツシユ君、お友達かな?」

柔らかな女性の声がラツシユの背後から聞こえてくる。本音としてはこのままドア
を閉めて籠城したいラツシユだが、仕方なくレストランからその女性を伴つて出てくる
「わあ、可愛い子! あらあら、ラツシユ君にこんな可愛い女の子の友達がいるなんて、知
らなかつたわ!」

東洋系の容姿格好をしたアバターのその女性は、レンとシノンを見るや、とても嬉し
そうな笑顔を浮かべて2人に近付き、両手で2人の頭を撫でる

「え、あの・・・」

「ラツシユさん?」

そんな女性の行動に戸惑いつつ、2人はラツシユに向いた。ラツシユは現実逃避するように天を仰いでいた

「つで、ラツシユはどっちが好きなの？」

「ブフツ?!」

GGOどころかVRゲームの世界観をぶち壊す発言に、2人が噴き出した

「ハアー……いい加減にしてくれ、母さん」

「お母さん?!」

大きなため息をつき、女性の正体を明かしたラツシユだった

「ラツシユのリアルは母親のジエーンです。よろしくね」

「ちなみにもうすぐ還れk……」

「VRにリアルを持ち込まない。OK?」

「オ、オーケー」

家賃を払えばプレイヤーホームとして使えるマンションの一室、ジエーンとラツシユが共同で借りているらしいその部屋に移動した4人。リビングのテーブルに4人が向かい合っていた

ジェーンの自己紹介に、ラツシユが余計な付け足しをしかけ、彼の前のテーブルにクナイのような刃物が刺さる

「いくつになつてもストレス発散の場があるつてことが、精神の健康を維持するにはとつても大事なことなのよ?」

「そつすね……」

ラツシユは正論に言い返すことをやめた。決して、次のクナイがジェーンの手に握られていたからではない

「ア、アハハ……えと、レンです」

「シノンです……」

2人のやり取りに若干引きつつも自己紹介をしたレンとシノン。ジェーンもクナイをスツと消すかのように収めて、手をポンと合わせて2人に向き直る

「レンちゃんにシノンちゃんね? まあまあ、ラツシユ君つたらいつたいたいどこでこんな可愛い子たちを引つ掛けてきたのかしら?」

「引つ掛けたつて、俺はナンパ師か。どっちも初めはそつちから絡んできたんだつての」
(絡んだつて、否定できないけど……)

ラツシユの言い方に思うところはあつたが、シノンもレンも、ラツシユとの出会いを思い出し、何も言えなかつた

「あ、あの、その、ジェーンさんは、どんなビルドなんですか？」

話題の転換と純粋な疑問でレンが尋ねた

「うーん、そうねえ、どう説明したらいいのかしら？」

「そのまんまここでやってることを言ったらいいよ」

「そうねえ・・・なら直接見せたほうが早そうね」

そう言うと、ジェーンは席を立ち、レンとシノンを手連れリビングから自分の部屋に向かった。一応説明役でラッシュもついていく

「アトリエが私の工房よ」

ドアを開けて部屋の中を見せた。標準品としてあるログアウト用のベッド、アイテムストレージの収納ボックス、そして多目的デスクがある。一見普通の部屋である

「そしてこれが私の作品の1つ」

ボックスのストレージからジェーンは徽章のようなものを出し、アイテムの説明を表示させた

【四葉のクローバーの襟章】

四葉のクローバーを模した金でできた襟章 LUK+5

「うわぁ・・・」

レンとシノンの声がハモる。まるでブラックアローで初めてラッシュのリード口漁

りの結果報告を目の当たりにしたときのようだった

「ま、まあ、こんな感じで、色々作ってるんだ。ほぼDEXでストレージ確保用の少しのSTRの製作者ビルド。戦闘だと罫メインのトラップマスターって感じた。銃でドンパチするためにやってるヤツがほとんどで、あとは商人ロールくらいしかないこのゲームじゃ、かなり珍しい部類のプレイスタイルだろうよ」

ラツシユが説明をしながらジェーンから襟章を受け取る。代わりにラツシユはジェーンにクレジットを払っていた

「色々ってまさかそのペンダントやスーツも・・・」

「ま、そういうことになる・・・あくまで性能とファツション性の両立のために腕のいい製作者に頼んでるだけで、母親が用意したモノだから使ってるわけじゃないからな。このスーツやペンダントだって、要求性能もデザインも俺がリクエストして、相応のクレジットを支払って製作してもらったものだ」

(あ、その●クザファツションはラツシユの趣味なんだ・・・)

少し恥ずかしそうにラツシユは答えた。いい歳こいて親に服を選んでもらっていると思われるのは、ラツシユの中の人の年齢的に恥ずかしかったようだ。つとそんなラツシユのリアルの人柄が見えると、やはり気になるもので・・・

「ラツシユさんやジェーンさんのリアルってどんなんですか？」

「あ、ちょっと、さっき注意したばかりのことを・・・」

レンは流れてポンツと質問を投げかけた。それを呆れ顔で注意するシノン。ここま
でくると、さすがにシノンも気になってはいたのだが、我慢しようと思っていたのだ

当の2人は、キョトンとして目をパチクリとしていた

「うーん、俺らのリアルなあ・・・」

「簡単には明かせないのだけど・・・そうねえ」

ジエーンは少し考える

「遥か彼方の宇宙から、VRゲームに惹かれてやってきた宇宙人、なんてあたりで、どう
？」

「ジエーンさん」

「不思議な人だったね」

「宇宙人なんて、どう？」

「へって言われてもねえ・・・」

「あんまりリアルに触れられたくないってことなのかな？」

「へそうなのかもしれないわね」

GGOからログアウトした香蓮と詩乃。スマホのトークアプリでやり取りを交わす。内容はもちろんGGOでの4人での会話についてだった

〈そもそもリアルの詮索はマナー違反なんだから〉

〈注意しないとね〉

「うう・・・」

「そういえば」

「B o B」

「私も出ようかな？」

マナー違反の注意から話題逸らして香蓮はB o Bの話題を振った

〈ホント？〉

「だから」

〈？〉

「その日ウチに泊まって一緒にログインしない？」

香蓮は思い切って詩乃をお泊りに誘った。GGOではそれなりに付き合った仲ではあるが、現実では今日知り合ったばかりの2人だ

—断られるかも・・・

恐る恐る返信を待つ香蓮

「へいいの?」

「もちろん」

感触のいい返信に、飛び付くように返した

「へなら、お言葉に甘えよっかな」

やや畏まった文面の返信に、香蓮は小さく笑った

2 話

「お、お邪魔しまーす・・・」

「どうぞ、そんな緊張しなくていいからね」

「いやいや、するって！なんなの、この高級マンションは?! 大学進学の一入暮らしでこんなありえないでしょ?!」

Bobの予選日、詩乃は香蓮の部屋に招かれた。まさに借りてきた猫状態の詩乃は、心の中で香蓮に対し盛大にツッコミを入れる

玄関がオートロックなのは当たり前で、1階には管理人や警備員が常駐していて、高層階と低層階の間にはラウンジまであったのだ。今いるこの部屋の間取りも、明らかに単身者用ではなく家族用の広い間取りである

「す、すごいところに住んでるのね・・・」

「姉夫婦が別の部屋に住んでるから、親がここをね・・・」

「別の部屋?! それって別の号室ってこと?! このお高いマンションの部屋を2つも持つてるの?!」

価値観の違いに詩乃は一瞬眩暈を起こしかける。下手をするとリビングだけで、自分

が住んでるアパートの部屋が丸ごとスツポリ入ってしまいそうな広さである

—お金つてあるところには、本当にあるのね・・・

世界は広いのだ、と少しだけ悟った詩乃であった

GGOへログインした2人

「どうしようか？まだ予選開始までは少し時間あるし・・・」

「ちよつと回復系の消耗品を補充したいのだけど・・・ブラックアローに寄つてる時間はないから、マーケットに行きましょ？」

—ということ、最近行くことのなかったマーケットに向かった。マーケットとは、主にレアリティの低い装備やそこそのレアリティの中古装備が売られている市場である。個人ショップを開けないバイヤーや、バイヤーとのコネクションを持たないプレイヤーがアイテムを販売する場所として利用されている他、地下には射撃場もあり、プレイヤー同士の交流の場としても利用されている

ログインポイントから少し歩くとすぐにマーケットに着く。2人が建物の中に入ると、銃の販売エリアに見慣れたスーツ姿の男性を見つけた

「ラツシュ？」

「あ、ホントだ。ラツシユさんがマーケットにいるのってすごい珍しいんじゃない?」

2人はそんなラツシユに近付こうとして・・・隣にいた長い黒髪の少女のアバターを見て、足が止まった

「誰?」

「・・・ジエーンさんを幼くしたような感じ?妹、とか?」

またしてもラツシユが女性と一緒にいる。GGOは女性プレイヤーは少ないはずなのになぜ?LUK補正で女運まで上がるのか?

2人はコソコソと人ごみに紛れながらラツシユとその少女に近付く

「だから、5. 56とか7. 62ってライフル弾はAGI型の弾なんだよ。例えるならお前の嫁のアスナのように速い突きでダメージを出す感じだな。って、9パラとか。45ACP弾とかの拳銃弾は拳銃スキルで殴る感じだ。あくまで補助であってメインで使うには力不足だな」

「なるほど」

(え?わかるの?今の説明で?)

なんとも滅茶苦茶な説明だが、相手の少女は納得したように頷いている

「お前の使いたいような、STR要求の高い剣に相当するのは・・・ショットガンあたりが近いだろうが、あれはメイスやハンマーの部類だろうしな・・・ってかもう普通に剣

で戦えよ」

「え？この世界にも剣があるの？」

投げやりなラツシユの言葉に少女は、嬉しそうに辺りを見回す。恐らく商品の中からラツシユが言った、剣を探しているのだろう

「ほら、これだよ。フォトンソード。まあこれも補助的装備なんだが、使えないことはないはずだ。刃の実体がないせいで、軽すぎて振り辛いつて欠点があるけど、その分刃の耐久値もないからな。エネルギー切れにならなければ、いくら切つても切れ味は落ちない」

「そつか・・・ラツシユも使ってるのか？」

「俺は・・・もう人は斬らん」

「・・・悪い」

少女の問いかけに、ラツシユは表情を曇らせた。少女自身も失言であったことに気が付き、すぐに謝った

「撃ち殺しはするがな」

「おい」

「ただのポケだった？いや、でも・・・もう人は斬らないって・・・」

すぐに茶化したラツシユに、少女が突っ込む。しかし、シノンにはラツシユの表情や言

葉に気になるものを感じた

「つで、どうすんだ？ エントリー締め切りまで1時間切ったから、早く決めないと間に合
わなくなる。剣をメインにするにしても、距離の関係上サブで銃が必須なのは変わらな
い」

「うーん……」

「それと、武器以外にも買うものはあるんだからな？ 弾に、替えマガジンに、防具に、回
復キットに……」

「……」

珍しく優しくない態度をしているラツシユに、少し少女が可哀想に思えてきたシノン
とレンは、アイコンタクトを交わし、覗き見をやめて出て行くことにする

「ちよつとラツシユ、そんなに責め立てるように言ったら可哀想じゃない」

「ゲツ……またかよ」

ジェーンとの食事が見つかったときのような表情をするラツシユ。追及をシノンに
任せたレンは、相手の少女を観察する

「うーん、やつぱりジェーンさんに似てる？ ジェーンさんを幼くして東洋系っぽさを減
らした感じかな？ つつというより、前の戦争のときの、あの女性に似てるような……で
もあの人よりちよつと小さいかな」

「あ、あのー・・・そんなに見られると、ちよつと・・・」

「おつと、ごめんごめん」

少女の周りを回りながら観察しながらアバターの姿を分析するレンに、少女がタジタジになる

「えつと、ラツシユ?この2人は・・・?」

「その前にお前の自己紹介をしたらどうだ?色々勘違いされてるから」

「?・・・キリトつて言います。ラツシユとは前の前のゲームで一緒に戦ってました」

「?」

キリトという少女の自己紹介に、シノンもレンもなにを勘違いしているのかわからなかった

「アバターの型番は?」

「え?確か、アバターのバイヤーがM9000番台とかつて言ってたな・・・」

「ん?M9000番台?」

「つてことは・・・」

シノンもレンも具体的にM9000番台がどんなアバターなのかは知らなかったが、1つだけはつきりわかったことがあった。頭がMから始まる型番は、女性プレイヤーには与えられない

つまり……

「男?!」

「あ、アハハ……デスヨネー」

2人の驚きの声に、キリトは諦めたように空笑いを浮かべた

その後、なんやかんやで無事装備を整えたキリト。主に面倒見のいいシノンがキリトの所持金内でできるだけいい装備を選んであげたようである

参加締め切りまで余裕を持って総督府にやってきた4人は、ロビーで参加登録をする「あれ?ラツシユさん参加しないって言ってませんでした?」

「ん?まあ……気紛れってやつだ」

参加登録をしているラツシユに、レンが問いかけた。だが、はぐらかしたラツシユに、レンも深くは聞かなかった

参加者待機エリアとなっている総督府地下にエレベーターで移動中、それぞれの予選ブロックを確認すると、シノンとキリトが同じブロックになっただけで、ラツシユとレンはそれぞれ別のブロックのようである

「でも、決勝までは当たらないようだし、勝ち上がればお互い本戦には出られそうね」

「まるで自分が本戦に出るのは確定してるかのようない方だな」

「当然よ。前回も本戦に出てるし、予選落ちするようなら引退するわ」

キリトの煽り言葉を、シノンには自信を滲ませつつ冷静に流す

「後にこの発言を後悔することになるうとは、このときのシノンは思いもしなかった……」

「ちよつ?!アンタが言うのとシャレにならないのよラツシユ!!」

実力もあり、運も持つてるラツシユの予言めいた言葉に、シノンは慌てたように突っ込み、気を引き締めなおすのだった

そしてチーンつと音を鳴らし、エレベーターが待機エリアに着き、ドアが開く

「わあ、すごい人の数……」

「あー……1ブロック当たり64人で、15ブロックだから……うわ、960人もいんのかよ。ホントにそんないるか?」

エレベーターを出て、人の多さにレンが驚き、ラツシユがざつくりと計算して総参加者数を出した。実際には1ブロック当たりの人数は64人よりも少ないし、まだエントリー受付中で全員が揃っているわけでもないのよ、ラツシユの言った人数よりもだいぶ少ないのだが、それでも500人以上は、待機エリアで予選の開始を待っている状態だった

「お、おい、あれ……」

「ブラックアローのこの3人じゃねーか。やっぱBOBに出てくるか」

「どのブロックだ？ 当たるヤツはツイてないな」

ラッシュユヤレン、シノンを見て、待機エリアのプレイヤーたちがザワつきだす

「あ、あの、なんか3人とも、すごい見られてない？」

「こないだちよつとしたカチコミしてな。俺ら3人とサポートのヤツの4人で、50人くらいを皆殺しにしたんだよ」

「うわぁ……」

「ま、強いのは1人か2人で、あとはみんなザコだよ。商人ロールから小遣いほしきのクエスト気分で参加してた金欠のビギナーや、そこそこやってるのに未だうだつの上がないド三流どもだったから」

キリトのドン引きの視線を向けられながらも、ラッシュユヤはなんてことのないように前の戦争の真実を語る。ラッシュユヤの言ったとおり、前の戦争の相手側のプレイヤーは、ほとんどが素人だったり、プレイヤースキルの覚束無い、見も蓋もなく言えばヘタクソであった

「あの黒髪ロングは新しいヤツか？」

「要チェックや！」

「なんか俺までマークされてんだけど？」

「知らん。どうせお前の戦い方なら1回戦終われば嫌でも注目される」

GGO初心者なのにいきなり注目され、キリトは非難の目をラツシユに向ける

「にしてもなんであいつの周りにばっか、可愛い子が集るんだよ」

「金か?! 金なのか?!」

「やっぱ参加するんじゃないかった・・・」

別の理由で向けられる非難の目に、ラツシユは大きなため息をついた

そんな中、シノンとキリトは準備のために更衣室エリアに行くこととした。ラツシユとレンは武装だけストレージに収めている以外、初めから戦闘服でいるので、2人とは一旦別れることに・・・

「ねえ、ラツシユは以前のゲームで・・・」

「?」

「いや、いいわ。なんでもない・・・そっち空いてるみたいだから使うといいわ。私はこっちで着替えるから。終わったたら一緒に戻りましょう」

マーケットでのやり取りがまだ気になっていたシノンは、キリトにそのことを尋ねようとした。しかし、やはり詮索はすべきではないと思ひ直し、そそくさと更衣室に入った

「仮に私が思ってた通りの回答が来たとして、それで私になにができるってのよ……入り口にロックをかけると、体を投げ出すように更衣室のベンチに寝転がるシノン。顔を手で覆い、ため息をついた」

数分後、更衣を終えたキリトとシノンは、ラツシユたちの下に戻る

「シノン」

「ん？ああ、シユピーゲル」

途中、シノンは現実での付き合いのあるプレイヤー、シユピーゲルに呼び止められた。置いていくのも……っと思ったキリトも足を止めるが、すでにラツシユたちが見える位置にいたので、シノンは『大丈夫、行って』っとジェスチャーで伝える

「新しい友達？」

「まあ、そんな感じ。でもB o Bのためにコンバートしてきた人だから、終わったら元のゲームに戻るみたいよ。それよりどうしたの？前に出場しないって言ってたけどやっぱり出場するの？」

「いや、その、どうせ勝てないから、せめてシノンの応援に……」

「そう？」

—レンもシュピーゲルと同じAGI型だし、前回ゼクシードが勝ってあんなこと言っただからって、まだAGI型は終わってないと思うのだけど・・・そもそも運動性能に影響しないLUKにガン振りしてるラッシュはどのようなのよ？

第2回B0Bで優勝したゼクシードは、それまでの主流ビルドであった攻撃を避けるAGI型のビルドではなく、攻撃を受けても耐えられるVIT型のビルドであった。装備によるところが大きかった、と周囲が評価する中、ゼクシードはGGOを特集したネット番組で『AGI型ビルドは終わった』と宣言したのである

しかし、レンのようなAGI型ビルドの新星もいるし、努力次第ではそんなのどうとでもなる、つと言つてシノンに励まそう思った・・・だがシュピーゲルの諦めた表情に、シノンの中の彼への感情が冷めていき、そんな気は失せてしまう

「・・・まあ、ありがと。じゃあ、頑張るわね」

「うん、頑張つて・・・」

そう言つて、シュピーゲルと別れたシノンはラッシュたちの輪に戻つていった。去つていくシノンに、シュピーゲルが何度手を振つても、シノンが振り返ることはなかった・・・

「アントリーが締め切られ、予選が始まったラツシユたち4人は全員1回戦を突破した
「デスガン、か・・・まさかホンモノのキチガイだったとはな」

「ああ・・・腕にあのマークを入れてた・・・」

1回戦から帰ってきたラツシユは、様子がおかしかったキリトから話を聞いていた
「お前がGGOに来てるの見つけて、声かけたらいきなり『B o B に出る』って言い出した時点で、なんか面倒事になってんだろうなって思ってたよ」

「ホント、このアバターでよく俺だつてわかったな・・・」

兄が弟に接するかのようにはラツシユはキリトの髪をグシヤグシヤと撫で回す。ただ、
キリトの容姿のせいで弟が妹に見えるのはご愛嬌である

そうこうしている間に、2人はそれぞれの2回戦のフィールドへ転送されていく

Hブロック2回戦

R U S H 対 P i t o h u i

フィールド：廃車場

直前の待機エリアからフィールドに転送されたラツシユ。周囲にはスクラップの車が
高く積まれていた

「さて、どうすつかな？」

デザートイーグルを片手に、ブラブラとフィールドを歩く。メインのスパス15や、もう1つのサブのM320グレネードランチャーは予選の間は温存するつもりである
「あー、退屈だな」

わざと大きめの声を出して、相手に居場所を教える

「つたく、タイマンで1キロ四方つて広すぎだろ。明日までに終わんのか、この予選・・・？」

それから数分が経ち、やつと状況が動いた。積まれた廃車たちの上から、ハンドグレネードが転がって落ちてくる。1つや2つなんて数ではなく、いくつもいくつも・・・
「最初からクライマックスだな」

デザートイーグルでハンドグレネードを1つ撃ち、時限信管の起爆より早く爆発させ、誘爆させる。積まれた廃車の塔が吹き飛び倒れた

「どしたどした?!これで終わりか?!」

挑発するラッシュ。だがグレネードの爆発に視覚聴覚が向けさせられた中で、相手がラッシュの背後に組み付いた。そのまま相手はラッシュの首にナイフを刺しにかかる

「これならご自慢のLUKも関係ないでしょ?!」

「お前、あのときの死にたがり・・・」

ラッシュは相手のピトフィーが前の戦争で戦った手練のプレイヤーだと認識した。

デザートイーグルでナイフを防ぎ、銃とナイフで押し合いになる中、ピトフィーがもう片方の腕を首に回して締めようとしてくる。ラツシユはそれに抵抗するために、もう片方の手でその腕を掴む

「ハッ、胸が小さくなつたな？サラシでも巻いたか？」

「連れを見てたら、でかいチチは好みじゃないようだつてわかつたからね！」

——つてかこの行為、男女逆ならハラスメントコード抵触で反則負けだろ……ズル臭え分が悪いラツシユは、周囲を見回して、廃車の尖った部分が向き出た場所を発見する

「悪いが電子データの女体には興味ないんだわ。女体はやっぱりリアルに限るつてな！！」

尖った部分にピトフィーの体を勢いをつけてぶつける。尖った部分とはいえ、オブジェクトへの衝突ダメージ以上のダメージは入らないが、突き刺されるような鋭い感触に、ピトフィーの組み付きが一瞬緩む。その隙に背負い投げでピトフィーを引き剥がすと同時に、地面に叩き付けた

「カハッ……」

叩き付けた衝撃ダメージがピトフィーに入るが、ラツシユの攻撃はまだ続く。ピトフィーの腕を掴んだまま、背負い投げの反動を使って倒立っぽく脚を上げ、ピトフィーの鳩尾に膝を叩き込む

「ゴホッ……」

「悪いな死にたがり、今回も俺の勝ちみたいだぜ」

ピトフィーの体に膝を乗つけたまま、デザートイーグルを彼女の頭に向けるラッシュ
「ハッ、ハハハ……」

嘆くように笑うピトフィー。負けを悟り、体から力が抜け、四肢がダラリと地面に投げ出される

「ヤれよ……ここで死んで、リアルでも死んでやる」

「リアル持ち出して、精神揺さぶりかけてるつもりか？ 見苦しいな」

「あの世界に行けなかつた失敗者にはちようどいい最期だろ」

—あの世界ね……この程度で状況で諦めてるようじゃ、なんもできねえよ。しかしこんなこと言うやつが出てくるとは、これが事件の風化つてヤツか

ピトフィーの言葉に、ラッシュの表情から温度が消えていく。デザートイーグルの銃口に目がいつているピトフィーはそれに気が付かない

「そうだな。負け犬にはお似合いの最期だ……お前程度があの世界にいたとしても、始まりの街の宿屋で、布団被つてガタガタ震えながら2年間を過ごし終わりだったろう
「ッ」

「なっ……っ！」

ピトフリーはラツシユの言葉が癩に障った・・が、そこで初めてラツシユがさつきまでとは違う、冷酷な表情をしているのに気付き、言葉が出てこなくなる

「お前の思想に興味はねえよ。こんな命と匿名性が担保されてる場所では、屁にも似たそんな寝言が吐けない時点でお察しのクズだからな。あばよ糞虫」

―せめてリアルで顔を晒して、その寝言を抜かしてみろよ

デザートイーグルの引き金を引き、ラツシユは試合を終わらせた

3話

「やっぱブラックアローの奴らは全員残ってんな」

「あの黒髪もヤベーだろ。光剣で戦うヤツなんて初めて見た」

予選が順調に進んでいく中、観戦しているプレイヤーたちはラッシュユたちの快進撃に、興奮した様子でモニターに喰らいついていた

そんな待機エリアの、目立たない位置のバーカウンターのような場所で、グラスを傾けている男性プレイヤーが1人・・・

「酒飲みながら予選とは余裕そうだな」

「中身はノンアルコールだ。そう余裕こいてられるモンでもないんでな」

その男性の隣の席に着いたプレイヤー、ラッシュユの言葉に、男性はグラスの中身を揺らしながら返す

「噂のLUK型が何の用だ？」

「挨拶だよ。どうやらダチが決勝まで上がれば、お前さんと当たるみたいだからな」

「ほお、挨拶なあ」

男性はグラスを煽りながらラッシュユの話聞く

「ところでお前さんは、決勝に進出した時点で本戦出場は確定なわけだが、その決勝はどうするつもりだ？ 即降り、なんてツマンネー真似しないよな？」

「どういう意味だ？」

「ダチの後学のために、そこそこ本気で撃ち合ってくれないか？ もちろん本戦用の隠しだままで出せとは言わんさ。最後はきっちりお前さんが勝ってくれて構わない」

「後学ね。ツブレちまうかもしれないぜ？」

「見た目と違って、そんな可愛いタマじゃないんだよ」

そう言ったラツシユのアバターが次の試合のための転送準備で光に包まれる

「まああくまでお願いってヤツだ。弾代を出してやるわけでもないから、最後はお前さんに任せる」

それじゃ本戦で、つと言ってラツシユは転送されていった

「・・・」

残された男性は、ふと一つのモニターを見る。ピンクの暴風が相手プレイヤーを襲い、喰らい尽していた

「あんなの見せられて、即降りなんてできるわけねえだろ」

Gブロック決勝戦

LLENN 対 闇風

フィールド：鉄道車両基地

フィールドに転送されたレンは、まず周囲の確認をした。地面は線路と敷石、周りには貨物列車の貨車がある。貨車は空車もあれば、積荷としてコンテナやタンクが載っているものがある。遠くにはクレーンや駅舎、防音林と思える樹木が見える

―足場が悪い・・・全力で走るにはレールが邪魔だし、敷石も足を取られる・・・駅舎の周りならコンクリートで足場もしっかりしてそうだから、まずはそちに・・・

自分のいる場所が不利だと悟ったレンは、移動を始める。一応いつでも戦闘になっても大丈夫なように、今回のB o B用に新しく買ったメインアームであるP90を構えつつ走る

目的地の駅舎に近付き、線路側からホームに上がり、そのまま改札方向に歩く

―相手は私と同じAGI型、そのトッププレイヤー。いつエンカウントしてもおかしくないはず・・・

そう思った瞬間、レンが通り過ぎた駅舎の窓から、ガラスを突き破って闇風が現れる
「っ?!」

闇風の銃から伸びるバレットラインに、回避行動をとってホームを飛び降り、段差に

隠れるレン。闇風の射撃が収まると段差から飛び出して闇風に接近する

『ぶつちやけレンと闇風を比べたら、ビルドの完成度に装備の質、本人のテクや戦闘経験、どれをとっても闇風のほうが上だ』

レンは決勝前にラッシュから言われた言葉を思い出していた

『しかし闇風はAGI型だが、体が大きい。だから5〜10メートルくらいの距離を維持したミドルレンジ主体の戦闘スタイルだ。だけど、レンはその体の小ささで、同じAGI型でも1メートル以内のクロスレンジで戦える。そこに勝機がある』

—喰らいつく！とにかく前へ!!

ホームの上で動きながらの撃ち合い、距離を詰めようとするレンに、闇風はホームから線路に飛び降りる。狭いホームの上だけでは、彼の高すぎるAGI値を全開にして動くことができなからだ

足場の悪さを無視して線路を走る闇風、体が大きいということとは足も相応に長いため、レールの段差も苦にならないようである。しかし体の小さなレンでは足も短いため、体格比で大きく足を上げてレールを越えなければならぬ

—追いつけない、離される!!

『決勝の場所がどんな場所かは、転送されるまでわからん。けど、どんな場所だろうとお前のその小ささが活きる場所つてのは必ずある。お前にしか入れない空間だったり、

あとは闇風が躊躇するような狭い道でも、お前なら全速力で抜けられたりな』

ラッシュユのアドバイスを思い出し、周囲を観察する。転送された地点と似たように、貨物列車が数編成並んでいる

—これなら！

足場の悪さをなくすため、レンがコンテナが載った貨車に飛び乗る。台車の部分からコンテナの小さな突起を掴んでその上へ。これは同じAGI型でも闇風よりDEX値があるレンだからできた業であった。コンテナの上を走ること、足場の問題を無くすことができたレンは、さらに上から闇風を狙うことで、動きの先読みがしやすくなり、当たらないまでも至近弾で闇風の行動を阻害することに成功し、距離を大幅に縮めることができた

—ココだ！一気に行く!!

一気に加速をつけ、P90を連射しながらコンテナの上から闇風に向かって飛び込む。マガジンを撃ち尽くすP90の射撃に、さすがの闇風も足を止めた。そして闇風も撃ち返すが、身を縮めたレンの体には命中弾はない。レンが着地すると、両者の距離は僅か1メートルになった

—ごめんねピーちゃん

着地と同時に、P90を投げ捨て、腰から筒状の柄を抜く。スイッチを入れると、柄

の先から30センチほどのビーム状の刃が発生する

『このビームナイフは、金属製のコンバットナイフより遥かに切れる代物だ。どんなアーマーでも無視できると言っていていくらいにな。接近戦に持ち込んだら、とにかくコイツで切れ』

「たああああつ!!!」

ナイフを構えて地面を蹴り、闇風に突進するレン

しかし、闇風も抵抗をする

「っ?!」

レンと自身の間に、プラズマグレネードをポンツと浮かせるように投げる。突然のグレネードに、レンは驚きで動きが止まる。そしてそれは大きな隙となる

闇風は銃のストックでグレネードを明後日の方向に弾き飛ばすと、レンの首をストックの先で突いて押し飛ばした

「作戦は悪くなかった。腕も度胸もあつた。だが、最後の最後でビビッた。それだけが敗因だ」

空中を舞うレンに、闇風からの射撃が叩き込まれた

Gブロック決勝戦

勝者：闇風

「これで満足か？ LUK型さんよ」

「すげー、闇風相手にあそこまで追い詰めたぞ」

「予選で闇風がグレネード使ったの初めてじゃね？」

「それ以前に、足を止めたのが初めてだろ」

待機エリア、レンと闇風の対戦に釘付けとなっていた観客たちが、対戦が終わると同時に堰を切ったように話しだす

「惜しかったわね」

「もしかしたら・・・っと思っただが、やっぱり闇風が勝ったか。でも闇風も、アレを使わせられるとは思わなかっただろうな」

「あのグレネードって普通のじゃなくて、プラズマグレネードだから結構高いのよね。予選中は温存したかったでしょうね」

「隠しだまは出さんでいいって言ったのになあ・・・」

決勝に進出した時点で明日の本戦出場は確定している。その上で高価なプラズマグレネードを使用してまで勝ちに行った闇風。つまりはそれほど、レンの強さは彼のプライドを刺激した、ということであった

「あなたなら闇風に勝てる?」

「んー、ミドルレンジ主体の闇風とは相性は悪くないけど、よくもないからな。仮に腕が同等なら、フィールドとかそのときのリアルラック次第だな」

「自分のプレイヤースキルが闇風と同等と仮定できるだけ凄いわ・・・」

ラッシュの言葉にシノンは呆れた

「それよりお前さんはどうなんだ? 随分と気を抜いてるみたいだが?」

「私は、決勝は即降りもアリだと思ってるわ。50キャリバーは安くないのだから」

「この観客の熱気を前にしてそれを言えるとは、お前さんの凶太さも大概だろ・・・」

各ブロックの決勝の開始は、それぞれのブロックの進行具合に左右されている。レンや闇風のいたGブロックは、2人の圧倒的な強さによって1番最初に終わったブロックであり、他のブロックはこれから決勝戦が行われる

「でもそうか、即降りするのか・・・キリトに発破かけた意味無くなるな・・・」

「発破って、クロスレンジの剣士ロールが、スナイパー相手にどう戦うのよ? 勝負にならないわ」

「どうかな? ぶっちゃけ俺がこのB o Bで純粹にマークしてるのは、闇風とレン、そしてキリトの3人だ」

「おかしいわね? 私の名前が入ってなかったけど?」

それまで冷静に話していたシノンの声に、震えが混じった

「ああそうだな。だがスナイパーに俺は殺せない。それはスナイパーのシノンが1番よくわかってるはずだ」

「っ！」

ラツシユの言葉に、シノンはカチンときた。しかしラツシユの言っている意味もわかっていった。それは、そのビルドを取っているプレイヤーとしては、理解したくないものであったが……

「キリトを撃ち抜けるなら、あるいは……つと思つたが、即降りなら仕方が無いな」

「わ、私は即降りもアリつて言っただけで、するとは言つてないわ。上等よ！ぶち抜いてやるわ！」

ラツシユに背を向けて転送されていくシノンを、ラツシユはニンマリとホクホク顔で見送った

Fブロック決勝戦

キリト 対 シノン

フィールド：大陸横断高速道

「つて、よりにもよって一本道のフィールドか」

決勝のフィールドに転送されたキリト。左右を壁で閉ざされた一本道。対戦相手のシノンがこの道の先にいることは容易に想像できた

—ま、相手の位置をある程度特定できたことに、今はこのフィールドに感謝しとこう・・・

キリトは肩を窄めつつ、前へと歩き始める。いつでも銃弾に対処できるように、光剣だけを手に持って・・・

『キリト、デスガンがどんな相手か知らんが、決勝でシノンに何もできずに負けるようなら、本戦でヤツと遭遇しても何もできないからな？このゲームに慣れてないお前に、消化試合なんてあると思うなよ』

予選の最中、ラツシユに言われた言葉を思い出す。予選が始まる前は、内心で自身のスタイルが通用するか不安だったキリト。1回戦でその不安はある程度払拭できる戦いができたと思った。しかしその直後、待機エリアでデスガンと接触し、デスガンがS A O生還者で、殺人ギルドのメンバーだったプレイヤーだとわかった。2回戦以降を必死で戦い、勝ち上がるキリトに、ラツシユが言った言葉がそれだった

—どれくらい歩いた・・・？100メートルくらいか？1キロの直線道路で、仮に初期位置が中心から250メートルずつの500メートル離れた場所なら、お互いの後ろ

にも250メートルも道があるのか・・・

道路上にある廃車に身を隠し、後ろを振り返るキリト。スナイパーのバレットライン無しの第1射というもののプレッシャーがキリトの神経をすり減らしていく

—覚悟決めろ俺！過去にケリをつけるんだろ?!こんなところでビビッてどうする?!

深呼吸をして落ち着き、集中しなおすキリト。意を決して廃車の陰から飛び出し、隠れることを止め、道を只管走る

—どこかから狙ってるんだろ?!撃つなら撃つてこい!!

「っ?!」

心の中で相手を挑発したキリト。そのとき、背筋に冷たいものを感じとり、咄嗟に光剣のスイツチを入れる。その次の瞬間、キリトの前方にある大型バスのフロントウインドウが砕け散った

—来た!!行ける!!

「はああああっ!!」

気合一発、タイミングを合わせて振った光剣が、秒速約800メートルで向かってくる12.7ミリの弾丸を切った

「チッ!!」

大型バスの車内で、ヘカートIIを伏射で構えていたシノンはいきり舌打ちをした。相手にはこちらのバレットラインは見えていないはずだった。一本道のフィールドだから、方向は特定されてても、システムの的に位置を認識されているわけではない。落ち着いてバレットサークルを使って正確に狙いを定めて撃つたのだ

—それが剣で叩き切られましたって、どんな冗談よそれ!!

ボルトを操作して廃莖を行って、2射目のためにスコープを覗くシノン

—上等よ。予選じゃやらないつもりだったけど

引き金に指をかけず、スコープの十字と計算で狙いをつける

—位置を認識できて、ラインが出ると思つて油断してるところをぶち抜いてやるわ!
先の戦争で学び、練習を重ねてやっと身に付けたライン無し狙撃で2射目を撃つた。システムアシストを使わず撃つた弾はキリトへの命中コースを突き進む。1射目と違い、フロントガラスを突き破った分のエネルギー損失もなく、両者の距離も縮まってる。キリトから見て、条件は今回のほうが悪いと言えるだろう

しかし・・・

「うそ、でしょ・・・人間業じゃないわ」

1射目の弾同様に切り飛ばされた2射目の弾を見て、シノンの思考は停止する

—もつと引き付けるしか、なさそうね・・・

すぐに復帰した思考で、次の行動を決めたシノン。狙うはキリトの反応できないであろう距離からの射撃。当然、相手からの射撃もくるだろう

—こつちだつてこのゲーム、遊びでやってるわけじゃないのよ!!

シノンの3射目。2射目同様にライン無しの狙撃。距離は20メートルもない近距離。これ以上は俯角がキツくて狙い辛かったため仕方なくこの距離で撃った。シノンは撃った直後、命中確認すらせず、ヘカートIIを抱えてバスの中を後退する。籠城の構えだ

—ここまで追い詰められるなんて、情けないったらないわ・・・でも、だからこそ負けたくないのよ

ウイナー表示が出ない時点で、3射目をキリトがいなしたことを自覚する

—さあ来なさい。アンタの装備はわかっている。私が選んだのだもの。グレネードを持つてないのだから、突っ込んでくる以外に方法はないはずよ

バスの後部途中で膝射で構えるシノン。割れたフロントウィンドウからでも、自分が乗り込んだ正規の乗車口からでも対応できる位置についた

—焦らしたつて無駄よ。スナイパーは待つのも戦いなのだから

持久戦も覚悟し、ヘカートIIを構え続けるシノン

だが、キリトの突入路は、彼女の予想したものではなかった

「っ?!」

シノンのいる位置の右の窓ガラスに拳銃弾が撃ち込まれヒビが入る。音に気付いてシノンがそつちを向くと、そこにはヒビの入った窓ガラスに向かって、突っ込んでくるキリトがいた

「やられたっ！前だけを警戒しすぎた！」

慌ててへカートIIを向けるももう遅い。ガラスを破ったキリトはバス内に侵入し、へカートIIの銃口より接近してシノンの首元に光剣の刃を添えた

「どうして……どうしてそこまで強いんだよ?！」

明らかかな敗北に、シノンの目から涙が零れ落ちた

「たぶん……中途半端だからだと思う。シノンが、何か遊び以外の理由で、この世界で戦っているのは、今の戦いの中でわかった。だから、レンみたいに遊びと割り切れないけど、ラッシュみたいに本当の殺し合いだという認識も、100%でき切れていない。そこが、君の弱さだ」

「アンタは、どうなのよ……?」

「俺も、シノンと同じ中途半端だ……今こうして光剣を一押しできずにいるのが何よりの証拠だ」

だけど……っときリトは続けた

「もう、ラツシユだけに全てを背負わせない。そう決めたんだ」

スツと光剣がシノンの首に触れた。この予選で、1ドットの欠けも許さなかった彼女のHPゲージは、一瞬で全て失われた

Fブロック決勝戦

勝者：キリト

4 話

予選日の翌日

「少し、気分転換しに外に行かない？」

「そう、ね……」

香蓮も詩乃も、予選決勝の敗戦のシヨックを引き摺っていた。まるで葬式かのような雰囲気の中で朝食をとり、お互い何かを話すでもなく、昨日の敗戦をグルグルと頭の中で思い返していた。しかし、これではダメだと意を決し、香蓮は詩乃を外出に誘った

「ここが、私の通ってる大学」

外出に誘った香蓮ではあったが、特に目的地があったわけではなかった。さらに東京に友人がいるわけでもなく、遊ぶ場所にも縁がない。困った挙句に出た場所が、マンシヨンから近い香蓮の通う大学であった

「高校1年生でも、卒業後の進路を考えておいて、損はないからね」

と言つて大学の中を案内する香蓮。しかしいくら外部入学枠があるとはいえ、エスカ

レーター式のお嬢様学校の大学部を見ることが、進路の参考になるのか、疑問の余地があるのは否めなかった。香蓮自身も日曜日に大学に来ることはほぼ無く。どこを見学していけばいいかわからないという始末である

「私自身もあまり日曜に来ることが無いから、どこでなにやってるかわからないし、適当に見て回ろっか？」

「ええ」

そんな感じで、いつも講義を受けている教室を見たり、逆に過去の経験からあまり足を踏み入れたくないサークル活動をしている場所などを回ってみたりした

「結構奥まで来たな・・・ここら辺はもう高等部なのかな？」

あちこち回っているうちに、いつの間にか併設されている高等部のエリアのほうまでやってきた2人。体育館やグラウンドなどが見え、部活中の運動着姿の高校生がそこかしこにいた

「あの、どうかしましたか？」

「え？あ、その・・・友達に大学を案内したら、奥のほうまで来すぎちゃって・・・」
そんな中で場違いの2人に、声をかけた少女が1人。部活中だとわかる運動着姿の女子生徒だった。不意に声をかけられた香蓮は、不審者と間違われたかと勘違いをして、

事情を説明する

「この辺りは、もう高等部なのかな？」

「そうですね。ただ、体育館もグラウンドも大学部のクラブ活動が使ってますので、共有してる感じですよ」

「そうなんだ。ありがとう」

「いえいえ」

女子生徒にお礼を言って、来た道に戻る2人だった

「今の子って知り合い？」

「ううん、違うけど？ただ、通学中にたまに見かける程度かな？どうして？」

「香蓮さんと話せたのが嬉しそうだった気がしたから？」

「みんな、やったよ！さつきあの人と話せた！」

「え？あの人って、ボスがすれ違うときに見てる、背の高くて、髪の毛長い大学部の先輩？」

「そう！さつき、ここに来てたの！なんか、友達を案内してたら来ちゃったんだって！私たちと同じ年ぐらいの子と一緒にいたよ！」

「へえー、じゃあ面倒見とかよさそうな感じ？ボスも今度大学部を案内してくださいとか言ってみたら？」

「って内部生なら1人で自由に行けるでしょ」

「ホッ……」

運動部の活動場所を離れ、香蓮が少し気を緩めた。そんな様子の香蓮を、詩乃は不思議そうな表情で見る

「あ、あー……実はね。中学高校と運動部にはいい思い出がなくて、この身長でしょくく勧誘されて……」

「そう、だったんですか。ごめんなさい、私のせいで……」

「ううん、気にしないで！最近では、ほんの少しだけど吹っ切れてはきてるから。GGOで小さなレンになって、色んな戦いを経験して、少しずつ強くなって……」

「そう……なんだ」

「弱いままなのは、私だけ、か……」

苦手意識を克服しつつあるという香蓮に、詩乃は俯き、表情を曇らせた。所在なさげに持ち上げた右手に視線を落とし、中指から小指までの3本を少し曲げて、止まる

「……」

「強さって、なんなのかな……」

そんな詩乃の右手を、香蓮が掴む。ハッと我に返った詩乃は香蓮を見る

「お昼ご飯、食べに行こっか？」

詩乃ことを心配しているが、聞けない・・・そんな気持ちを誤魔化す、ぎこちない笑顔で香蓮は言う。近くの時計を見ると、もうお昼時を少し過ぎていた

「そうね。そうしましょう・・・っ！」

頷いた詩乃に、香蓮は手を握ったまま歩き出した

「実はずつと行きたかったお店があつてね。でも一人で行く勇気がなくて行けなかったんだけど、今日なら！」

「・・・ありがとう」

グイグイ引つ張っていく香蓮に、詩乃は小さくお礼を言った

マンションに戻った2人は、B O Bの本戦に向け、早めの夕食をとるための準備をする

「聞いてほしいことがあるの・・・」

「ん？」

台所に2人で並んで立ち、夕食を作りながら、詩乃は話を始めた

「私の昔の話・・・」

「うん」

「5年前、小学生だった頃、地元の郵便局で強盗事件に巻き込まれた。私の家、母子家庭で、母さんが精神的に危ういところがあって、そんな母さんがパニックになって」

ポツリポツリと、詩乃は自分の過去を語る

「犯人が、パニックになった母さんに拳銃を向けて、私は、母さんを守るために、その拳銃を奪って……犯人を、撃ち殺した」

「っー」

詩乃の言葉に、香蓮は息を呑んだ

「犯人と揉み合いになって、お腹に1発、次は左肩、最後は……頭に。私は発砲の反動で手の骨が折れて、肩も脱臼した。正当防衛が成立して、罪には問われず、マスコミにも犯人は暴発によって死亡と発表されたわ」

話の内容に、香蓮の料理の手は止まる。そんな香蓮を、あえて見ないようにして、詩乃は1人、料理をしながら淡々と話を続ける

「でも、小さな町で起こった事件だから、噂があつという間に広まって、イジメが始まった。それから逃れるために、進学で東京に来たけど、結局それも無意味だった……」

「ああ、あのときの……」

「あのとき、私が体調が悪くなってたのも、あの事件がきっかけで、私は銃を見ると強い

動悸や吐き気が出るようになった。所謂PTSDってヤツ。銃を連想させられたら、発作は起きるの。だから手を銃の形にしただけでも・・・」

「そっか・・・じゃ、じゃあどうしてGGOに？発作は大丈夫なの？」

香蓮の疑問に、詩乃は自嘲するように小さく笑う

「それが、不思議と仮想空間では発作は起きなくて・・・だからあの世界で戦って、もしも最強になれたなら、トラウマを克服できるんじゃないかって・・・」

待ちの時間で作業の手が空き、そこで初めて詩乃は香蓮のほうを向いた

「これが、私がGGOで、BOBで戦う理由」

「そう、なんだ・・・でもどうしてそれを私に教えてくれたの？」

「知って、ほしかったから・・・その上でこれからの、私との付き合い方を決めてほしいって・・・重いつか、面倒だって思うなら、拒絶して、忘れてくれても・・・」

構わない・・・と詩乃は続けようとした。しかし、そんな彼女の言葉は、香蓮が彼女を自らの腕の中に引つ張り込んで、抱き締めることで止められた

「あの喫茶店で、連絡先を交換したとき、私GGOを止めようと思ってた。その時間使つて、あなたの助けになろうって。GGOのレンより、私は詩乃のことが大切だと思つた。それは今も同じだよ」

「・・・」

香蓮の言葉に、詩乃はゆっくりと香蓮の背中に手を回した。嗚咽する声が漏れ、香蓮はそっと詩乃の頭を撫でながら、空いた手でコンロの火を少し小さくした

午後6時、軽めの夕食をとり終え、食べ物が入った消化器官を落ち着かせる時間をとるために、まだGGOにはログインはしない2人

「前回のB o Bの本戦は2時間くらいだったから、もう少ししたら準備のためにログインしましょう」

「わかった」

時間と量を考えて夕食をとったため、本戦が終わってログアウトした後は空腹になっていることを考慮し、作った料理を後で食べられるように小分けにして保存する2人

「・・・昨日の予選で、わかったことがある。ラッシュユのことで・・・」

「ラッシュユさんのこと?」

「ラッシュユは、あのデスゲーム、ソードアートオンラインの、生還者だって・・・」

「ラッシュユさんが、SAO事件の生還者・・・?」

香蓮はあまり驚いた様子を見せない。薄々、そうではないかと感じ取っていたからだ。当時は深く突っ込まなかったが、思えばB o Bのエントリーのときから違和感を

持っていたのだ

「あの人もきつと、何かを抱えている。私のより、もつと大きくて重い、何かを」

「いったい何があつたんだろう……？」

「わからない……けど、そんなラツシユのところ、同じくS A O事件の生還者であるキリトが来た。間違いなく、今回のB o Bは荒れるわ。出場するのが、怖いくらい。ただのゲーム中の撃ち合いじゃ、終わらない。そんな気がするの」

「でも、出るんでしよう？」

「昨日の決勝で、キリトに言われたの。中途半端だから、私は弱いつて。だから決めたの」

私は、もう逃げない

午後7時、2人はG G Oにログインした。総督府で本戦出場のエントリー確認をして、予選のとき同様にエレベーターで地下の待機エリアに降りた

「あ、あそこ」

レンが指差す方向をシノンを見ると、ボックス席のようところにラツシユとキリトが座っていて、ウインドウを開いて何かを話していた

「闇風から聞いた情報だからな。確度は高い情報だろ」

「そうか・・・この3人の誰かが・・・」

「奴らにしては安直なネーミングだが、現段階で怪しいのはコイツだろうな。ただ、計画を立ててからアカを作ったのか、逆なのかでそれにも疑問が出る。他の2人もマークするべきだろう」

「確かに・・・」

妙に真面目な表情でやり取りを交わしている2人に、レンとシノンが声をかけるのを躊躇った。彼女たちは再び昨日同様に2人にバレないようにコソコソと近付き、会話を盗み聞きし始めた

「ついで、仮にコイツがデスガンだったら、どうするんだ？倒してそれで終わりってわけにもいかんだろ？殺しの方法を探る必要がある」

「そうだな・・・それに、アイツがラフコフの誰かってのも、俺は思い出せていない」「そっちは俺が覚えてる可能性がある・・・が、やっぱ直接見てみないことにはな」

「そうか・・・」

「デスガン？あんなの都市伝説レベルの噂話のはず・・・まさか本当の話なの？本戦にデスガンがいるっていうの？」

ログイン前の嫌な予感が当たってしまったことに、シノンは心の中で盛大に舌打ちを

した

「ねえ、シノン。デスガンって何？」

「そのプレイヤーに撃たれたプレイヤーは、現実でも死ぬって噂のことなんだけど……そんなのできるわけがないし、一種の都市伝説のようなものね」

「デスガンの噂を知らない様子のレンに、シノンは噂の内容を簡単に教える

「でもそれなら、ラツシユさんたちが、本戦前のこの時間に、あんな真面目に話すってことは……」

「いるってことでしょうね。それで、今回の本戦で誰かを殺すつもりなのよ」

「そーいうことだ、お2人さん」

「っ?!」

「会話が気が逸れていた2人は、盗み聞きに気付いていたラツシユの接近に気付かず、驚く」

「その、今の話って本当なの？」

「ああ、残念だが……今回のB o Bの本戦で、ヤツは現れる。そして、現実で人が殺される」

「いつもは見せない真面目な表情で答えるラツシユ

「そこで、2人に相談なんだが……本戦、辞退してくれね？」

「ふざけてんの?」

「デスヨネー」

本戦の出場辞退を勧めたラツシユに、真顔で怒気全開の声のシノン。思わずラツシユがボケに逃げた

「でも現状、方法も標的もわかってない。覚悟はしとけよ」

「上等よ!」

啖呵を切るシノンの後ろに、マジカーつといった様子のレンがいた

「つたく・・・なんかあれば躊躇無く逃げろよ。そういえば母さ・・・ジエーンから2人に渡すように頼まれてたものがあつたんだ」

つとラツシユが言つて、アイテムウィンドウを操作して2つのアイテムを出現させる

【銀の四葉のクローバーの髪留め】

純銀製の四葉のクローバーの髪留め LUK+3

「え?これ・・・もらつていいの?」

「可愛い!」

「2人のために作ったアイテムなんだとよ。本当は昨日渡したかつたみたいだが、ログインできずで今日の午前にできたらしい」

シノンとレンは髪留めを受け取り、装備欄で装備を行う。+3程度で何が変わるかは

不明であるが、初期値よりはマシと言えるだろう

ともあれ、望む望まざるに関わらず、4人はデスガンに立ち向かうことになったのである

「ところで、どうやって闇風から情報もらったのよ？」

「昨日コネクションは作つといたし、その流れで。あのヤロー、情報料だつて抜かしてプラグレ集りやがった。あいつが勝手に昨日の決勝で使つたんじゃねーか・・・」

「あつーあのグレネード！」

「おつと・・・シノンから聞いてなかったか・・・」

「あら？私はそのんこと頼まれた記憶無いのだけけど？」

レンは昨日の決勝を思い出し、ラツシユに詰め寄った。シノンから昨日の件は聞いてるだろうと踏んでいたラツシユだったが、シノンは関係ないといった感じである

「あれ？昨日の予選は試合毎に消耗品は補填されるってルールじゃなかったか？」

「それな、弾薬と装備の耐久値だけなんだつてよ。グレネードや回復キットなんかは、勝つために大量に持ち込んで使いまくるヤツが過去にいたから対象外なんだとよ」

当然B o B初参加のラツシユは、ルールを全て網羅しているわけではない。そこを突

いた闇風の意趣返しであつた

5 話

本戦が始まって、30分ほど経った頃

シノンキルを稼ぎつつ、山岳地帯と森林地帯の合間を流れる川、その川にかかる橋の袂に来ていた

「ダイーン……B o Bの本戦に3回連続で残ってる割には、後ろの注意が疎かね」

ターゲットにされているダイーンというプレイヤーは、隠れているシノンに気付かず橋を渡り始めた。シノンはゆっくりと息を吐き、落ち着いてバレットサークルを使つて狙いを定め……

「動くな」

「っ?!」

突然背後から発せられた声、そして後頭部に拳銃が突き付けられた

「どういふつもりよ、キリト?」

「見ろ」

キリトが前を指して短く言う。シノンがヘカートIIのスコープを覗くと橋の反対側からペイルライダーが歩いてきていた。このままダイーンと戦闘に入ると予想できた

「あの2人の戦闘を観察したい。音を立てて見つかりたくないから、君との戦闘は今回避けたい」

「嫌だ、と言ったら?」

「切る。それなら音を立てずに殺せるから」

「DEADの表示は茂みでは隠れないわよ」

脱落者の表示は遠くからでも見えるように、茂みや障害物で隠れないように高さが変わる仕様になっている。今シノンが死亡すると、茂みの上まで表示が上がることになる

「・・・」

「っ!」

シノンの言葉に、キリトが動揺した。その隙を突いて、シノンが反撃に出る。ヘカートIIを支持していた両手を放すと、ガツとキリトの拳銃を掴む。そのまま対物ライフル持ちのSTRで銃口を頭から無理矢理横にずらす。咄嗟のことにキリトは拳銃を奪われまいとグリップを握る手に力を込める。その弾みで引き金に掛かる指にも力が入るが・・・

「っ?!引き金が・・・」

「覚えておきなさい。銃にはセーフティつてもものがあるのよ」

シノンは銃口を横にずらす際に、安全装置も掛けていたのだ。スナイパービルド故の

DEXの高さが、この手癖の悪さを実現していた

シノンには横に転がりつつキリトのわき腹を肘で殴った。そして自身の上から退かすと、逆にマウントを取ってサブのグロッグ18を抜いて彼に向けた

「形勢逆転ね。あつちの戦いも、もうすぐ終わるようだし」

つと、橋の戦闘の発砲音に耳を傾けると、いつの間にかアサルトライフルの発砲音が聞こえなくなっていた

「・・・どつちが勝った?」

「ペイルライダーのようね。ダインの武装はSIGSG550だったから。発砲音からして、ペイルライダーはシヨットガン使いのようね」

「ダインの死体は残ってるか?」

「さあ?」

キリトの質問に、キリトに視線を向けたまま答えるシノン。橋に視線を逸らした隙を突こうとしたが、失敗に終わり、キリトは内心舌打ちをする

「ハァ・・・わかったわよ。貸しよ。絶対返しなさいよ」

追い詰められ、悔しそうな表情を隠せないキリトに、シノンは彼の目的を思い出し、大きなため息をつけて仕方なくといった表情で銃を収めた。キリトの上から退いてヘカートIIの位置まで戻るシノンに、キリトも起き上がってその隣の位置で観察に入る

「ダインの死体はあるわね。ペイルライダーは・・・弾込めをしてるわね」

橋にはDEAD表示の付いたダインの死体と、その傍らでショットガンに弾を込めているペイルライダーがいた。ショットガンは一部の例外を除き、マガジンの構造上1発ずつ弾込めをしなければならない

しかし、そんなペイルライダーが、どこかから狙撃を受けた

「っ?!」

「あれは、ペイルライダーに何が起こってる?!」

狙撃を受けたペイルライダーは、青白い光に包まれて動けなくなっているが、GGOに慣れていないキリトは、それがどんなものなのかわからない

「あれは電磁スタン弾?! 普通はボスモンスターに使うようなものをなぜ?! 1発でプラズマグレネード並みの値段よ?!・・・えっ?!」

「どうした?!」

「橋の支柱のところに、プレイヤーが・・・いつの間に・・・」

突如現れたプレイヤーは、痺れて動けないペイルライダーに近づく

「あの銃、サイレントアサシン・・・サイレンサー標準装備の対人狙撃銃。電磁スタン弾を撃つたのはアイツよ」

「ヤツだ。ヤツがデスガンだ。撃て!」

「でも殺しの方法とかプレイヤーを特定するって」

「そんなの後でいい!! アイツは今、ペイルライダーを殺そうとしてるんだ!!」

「っ!」

キリトに言葉に、シノン慌ててヘカートIIを撃った。急いでいたため、バレットサークルを使用して照準速度を短縮した方法で狙撃を行った

シノンの撃った弾は、ペイルライダーの傍に立つデスガンに向かって飛び・・・命中する直前で回避された

「なっ・・・アイツ、ラインが見えてる。私たちの位置を認識してるわ。なら・・・」

すぐにボルトを操作して廃莖を行って、ライン無し狙撃に移行するシノン。デスガンは回避した体勢から、再び元の体勢に戻り、ペイルライダーにハンドガンに向けた

「これならどうよ・・・」

ライン無し狙撃で撃たれた2射目・・・しかし、その2射目も直前で回避された

「なんなのよ?! アンタといい、ラインが見えないはずなのにどうなってんのよ?!」

「殺気だ」

「はあ?!」

「だから、そんな殺気垂れ流してたら、ラインなんて無くてもわかるって言ってるんだ! オカルト染みてるかもしれないが、わかるんだよ!」

キリトからの説明を、シノンには理解できない。しかしそれも仕方ないことだろう。急にそんな超能力的第六感を信じろと言うほうが無理があるのだ

「つたく、SAO生還者つてのは、みんなそんなシックスセンス持つてんの?!」

毒づきながらのシノンの3射目を、デスガンは避けると同時に、ハンドガンでペイルライダーを撃った

「っ?!」

キリトとシノンは、撃たれたペイルライダーの様子を確認する。電磁スタン弾の効果がか切れ、青白い光が消えたペイルライダーは、スツと立ち上がり銃をデスガンに向けた。しかし、急に胸を抑えて苦しみだし、やがて回線切断の表示を残し、アバターが消滅した

「・・・どうなったの?」

「ペイルライダーは死んだ。死んで、アミユスフィアが脳波を読み取れなくなった。だからアバターが消えた」

「信じられない・・・」

デスガンはその場から去りながら、徐々に体が薄くなっていき、最後には完全に姿が消えてしまった

「知ってたのか？俺がSAO生還者だって……」

「あれだけ臭わす様なこと言ってたらバカでも気づくわ。それと、さつきはごめんなさい……あまり、言っていないことじゃなかったわよね」

「デスガンが消えて、サテライトスキャンでもその位置がわからず。2人は僅かな可能性から、マップ中央部の廃都市地帯を直指すことにした」

「ねえ、その、聞いていい内容じゃなさそうだけど……」

「なんだ？」

「ラツシユはSAOでいったい何をしたの？」

「っ！」

シノンの質問に、キリトは思わず足を止めた

「本人がいない場所で聞くのは、自分でも非常識だと思ってる。でも、本人がいる場所だと、絶対に聞けそうにない内容だと思っただから……」

「聞くと絶対後悔する。ラツシユも、きつとそれを望まない」

「人を、殺したから？」

「……」

シノンの問いに、キリトは視線を逸らした

「決勝でのあの言葉……もしかして、あなたも、なの?」

「……そうだ」

キリトは苦しそうな表情で、短く返した

「俺はあの世界で4人……ラッシュはもつと、それこそ10人20人って単位で、人を殺した」

「っ!」

「俺はあの世界で『赤斬り』って呼ばれてた。SAOはな、頭の上にカーソルが出るんだ。普通のプレイヤーはグリーン、傷害行為や窃盗行為をした犯罪者はオレンジってな」

「廃都市地帯の東、草原地帯との境界付近。運よくレンと合流できたラッシュは、サテライトスキャンまでの待ち時間、世間話のように、自分の過去を語り始めた」

「だけど殺人をやるプレイヤーは、自分たちをレッドプレイヤーと言っていた。それを斬るから赤斬り。俺はPKKをしたんだ。あの世界の治安の全てを背負って、レッドプレイヤーを殺していた。それで気付けばレッドも真^{ブルー}青になるほどの数のプレイヤーを殺してたってわけだ。最後のほうは俺も奴らと同じような評判だったよ」

「織り交ぜたジョークも、全く笑えないほど、ラッシュの話は重かった」

「どうしてそんな話、私に聞かせてくれたんですか?」

「デスガンは、俺があの世界で殺し損ねて、生き残ったレッドプレイヤーだ。何も知らないまま戦わせるのは、卑怯だと思ったからだ。それに、戦闘中にデスガンがポロッと今の内容を言ったら、何も知らなかったら間違いなく動揺するだろ。下手すりゃその隙に撃たれて・・・死ぬぞ」

「だからって・・・」

「そんな危険な状態になる可能性は潰しておかなきゃならん。例え、俺という人間の見た方が180度変わろうとな」

「っ!」

「オウフツ!」

ラツシユの言葉を聞き、レンはカツとなった。P90を置いて、素手でラツシユの腹を思いつきり殴った。STR値の低いレンのパンチは、ダメージは全くなかったが、ラツシユは咳き込み、膝を付いた

「バカにしないでください! 私が、私たちが、そんなことでラツシユさんから離れていくと思ってるんですか?!」

「そんなことって、結構でかいことだと思うが・・・」

「ついこの前、私はシノンと偶然リアルで出会いました。今日、ログインする前、彼女の

過去の話を聞きました。子どもの頃、強盗事件に巻き込まれて、正当防衛で人を撃ち殺したって。それから、銃に強いトラウマができて、PTSDになってるって……それを克服するために、GGOで戦ってるって」

「人の過去を勝手に語るのは、どうかと」

思うんだが……つと続けようと思った言葉、しかしレンがラツシユを抱き締めたことで、遮られた

「シノンも、リアルで同じことを言っていました。自分の過去の話を聞いて、その上でこれからの付き合い方を考えてほしいって。だから、ラツシユさんにも同じことをして答えてます。変わりません、何も……私はシノンも、ラツシユさんも、仲間だと思つてます」

「ハハハ……なんていうか、小さいはずのレンが、すごく大きく感じるな」

ラツシユはレンの背中をポンポンと叩いてから離れ、立ち上がる

「でもな、ぶっちゃけ俺は、そこまで気にしてないんだよ。殺しすぎて罪の意識も逆に薄れたっていうか……」

「でも、マーケットでキリトさんと剣の話で、暗い雰囲気になってましたよね？ 確か、『もう人は斬らない』って……」

「ALOって剣と魔法のファンタジーVRMMOに、SAO生還者の多くは接続してい

る。俺もSAOで使ってたアカがそこにある。でも5月に1回だけしか使っていない。俺がいると周りが楽しめないんじゃないかってな・・・それでGGOで剣を使ったら、未練があるように見えて、カツコ悪いんじゃないかって・・・」

カツコ悪いことはしない・・・それがラツシユの言動のポリシーだった

戦闘はスマートにカツコよく。会話もジョークに富んでてユニーク。身形も機能性とフアッション性を両立してビシツとキマツてる。レアドロで大金を得て、RMTで多額のリアルマネーをゲットして、左団扇で高笑いの夢追いロールプレイ

「ラツシユさん自身はどうなんですか？ALOで、元のアカウントで、VRMMOをしたいんですか？」

「よくわからん。今使ってるこのアカも、愛着はあるし・・・でも、使わなくせにあつちのアカの利用料も毎月払ってる・・・失いたくはないのは確かだ」

SAOからALOに引き継いだアカウントは、外見とステータス、スキルがそのまま引き継がれる。しかし、ストレージのアイテムや装備、通貨は消滅する。ラツシユのSAOアカウントは外見とステータス、スキル以外は現在も初期状態のままであった

「私のリアルはただの大学生で、精神科医でも心理学者でもありません。だから、それについて何か言える訳じゃありません。元々私も、現実から逃げた弱い人間ですから。ちなみに最初に接続したのはALOで、そこから気に入るアバターに引き当てるまで、コ

ンバートを繰り返してGGOにやってきました」

「そりやまた、強くなったもんで・・・おじさんはうれしいよ」

「おじさんって、言うほどラツシユさん、年上じゃないですよね？なんとなく話してて思
うんですけど」

「さあね。おっと、そろそろスキヤンの時間だ」

「ラツシユとレンが一緒にいるわ。私たちと同じように組んで動いてるようね」

キリトとシノン は 廃都市地帯に入り、サテライトスキヤンの結果を見ていた。廃都市
地帯にいるプレイヤーを風潰しに当たる

「いた。銃士X！スタジアムの中！」

「可能性は低いけど、潰すに越したことは無いわ」

事前に決めていた作戦通り、見つけたデスガン容疑者に迫る2人

「ラツシユたちはどうするんだらうな？」

「気にする必要はないわ。スキヤンの結果と本戦前の情報から、こっちの行動を読んで、
上手く合わせてくれるはずよ」

「そっか。よくわかってるんだな」

「当然よ。戦友なんだから」

やがて、前衛として突撃するキリトと、後衛として支援射撃を行うシノンとは、分かれてそれぞれの場所へ向かう

—スタジアムの客席を越えての狙撃なら、この辺りのビルの上層に・・・

狙撃場所を探して上に注目していたシノン。そんなシノンに近距離で、サイレンサー付きの銃の発射音がした

「え・・・?」

ペイルライダーのように、電磁スタン弾で動けなくなるシノン。そのすぐ隣の空間が歪むように乱れ、デスガンの姿が現れた

—メタマテリアル光歪曲迷彩?! よりにもよってこんなヤツの手に?!

誰もいないはずの空間から突然現れた理由、サテライトスキャンに映らない理由を一瞬で理解したシノン

—でも、油断したわね・・・まだ手くらはいは動くのよ

シノンは麻痺状態の中、サブのグロック18に少しずつ手を動かして伸ばしていく。

デスガンはペイルライダーを殺すときに使用したハンドガンを出した

—なっ・・・

そのハンドガンは、シノンのリアル、詩乃が強盗犯を撃ち殺すのに使用した銃、五四

式黒星だった。トラウマが蘇り、撃ち殺した強盗犯の顔が、シノンの目の前に幻覚として現れる

— . . .

『警告！心拍異常』

詩乃のアミュスファイアが、心拍の急上昇を検知し、シノンに警告音とともに警告が表示される。しかし、今のシノンには警告の表示は幻覚によつて塗り替えられ、警告音により恐怖を煽る

— . . .

デスガンが何かを眩き、ハンドガンをシノンに向ける。今のシノンには、そのデスガンの仮面が、撃ち殺した直後の血まみれの強盗犯だった

その瞬間、シノンの、否、詩乃の中で何か弾けた

「ふっざけてんじゃないわよ!!!」

怒声とともに思いつきり手を動かし、グロツグ18を掴む。麻痺状態が消し飛び、抜くと同時に立ち上がって、デスガンに、否、強盗犯に銃弾を撃ち込む

「っ—」

シノンの反撃に、デスガンはギリギリのところまで回避する

— お前が私の前に出てくるなら、何度だって撃ち殺してやる！殺してやる!!

「殺してやる!!!」

引き金を引きつばなしのフルオート射撃のグロック18で、デスガンを追従して9ミリ弾をバラ撒く

「ハア、ハア・・・」

しかし、それも長くは続かなかつた。グロック18の33発入りマガジンを撃ち切つたのだ。唯一の近接戦闘用の武器を失い。シノンには反撃手段が無くなった

だが、シノンは諦めておらず、デスガンに獰猛に笑つて見せた

「魂に響くいいシャウトだったぜ、シノン」

「レンとのデートは楽しかったかしら？」

「ああ、途中で抜けて、レンの機嫌も急降下だ。今頃暴れまわつてて手が付けられんだろうな・・・ま、あとは任せな。こっから先は本職の出番だ」

6話

「その赤い目、お前ザザだろ？なんだ？気付いてほしくて、そんな目にしてんのか？か
まっつてちゃんかよ」

「っ！」

ラツシユの登場に、デスガンは分が悪いと煽り文句を無視して撤退を決め込む

「逃がすかよ！」

メタマテリアル光歪曲迷彩で姿が薄れていくデスガンに、ラツシユはスパス15で散弾を撃ち込む。かつての戦争のときに使用した6粒弾より数の多い9粒弾がデスガンを襲い、透明化がキャンセルされる

「シノン、ヘカート持つて一旦引け！キリトと合流しろ！」

「私も戦うわ！・・・え？」

シノンがそう言つて見上げたラツシユの顔、そこには顔面全体を覆うガスマスクが着いていた

「巻き込まれっぞ！」

「ヒツ?!なんてこと考えてんのよバカア!!」

それを見た瞬間、シノンも嫌でもラツシユの次の手を理解し、飛ぶように逃げていく。「そのマスクの性能試験だ!! いくぞコロシア!!」

M320グレネードランチャーから、特殊な弾を発射する。デスガンの近くに着弾すると、それは大量のガスを撒き散らした

「ハッハア!! 一回でもまともにも吸い込めば、毒、麻痺、発声不可、嗅覚喪失の特殊催涙ガスだ! ついでに目も開けてたらやられるぞ!」

傍目にはどつちが悪役かわからない有様だった・・・

一方、ラツシユと分かれたレン。ラツシユたちのデスガン退治が次の段階に入ったことを受け、レンはこの本戦自体を終わらせるために戦っていた。廃都市地帯から東の草原地帯に、そこから北西にある砂漠地帯に向かって進路を取って、見つけた敵を片っ端から殺していく

「ラツシユさんたちの戦いで、直接私にできることはない・・・こうして本戦を1秒でも早く終わらせるために動くことだけ・・・それに

「っ!」

レンは飛んできた銃弾を避け、その銃弾を撃ったプレイヤーと対峙した。レンがこの

進路を取っていたのは、このプレイヤーとの対戦が目的と言つてよかった

「さっきのスキャンでは、L U K型と行動していたようだが、分かれたか・・・」

「闇風さん・・・」

— 私には私の、借りを返さなければならぬ人がいる

「昨日の決勝とは、まるで別人の空気。入れ替わりでもしたか・・・」

「いいえ、同じです」

「ああ、すまない。侮辱するつもりはなかった。それにリアルを持ち込むのはご法度だった」

強者として、また一プレイヤーとして礼節を弁えている闇風は、自身の発言を謝罪した。それはレンを強者と認めているからこそ、妙な遺恨を作りたくないということでもあった

「昨日の今日で、何が変わったが、見させてもらおう！」

「いきます!!」

2人のA G I型が一気にトップスピードまで加速する。しかし、どちらも射撃は極力せず、バレットラインでの牽制とフェイントを繰り返す

— どうする?! 昨日と同じ追いかけっこじゃ、勝てない!! 私に有利な場所はどこにある

?!

草原地帯と砂漠地帯の境界の緩衝地帯で始まった戦闘。前日の決勝と同じ展開にレンは打開策を模索する

—砂漠・・・砂漠?!

ふと視界に入った砂漠地帯に、レンの記憶が蘇る。ラッシュと初めて出会った、あのときのことを・・・

—そうだ、追いかけてこである必要は・・・無い

「っ!」

レンの動きが変わり、闇風を追うことをやめ、砂漠地帯に向かい始める。闇風との距離が一度大きく開く

—追って来い・・・来ないの?!

「得意なのは逃げることだけ?!

「っ?!

レンの挑発の言葉に、闇風は動いた。砂漠地帯に戦闘場所を移したいという思惑もわかった上で、その挑発に乗ったのだ

「っ!」

そして、すぐに闇風はレンの行動の理由を理解し、表情を変えた。砂漠の砂に、闇風の足が取られるのだ。闇風の大きな体、それに相応する重い体が、足を砂に深く沈ませ

る。そして高すぎるAGI値による地面を蹴る足の力が、砂に吸収される。それでも並のAGI型より速く動く闇風・・・しかし、小さな体に相応の軽い体重が、AGIだけでなくDEXも上げていて柔らかいタッチで地面を蹴れるレンが、闇風の速度に匹敵するスピードに達する

「今度は私が逃げる番！ついて来れる?!」

軽く挑発して、闇風から距離を取る。やはり何か作戦があることをわかった上で、闇風はそれに乗る。その理由は、対人戦最強のプライドか、はたまた敵の成長がどれほどか知りたい好奇心からだろうか・・・

—風がないから、仕方が無い。コレで・・・

逃げながら、レンはハンドグレネードのスイッチを入れる。ポンツと前に投げ置き、それを思いっきり踏みつける。砂漠の砂の中にハンドグレネードが埋まった

「っー」

闇風が通る少し前に爆発したハンドグレネード。闇風は回避のため足を止めた

「焦ったな、起爆タイミングが早過ぎだ」

爆発で舞い上がった砂の中で、闇風はレンの作戦の失敗だと認識した。だが、もちろんレンの作戦はこれで終わったわけではない

「そっちな、私の攻撃が終わったと判断するなんて、焦ってるんじゃないですか?」

「っ！」

すぐ近くから聞こえたレンの声に、闇風はドツと冷や汗が出た

「私のこの服の色、なんて言うか知ってますか？ デザートピンクって言うんですよ」

「くっ！」

舞い上がった砂漠の砂に紛れ、接近戦に持ち込んだレン。片手にビームナイフを持ち、闇風に襲い掛かる。足場の不利、視界の不利、武装の不利と追い詰められた闇風は、危機打開の一手として、決勝のときと同じくプラズマグレネードを持ち出す。もしものときはお土産グレネードで道連れにするつもりでもあった

だがしかし・・・

「ごめんなさい、ラッシュさん・・・ナイフ、返せそうにありません

「グオツ?!」

ビームナイフでプラズマグレネードを突き刺し、貫通した刃をそのまま闇風の体に突き刺した。ビームナイフを手放し、レンはAGI全開で離脱する

「ありがとうございました。真っ正面から戦ってくれたから、私はあなたに勝てました」
爆発して死亡した闇風に、レンはサッと一礼してから、風のようにその場を去っていった

「まったくアイツは、なんてモン用意してんのよ?!」

デスガンとラツシユの戦闘地点から離脱したシノンは、銃士Xを倒したキリトと合流して盛大に愚痴った

「SAO時代からアイツは容赦って言葉を現実に入れてきたような戦い方だったからなあ・・・レッドプレイヤーを殺すのも、躊躇無かつたし・・・」

「つで? アイツからはなんて指示されたの?」

「他のプレイヤーが来ないように排除しろつてさ。アイツのことだから、すぐに終わるだろう。これで一応もう被害者は出ないはずだ」

「つていうか、殺害方法の特定もするんじゃないの?」

「うっ・・・」

まだ解明できてない謎に、キリトは言葉を詰まらせた

「そういえば橋のとき、俺たちを認識してたなら、そのまま撃てば俺たちつて死んでたかもしれないよな? なんて見逃したんだ?」

「そういえば・・・今さつき私を狙ったのなら、あのとき狙っても同じだったはず・・・」

「なにか、違うことがある? 橋のときと、今さつきの状態で・・・マップ上での場所、付近にいたプレイヤー、あとは・・・中継カメラは、どっちも無かつたよな?」

「なら時間、とか？」

「あのととき、あの場所で殺せたのは、君じゃなくペイルライダーだった・・・なぜ？」

議論を交わす2人に嫌な可能性が1つ浮かんでくる

「このGGOの中でのことじゃなく、現実世界のことに関係してる。例えば、デスガンのアバターを動かしてるヤツの他に共犯者がいて、あのとときはペイルライダーを動かしてた現実の人間のすぐ傍にいた。だから君はスルーしたんだ」

「待って、どうやって住所を・・・って、B o Bのエントリー記入欄に住所を入れるところがあつたわね。アイツの光学迷彩と、望遠鏡でも使えば、覗き見は可能かもしれないわ・・・」

「おい待った。なら今、現実の君の部屋の中に、デスガンの共犯者がいるんじゃないか？」

どこまでも落ち着いているシノンに、キリトが指摘した

「それは無いわ。私は今、エントリー記入欄に記入した住所とは違う場所からログインしてる。とある高級マンションの高層階の一室で、玄関のドアは最新式の電子錠とシリンダー錠。1階入り口はオートロックで警備員室と管理人室があつて、24時間人が常駐してる。ホールにエレベーター、廊下などの共有部は防犯カメラがあつてセキュリティは万全よ。侵入は無理ね」

「すごいところにいるんだな・・・実家か？」

「いいえ、友達の家よ・・・とても大切な親友のね」

「そうか・・・じゃあ今頃ヤツの共犯者は、誰もいない君の自宅に・・・」

「そういうことね。空き巣にでも入られたと思うしかないわね。命の危険に比べたらマシ・・・でも、あーもう、ホント最悪！」

シノン は心底嫌そうな表情で声を上げた

「さて、ザザよ。俺はお前をここでぶち殺してもいいし、このまま放って置いてもいい。なぜなら、どっちにしろ結果は変わらないから。俺はお前と違って、ここで現実のお前を殺せるわけじゃない」

「・・・」

時間経過でガスが消滅し、ガスマスクを着ける必要の無くなったラツシユはマスクを外す。そしてガスを吸い込んで状態異常を全て喰らい、麻痺で倒れているデスガンに話しかけた。だがデスガンは発声不可で声を出すことができず、何も言葉を返すことはない。さらに毒でHPが毎秒減っていつている

「その銃、スナイパーか・・・VIT初期値ならフルヘルスでも持って3分・・・このま

まお前が死ぬのを眺めるのも一興か」

「・・・」

スパス15とM320グレネードランチャーをストラップで肩から提げて手を放すラツシュ。戦う構えを解き、空いた手をポケットに突っ込み、棒立ち同然にただ立っているだけのラツシュが1人、言葉を発していた

「不様だな。かつてアインクラッドを恐怖に陥れたラフコフの幹部が、麻痺で野晒し、毒で野たれ死にとは。昔のほうが強かったんじゃないかねーか？」

ラツシュは、デスガンを見下ろしながら、ストレージから出したタバコ・・・に見える駄菓子を一本、口にくわえる

「ま、安心しろや。この不様な姿晒してる中継を見てる奴らの反応を、お前が知ることはないんだからよ。お仲間と、仲良く豚箱中だ。よかったな」

デスガンの近くにしゃがみ、嘲笑を浮かべるラツシュ。デスガンの唯一の救いは、目もやられていて、その姿を目に収めることはないことだろう

何も知らず中継を見ている多くの人は、デスガンであるプレイヤー、Sterbenに哀れみの情を抱いていた

そしてそんな中、デスガンは死亡した

「ついで？あの後どうなったの？」

「ガスで状態異常フルコンボだったから、ほっといて毒で殺した」

「エツグイやり方するなあ・・・」

「デスガンを見取ったラッシュはシノンとキリトに合流する

「さて、これからどうするかね？ヤツが死んでも、B O Bはまだ終わらんわけだし」

「とりあえず、もうすぐサテライトスキヤンの時間だし、結果を見ないことには動きようがないわね」

「それもそうか・・・ま、レンの頑張り次第では、俺らまとめてドーンで優勝を謙譲するのも悪くない」

「つと言いなながら、3人はサテライトスキヤンの結果を眺める

「おいおい、結構すごいことになってんぞ？」

「闇風が死んでるわ。まさかレンがやったの？」

「残ってるのは、ここにいる俺たち3人とレン、あとは2人・・・あ！」

スキヤン結果の表示中に、2つの点の色が変わった

「グレネードを投げ合ったのね・・・」

「最多キル賞は、レンか、南の岩山に籠ったりリッチーだろうな」

西部の草原から北部の砂漠にかけてと、南部の岩山の辺りに脱落者を表す白い点が集
中している

「そんなじゃ、頑張ってくれたレンにお礼とご褒美つてことで、まとめてドーンしますか
ね。誰かハンドグレネード出して」

「私持つて無いわよ？」

「俺も無いな」

「無いのかよ！つて、俺もグレラン持つてるからハンドグレネードは無いんだが・・・」
「ダメじゃん」

まるでコントのようなやり取りに、場の空気が白ける

「グレラン真上に撃つて落下させるか」

「そうね・・・」

「早く終わらせよう。リアルに戻ったら、やるのがたくさんあるからな」

投げやりになりながらグレネードランチャーに榴弾を込め、真上に発射するラツ
シュ。スポンツと撃ち上がる弾を、顔を上げて追うキリトとシノン・・・そんな2人の
すぐ近くで、金属が鳴る音が

「え？」

間抜けな声を最期に、下から頭を撃ち抜かれたキリト。ラツシュがデザートイーグル

を抜き、キリトを撃ち殺したのだ

「つと?!」

「そんなことだろうと思つたわ!」

死亡し倒れるキリトに、ラツシユは次の標的であるシノン撃とうとすると、シノンは既にヘカートIIを腰の高さに構えてラツシユに向けていた。即座に発射された12.7ミリを、ラツシユはシノンの指の動きで読み、紙一重で回避する。2人がその場から退避し、残つたキリトの死体に榴弾が落下した

「あなたが勝利を譲るとか、そんな殊勝な思考をするなんて思えないもの」

「ヒドイなあ・・・俺だつて傷つくんだぜ?ま、どうせ始めた悪役ロールだ。最後まで通さんと。それに譲ってもらつた勝利で、レンが喜ぶとも思えんしな」

「それについては同意ね。たぶん今頃、ここに乗り込んで漁夫の利を狙おうとか考えてるはずよ」

「ああ、アイツは初めて会つたときからエグイ性格してた。逃げ場のない走行中のトラックの荷台に、グレネード投げ込むようなヤツだからな」

本人がいけないことをいいことに、散々に言い合う2人である

「あの子を迎えるのは、親友の私1人でいいと思うのだけど?」

「どうかな?ここは同性より異性が出迎えたほうが絵になると思わね?」

「ロリコン」

「あゝ？」

ニコニコと笑顔を浮かべながらも、目が笑っていない2人

「やるか？この距離でスナイパーに勝ち目があると思ってるのか？」

「あなたこそいいの？LUK型の殺し方が公開されてしまうのだけれど？」

一触即発の空気の中、2人が銃を構えなおす。2人の銃から伸びるバレットラインが、お互いを射抜いた

「・・・殺す前に聞いていいかしら？」

「なんだ？」

「あなたは どうやって・・・その・・・」

「俺を参考にするな。俺は俺で、お前はお前だ」

質問の内容を察したラツシユが、淡々と返した

「ただ、俺に言わせれば、1人だけで済んで、そのことを悩む暇がある。そんなお前が羨ましいよ。俺だって最初の1人2人は罪悪感もあつたさ。だけど悩む暇なんてなかった。それで、気付けばそんなもの麻痺してわからなくなつてた」

「っ！」

動揺するシノンに、ラツシユは銃を構えたまま歩み寄る。やがて、ヘカートIIの銃口

のすぐ前でラツシユは止まった

「まあ、お前にはもう、乗り越え方なんて必要ないだろう？ 1人じゃないんだからよ」
「そうね」

次の瞬間、ラツシユのデザートイーグルからのバレットラインが消えた。それを合図にシノンが引き金を引く。ヘカートIIから発射された12.7ミリの弾が、ラツシユの体を上下に二分した

「レンによろしくな」

「ええ」

第3回B o Bの優勝者はレンだった

シノンはサテライトスキヤンの結果からレンの接近経路を読み、最後の勝負で狙撃を試みたが、当てが外れ、レンの接近を許してしまい、一方的に撃たれて終わった

そして、もう一つの戦いも、一方的に決着が付いた

デスガンのアバターを操作していたザザこと新川昌一は自宅で、共犯者で弟の恭二は詩乃の自宅アパートの部屋に不法侵入していたところを、もう1人の共犯者である金本敦は都内某所にて、それぞれ逮捕された

7 話

B O B 本戦から3日後

「朝田さんさあ、最近ちよーつと調子乗ってんじゃないの？」

放課後の校舎裏、詩乃は以前と同じ不良女子高生に絡まれていた

「今日は、アンタ躰けるのにいいもの持ってきたのよ」

不良女子高生の1人が、カバンからモデルガンを取り出し、詩乃に向けた

「ホラ、怖がれよ！」

「・・・」

モデルガンを向けられても、動かない詩乃。今、彼女は頭の中で、幻覚の強盗犯を撃ち殺していた

「なに？ピピッと動けもしないの？ならもつと怖が・・・ん？」

モデルガンの引き金を引こうとする不良女子高生。しかしモデルガンでも安全装置があり、それが掛かっていることに気が付いておらず、引き金はロックされていて引くことはできない

「ハアー・・・貸しなさい」

「あ……」

詩乃は、露骨に面倒臭そうにため息を吐くと、モデルガンを奪い、安全装置を解除した

「全く、どこかの剣士ロールじゃあるまいし、銃には安全装置があることくらい常識でしように……ガバメントねえ。でもプラスチック製の安物もいいところ」

詩乃は辺りを見回し、ちょうどよく置いてある空き缶に向けてモデルガンを撃った。アイアンサイトすら使わず、適当に構えて狙ったにもかかわらず、プラスチックの遊戯弾は空き缶に命中する

「あら、安物でも精度はそこそこあるのね。でもブローバックもしない単発なのね」

2発目を撃とうとして引き金を引いたがカチンツと音が鳴るだけだった。スライドを引いてコッキングを行った詩乃は、モデルガンを不良女子高生たちに向ける

「ヒッ?!」

「今まで貸したお金、全部返しなさい」

「そ、そんなの持つてるわけ」

「そう」

詩乃の要求を拒否した不良女子高生。モデルガン突きつけられても、無いものは無いと必死に言い返す。詩乃も要求が通るとは思っていないなかつたようで、短く言葉を返

し、持っていたモデルガンを・・・

「あ、ちよつ、ま・・・」

思いつ切り校舎の壁に投げ付けた。壁に叩き付けられたモデルガンは、本物の銃に使用されるような強化プラスチックですらなく、遥かに強度が劣る普通のプラスチックフレームだったため、衝撃でバラバラになってしまった

「もう返さなくていいよ。金額的には全く足りないけど、これでチャラにしてあげるから」

モデルガンを壊され、ショックを受ける不良女子高生たち。そんな彼女たちを余所に、詩乃は校舎裏を後にする

「いーけないんだ、いけないんだ、人のもの壊しちやいけないんだ」

「誰?」

校舎裏から1つ角を曲がったところで、詩乃はスーツ姿の男に声を掛けられる。詩乃は一瞬、学校に侵入した不審者かと思ったが、首から提げられている来客者パスに、その可能性を否定した

「わからない? 寂しいねえ・・・冥界の女神さんよ」

「っ！．．．まさか、ラツシユ?!」

「正解」

詩乃は相手の口調と、GGOでの自身の二つ名を知っていることから、相手がラツシユの中の人だと看破した

「え？待って．．．外国人なの？」

「それについては、後で香蓮にも一緒に説明するから、そのときで」

日本人の容姿ではないラツシユの中に、詩乃は驚く

「香蓮さんもいるの？」

「ああ、表の車で待たせてる」

「え？」

そう言って詩乃を高校の敷地から連れ出す。もちろん来客者バスを事務室に返すのも忘れていない

「え？」

車を見て詩乃がさらに驚く。政府要人が使うような黒塗りの高級セダン。しかし、白ナンバーであることから、ハイヤー配車業者から借りたものでもないことは明らかで．．．

「いったい、なんなの．．．？」

「それを説明する場所に、これから行くんだよ」

「は？」

意味が分からず呆ける詩乃を、車の後部座席に乗せるラツシユの中の人。その後部座席には、既に一人の女性が座っている

「香蓮さん？」

「アハハ・・・」

車の中にいたその女性、香蓮は詩乃の呼びかけに乾いた笑いを返した。助手席にはラツシユの中の人と同じ印象のスーツ姿の女性が座っていた。ともあれ役者は揃い、運転席にラツシユの中の人が乗り込み、車は発進した

「さて、目的地に着くまでに、軽く予習の時間といこう。聞きたいことがあればどうぞ。できれば事件のことだな」

「その前に、なんて呼べばいいの・・・ですか？」

「ああ、ラツシユで構わんさ。本名は別にあるけど、ニツクネーム的な感じで呼んでくれていい。敬語もいらさないさ。ぶつちや俺、下っ端なんだよ」

「は、はあ・・・」

GGOのラツシユからジョークを抜いたような話し方の現実のラツシユに、詩乃と香蓮はやや戸惑いを見せる

「フッフ、GGOの姿に負けないくらいに、2人とも可愛いわね」

「え、ジェーンさん？」

「せいかうい」

助手席からの声に、詩乃がもう何度目かの驚きを見せる。ラッシュュと同じ印象ではあったが、年齢がどう見ても還暦間近には見えない若々しい姿をしているのだ

「さあ、質問していいわよ」

「あ、えと、なら、具体的にあのあとで、何がどうなったのか・・・？ログアウトしたら、急に警察からスマホに電話が掛かってきて、『あなたの部屋に不審者が侵入し、逮捕されました』って」

BOB本戦後、ログアウトした詩乃は、同じくログアウトした香蓮に状況を説明し、自宅アパートへ向かおうとした。しかし、そこでいきなり警察からの連絡。事情聴取や現場検証の付き添いのために、詩乃は香蓮と一緒に自宅アパートに向かうことになる

そこで逮捕された、詩乃の友人の1人だった新川恭二。不正アクセスによる電子錠の開錠具を使用し、詩乃の部屋に侵入していたところを現行犯逮捕。本来なら病院から持ち出せない筋弛緩剤と、それを打つための高圧注射器を所持していたこと、逮捕時の言動から詩乃の殺害を計画していたようで、現在警察は裏付け捜査中とのこと・・・

「簡単に言うとうと、デスガンをガスで放置死させてる間に、中継カメラにサインを送ったん

だ。それを見た俺がいる組織の仲間が動いた」

「動いたって？」

「あー、それについて、君たちに謝らなければならないことがある・・・俺のいる組織は、高度なハッキング技術を用いて、デスガンの容疑者と思われるプレイヤー、並びに被害者のプレイヤーの個人情報を見つめた。さらに、デスガンだと確定したSterbenのプレイヤーのログイン場所、あのと狙われた詩乃のログイン場所の逆探知に、香港のマンシヨンの防犯カメラ映像も・・・本当に申し訳ない」

「ごめんなさいね」

ラッシュとジェーンが2人に謝罪をした。赤信号で車が止まっていたので、しっかりと頭も下げて・・・

「今日、こうして俺らが君たちの前に現れることができたのは、それで得た個人情報を使ったからだ」

「組織って、いったいなんなんですか？外資系の企業とかですか？」

「・・・それについては、キリトと、キリトの雇い主の説明が終わってからするよ。おつと、組織のこととハッキングの件は警察やこれから会う人たちには内緒な」

銀座の高級スイーツレストラン、その個室で、キリトこと桐ヶ谷和人と、彼をデスガン調査に雇った菊岡誠二郎から、デスガン事件の全てが語られた。説明の過程で、詩乃の友人の新川恭二の犯行動機も語られたが、それに対し詩乃は『そうですか』の一言しか発しなかった。B o B の予選日の諦めた態度で、詩乃は彼を見限っていたのだ

「さて、次の説明の場所へ移動だ」

菊岡からの説明が終わり、レストランを出たラッシュュたちにキリトを加えた一行。菊岡は先に仕事に戻っていき、残された5人である

「俺はエギルの店にでも行くか・・・」

「ああそうだキリト、いや桐ヶ谷和人」

「なんだよ、いきなりフルネームで・・・」

ラッシュュたち4人から1人分かれて去ろうとするキリトを、ラッシュュが呼び止める

「この国を外から見た人としての、お節介な助言だが・・・あの男と手を切れ。いつか痛い目を見ることになる」

「どういうことだ？」

「アイツに裏の顔があることくらい、お前ならわかるだろ？その裏はお前の想像よりも、何倍も大きく、深く、ドス黒いものだ。一個人のお前が関わって、タダで済む相手じゃない。引きずり込まれて、扱き使われて、潰される。その前に、体よく断って逃げろ。金

「が要るならコッチから仕事を回せんことも無い」

「・・・考えとく」

ラツシユからの助言を聞き、キリトは表情を曇らせて帰っていった

「んじや、行きますか」

「いやいや、さっきのやり取りは何ですか？」

「裏の顔とか映画じやあるまいし・・・」

ラツシユの切り替えに、香蓮と詩乃が突っ込んだ

「事実は小説よりも奇なりってな。この国も見た目ほど綺麗ってわけじゃないのさ」

「遠くからではないと見えないものも、世の中にはあるのよ」

ラツシユとジェーンが、疲れた表情を見せて返した。4人が車を止めていたパーキングに着き、車に乗り込む

「一応言っておくが、これから俺がいる組織の拠点に向かうんだが：知らないで帰るって選択肢もあるってことを確認しておく。それなら、この車の行き先は、キリトが言っていた、エギルの店に変更しよう。御徒町のカフェで、SAO生還者がよく通ってる集いの店ってやつだ」

「何よ、いきなり・・・？」

「そうですよ。ここまで引つ張られたら、気になります」

「知ったら、後悔するかもしれないぞ？今までの常識が間違いなく覆るし、さっきの裏に通じる内容も一部ある。もちろん他言無用だし、迂闊に漏らせば・・・」

「漏らせば・・・？」

ラツシユの脅かすような口調に、香蓮と詩乃がゴクリと息を呑んだ

「ネットの陰謀論をガチで信じちゃってる中二病の痛い子認定は免れん」

「それは絶対嫌!!」

「そうねえ、命を狙われるとかって心配はない：：はずね。あつてもちちゃんと組織が守ってくれるわ」

ジェーンの言葉に、2人はホッと一安心する

「えっと、悪いことしてる組織、なんですか？」

「いや？俺の仕事だって、楽しいことや、美味しい食べ物を探して、上に報告を上げるだけだからな。元々SAOに入ったのも、今GGOやってるのも、その調査の一環だ。もちろん趣味も入ってるがな」

「あとは日本という国の文化や歴史だったり、暮らしてる人たちの人間性も調査してるわ」

「?」

ラツシユとジェーンの説明に、2人は『それって、どんな職業?』と首をかしげた

「えと、とりあえず命の危険とか、悪いことしてるわけじゃないなら・・・ね？」

「ええ、知りたいわ」

「わかった。それじゃ、向かいますかね」

ラッシュユは、ゆつくりと車を発進させた

車は銀座から、隅田川を渡って月島、晴海を通り、豊洲へ・・・この辺りの隅田川河口の運河沿いは高級マンションが建ち並び、築地から移転した豊洲新市場、東京五輪の選手村の近くということで、注目を浴びた地区である。それを目当てに外国人が投機目的に売買がされ、バブルのように価値が高騰し・・・当然のごとくそのバブルは弾け、大暴落という結末をみた

ラッシュユが運転する車は、そんな高級マンションの1棟の地下駐車場に入っていた
「よし、着いた」

4人は車を降り、地下からマンション内に入る。当然のように入り口の傍には警備員室がある。高層階用と低層階用のエレベーターがあり、高層階用のエレベーターに乗り込む

「ウチのマンションよりセキュリティがしっかりしてるかも・・・ってか間違いないウチ

のマンションよりグレード2つ3つくらい高いよココ」

「バブルが弾けて安くなつたときに買ったからな。上はいい買い物をしたよ」

そう言っている間に、エレベーターは目的の階に到着する

「早い……」

「さて、職場のほうじゃなく居住の部屋でいいかな？」

「そうね」

「……」

まだなにも聞かされていないはずなのに、これまで常識が崩れてしまいそうな詩乃と香蓮であった。そんなこんなで、やっと4人は目的地に到着したのだった

マンションの一室の中のリビングに通された香蓮と詩乃。ソファに座った2人に対し、ラッシュユとジェーンはまだ立っている

「くどいようだが、これが最後の確認だ。ここから先は、ポイントオブノーリターン：完全に後戻り不能だ。どうする？ やめるって言うなら、月島でもんじやを食べてから、自宅まで送ってあげよう」

「聞くわ」

「聞きます」

「わかった」

決意の変わらない2人に、ラツシユとジェーンはそれぞれ取り出した鈴の付いたチヨーカーを首に着け、鈴の部分を軽く叩いた

その瞬間、ラツシユとジェーンの体が光に包まれ・・・

「へ？」

「は？」

2人の体に猫耳と尻尾が生えた

そんな2人の変化に、香蓮と詩乃は呆然とする

「俺のいる組織、正確には俺たちの種族は、宇宙の、この地球から遠く離れた星で暮らすキヤーティアという、猫から進化した人類だ」

「私たちは、その宇宙外交団の1つ。この地球と、外交関係を結ぶためにやってきた、あなたたちで言うところの、宇宙人よ」

「・・・」

ポカーンと口を開けたまま、固まっている香蓮と詩乃

「来月から、つてか来年の頭から、日本政府と秘密裏に交渉が始まる。まあ、それは俺や母さんよりもっと上の役職の仕事だが・・・俺はタダの現地調査員だからな。本来なら、こうして地球に降りて行動することもできない下つ端なんだが、SAOの件があるから特別に許可が出てる」

「私はキャーティアシップの医務室に所属する医務官の1人。キャーティアシップっていうのは私たち外交団が乗っている、宇宙船のことよ」

「おーい、聞こえてるー?」

いつまでも呆けている2人に、ラツシユが目の前で手を振って声をかけた

「ハッ! え、ちよ、ちよつと待って・・・あまりにも内容が・・・」

「うん・・・私もちよつと受け止めるのに、時間をください・・・」

揃って額に手を当て、俯く2人。しかしそんな2人に落ち着く暇はなかった

ピヨコピヨコと、40センチくらいの大きさの人形のような物体が、お茶を運んできたのだ

「えっと・・・これは?」

「アシストロイド。アシスタントアンドロイドで、俺たちキャーティア人の生活や仕事のサポートをしてくれるロボット」

お茶を運ぶ1体に、数体が一緒に来ていて、俯いている2人を心配そうに見ていた

「だいじょうぶ?」

「え? ああ、うん。大丈夫だよ」

アシストロイドがプラカードを見せ、気遣う。香蓮が少しぎこちなくだが、笑顔で返した

「今度、2人の自宅にそれぞれ2体ずつ送るから、使ってあげてね。日常の家事の手伝いから留守番、フルダイブ中の部屋の警備までできるいい子たちだから」

「は、はあ・・・」

「とりあえず、今日はこの辺りまでにしておこうか。2人とも、もう頭がパンクしそうな顔してるから」

「まさか、本当に宇宙人だとは思わなかったわ・・・」

「てつきりジェーンさんの冗談か、その場を誤魔化すはぐらかしかと・・・」

帰る香蓮と詩乃を送る車の中、今だ頭ができていない感のある2人である

「あれには俺もドキツとしたがな。まあ、いきなりあんなこと言って、信じるヤツはいないか」

運転席には、再び地球人に変化したラツシユが座っている

「そういえば、来年から日本政府と交渉が始まるなら、ラツシユさんも仕事が変わってGGOに来れなくなったりするの？」

「いや、ラツシユで稼いだお金は外交団の資金源の一部にもなってるし、俺がこつち方面の調査の担当するのは変わらないだろうから、特に変わらずログインできると思う」

「じゃあ、元のSAO引継ぎアカウントのほうは・・・?」

「ま、あれはあれで、残しておくさ・・・過去を忘れないためにもな」

香蓮の問いかけに、ラッシュは少し気まずげに返す

「それじゃダメだと思う・・・ラッシュさんは、もう一度そのアカウントを使うべきだと思います。GGOで言うなら、ケリが付いてないって状態ですよ」

「いや、でもなあ・・・周りが」

「周りのことを気にするなんてラッシュらしくないわ。GGOであれだけ好き勝手やってるつてのに」

「いや、それは違うんです。あれはゲーム内だから少しはっちゃけてるだけで、つてかりアルでゲーム内のロールのアレコレは恥ずかしいからやめてください、お願いします」

詩乃の指摘に、ラッシュが早口で言い訳をした。リアルでは一応真面目な性格であるラッシュなのである。そんな、ちよつとカッコ悪いラッシュの様子に香蓮と詩乃が揃ってため息をつく

「それに、みんながみんな、あなたのことを悪く思ってるわけじゃないはずよ? キリトとか、他にもあなたのことを理解してくれていた人はいるんじゃないの?」

「・・・そんなの片手で数えられるくらいだ。6000人以上いるSAO生還者の0.1%以下だ」

「だから逃げるの？」

「・・・」

詩乃の視線が、ルームミラー越しラッシュユに刺さる。少しの沈黙の後、折れるようにラッシュユがため息をつく

「・・・わかったよ」

8話

詩乃と香蓮が、未知との遭遇（？）を果たした3日後

「半年振りか・・・何もかもが懐かしい」

S A O引継ぎアカウントでA L Oにログインしたラツシユ。空に浮かぶアインクラッドを感慨深げに見上げる。ちなみに種族はケツトシーで、着ているものがスーツになれば、現実のキヤーティアの姿のラツシユとほぼ重なる容姿である

「何浸ってんのよ」

「あそこに2年もいたんだ。浸りもするさ」

ラツシユの隣に立ち、突っ込みを入れるシノン。ラツシユが逃げないようにと、シノンはわざわざA L O用に新アカウントを取得してログインしたのだ。ちなみにこちらもケツトシーである

「B O Bで優勝したからいなくなれないって、G G Oに残ったレンの分も私がちゃんと見届けてあげるから」

「へいへい、ありがとさん」

闇風を破り、名実ともにG G O最強の称号を得たレンは、挑戦を受ける側の人間とし

て、GGOに残る決断をした。もちろん、初めてのVRゲームでALOの長身アバターを引き当て、苦手意識があるのも理由の1つである

「さて、これからどうするの?」

「いや、俺が聞きたいって。お互いに金無し、アイテム無しで何もできねえよ」

新規アカウントのシノンはもちろん、SAOの引継ぎアカウントのラッシュも、お金とアイテムは初期化されている。GGOのように公式RMTの無いALOでは、装備を揃えるお金もなく、それを稼ぐ当てもない

「・・・え?まじで?今更ニユージェームでチマチマやっていくの?」

「うわ、私もそれは嫌だわ・・・」

2人して呆然と立ち尽くす。もう言いだしつぺのレンがないことをいいことに、適当にごまかしてGGOに帰ろうかとすら思い始める始末である

「なんかないの・・・?一攫千金ドカンと稼げる方法・・・」

「PKでもしてアイテム奪うか・・・ハハハ、GGOとは真逆の立場だ」

墮ちたなあ・・・つと涙目になるラッシュ

「んだとコラア?!」

「やんのかコラア?!」

「上等だ!!」

つとそんな2人から少し離れた場所で、2人のプレイヤーが喧嘩を始めた。口喧嘩では埒があかないと、2人は決闘を始め、野次馬の他のプレイヤーが集っていく

「なあ、どつちに賭ける?」

「そうだな。俺は・・・」

野次馬の中には賭けを始めるプレイヤーも出始めていた

「そうか・・・その手があった。賭けだ!」

1時間後・・・

「はい、次の人ー、いねーの?一撃決着の賭け試合。お互い5万ユルドずつ出して、勝てば総取り10万ユルドだ」

「おい誰か、ヤツに勝てるヤツいないのか?!」

「もう何連勝だ?」

イグドラシルシテイのど真ん中で、賭け試合を大々的にやり始めたラツシュ。初めは初期資金を賭けていたが、徐々に金額が上がっていき、今では万単位のお金を賭けている。シノンは初めのほうで勝敗予想の賭けの胴元をしていたが、ラツシュが勝ちすぎて賭けが成り立たなくなってしまうので、今はお金の一時預かり役をしている

「はいはい！じゃあ私やりまーす！」

ラツシユの呼びかけに、1人の女性シルフが手を上げた

「おつ、元氣いいねー。お名前は？」

「リーファです」

「はい、挑戦者のリーファちゃんに拍手ー！」

ラツシユの隣にやってきた挑戦者を紹介し、場を盛り上げる

「ルールは、アイテム無しの魔法有り、飛行も有りね。オツケーならそっちのシノンにお金を渡してくれ」

「はい」

返事をしてリーファが5万ユルドをシノンに渡す。連勝中のラツシユのお金は、もうシノンが管理しているので渡す必要がない

「それじゃ決闘を申し込んでくれ、決着方法は受ける側が決めるから一応ね」
「わかりました」

リーファはラツシユの指示に従い、決闘を申請し、ラツシユは一撃決着でそれを受ける。決闘開始までのカウントダウンが始まり、その間に2人が適度に距離をとって開始位置に着く。リーファは武器の刀を抜いて構える

それに対しラツシユは・・・

「居合い・・・？」

リーファと同じく刀装備で、鞘に収めた状態のまま抜刀術の構えをとる。やがて、カウントダウンが0になり、決闘が始まった

「・・・っ」

「どうした？来ないのか？」

ラツシュの構えに、迂闊に飛び込めば負けると、リーファは彼我の力量差を悟った。1合の打ち合いもなくそれを悟れるのは、現実で剣道をやっているリーファの中の人のプレイヤースキルと言ってもいいものだった

—刀の勝負では、私に勝てる相手じゃない・・・でも空中戦からの一撃なら

リーファは羽を出して空中に飛び上がる。空中で加速をつけ、水平飛行で最高速に達した状態で急降下に入り、ラツシュに一気に接近する

—急降下での更なる加速、間違いなくALLOで出せる最高速度！これに・・・

リーファは急降下しながら、初級の風魔法を唱える。風属性の矢が複数現れ、ラツシュに放たれる

—この矢と同時に突っ込んで斬る！これだけの矢を回避すれば、体勢は崩れて抜刀はできないはず！

自身に迫る矢とリーファを視界に納め、しかし未だにその場を動かないラツシュに、

勝ちを確信する

しかし・・・

「やっぱALOの速さってこんなもんなの・・・」

そんなやる気のない呟きが聞こえたリーファ。そして次の瞬間にラツシユの姿がブレた。放った矢はラツシユのアバターを通り抜けるかように見えるほどギリギリで回避され、地面に刺さる

「一刀流居合い、獅子歌歌・・・のマネ」

「マネかよっ?!」

突っ込んできたリーファの刀を回避しながら、ラツシユは抜刀術からの一撃で、擦違う一瞬でリーファの体に僅かに切り傷を付ける。リーファのHPバーが数ドット削れ、勝敗が決まる。納刀するラツシユの前にウィナー表示が現れる

「うおおおっ!!勝ちやがった!!」

「動きが見えなかつたぞ?!」

SAOでラツシユが上げに上げたキャラの敏捷値と磨き上げた抜刀術、猫から進化したキヤーティアの優れた動体視力と高い反応速度。4つが合わさってできたスタイルである。要するに半分はチートである

「ほい、毎度ありー」

「そんなー。あの速度見切られたら、コッチは手が出ませんよー」

つとリーファは悔しそうに言うが、リーファが今の決闘で出した速度は時速200キロにも満たない。秒速ならば55メートル程度である。GGOでは低威力の拳銃弾ですら秒速300メートルの初速で発射される。GGOに慣れたラツシユが遅いと思うのも、仕方が無いことである

「さて、これでも結構頑張ってきたつもりだが、いよいよ以って刀の耐久値が限界のようだ。賭け試合はこの辺で終わりにさせてくれ！」

ラツシユは見物客に自身が使っている刀の耐久値を見せ、賭け試合の終わりを宣告する。初期装備の安物の刀の耐久値はレッドゾーンを割り込んでいる。それを見せられた見物客も仕方が無いと散り散りに去り始めた

その場に残ったのは、ラツシユとシノン、そして最後の対戦相手だったリーファの3人……

「さて、リーファちゃん。同じ刀使いの好で、いいシヨップを教えてくださいなんかは……ダメかな？」

「え？あ、はい、それは構いませんが……」

「ヒッ!!」

ラツシユの顔のすぐ横を、細剣の突きが通った

「よ、よお、アスナさんや。お久しぶりで・・・なぜに俺は殺されかけたのぞ?」

「B o Bの本戦でキリト君を撃ち殺してたので、ついカッとなつて」

リーファに連れられてやってきた、S A O生還者のリズベツトが経営する武具店。ラツシユが店に入り、キリトの彼女ことアスナと目が合った途端、アスナは笑顔でラツシユに突きを放った。所謂目の笑っていない笑顔というやつである

「ちよつとアスナ! 柱に穴が開くじゃない!」

「突つ込むところそこか?」

店の主であるリズベツトのズレた注意に、キリトは突つ込みを入れながら、ラツシユに『ヤツちまつたな・・・』つと同情する表情を浮かべた

「あれ? お兄ちゃんたちの知ってる人なの?」

「ああ、ラツシユは同じS A O生還者だよ。ホラ、B o Bの本戦で、スーツ着て戦つてたヤツ。そつちはたぶんレンかシノンだろ?」

「正解、シノンよ。本戦でキリトに銃を突きつけて、馬乗りにされた・・・つてあれは中継されてなかつたわね」

「キーリートーくーん?」

「誤解だ!」

シノンの絶妙なパスでアスナのヘイトがキリトに向かう。グツジョブつとラツシユはシノンにサムズアップをした

「まさかりーフアちゃんはキリトの妹だったとは……」

「おいラツシユ、俺の妹に手を出すなら、斬られる覚悟できてんだろな?」

「抜かせ。秒殺で三枚卸にしてやるよ」

リーファに手を出すかのような馴れ馴れしきで接するラツシユに、キリトはイラツとして挑発が、ラツシユはそんな挑発を軽くあしらう。ちなみに、そんなキリトの言動に、リーファはコツソリと嬉しそうな表情を浮かべていたり……

「兎にも角にもまずは装備を揃えんな。一番いいやつを頼むつてことで。俺は速さ重視の刀。シノンは……」

「弓矢。200メートルくらい飛ぶので」

「は?」

シノンのリクエストを聞いたリズベットが、『お前は何を言ってるんだ?』つという表情をした

「あのねえ、この世界の弓つてのは槍以上、魔法未満の射程で、精々20メートル前後で使うものよ」

「なら、金はあるから、ここは一つ、シノンの弓はオーダーメイドで頼むよ。大丈夫、多少時間がかかっても構わない。シノンはこれから習熟度を上げていくし、いきなりハイエンドなものがあっても習熟度不足で装備ができないしな。俺のは店内に並んでるもので済まずさ」

カウンターにユルド硬貨がドツサリと入った袋をドカツと置き、ラツシユは笑顔で言った

「どうやって稼いだんだよ・・・?」

「どうやってって、決闘で賭け試合を」

「人はもう斬らないんじゃないのか?」

「殺してないからノーカンだ・・・それに」

ラツシユがシノンに視線を向けた

「シノンがわざわざついて来てくれたのに、貧乏苦勞人ロールは御免なんだな」

「そういえば、何しに来たんだ?」

「特に何も」

「は?」

「いや、レンがな・・・俺がこのSAO引継ぎアカを飼殺しにして、ALOを避けてるのがダメだって言うからな・・・なんかケリ付けて来いって。いったい何をしろって言う

んだか……」

ラツシユは事情を説明し、肩を竦めた

「ま、それを見つげるためにも、しばらくはGGOと二束の草鞋で行くさ」

「そうか、まあ、なんだ……その、おかえり」

ラツシユがALOに戻ってきた……その報せを受けたキリトやアスナたちと付き合いのあるSAO生還者、エギルとクラインは、それぞれリアルでのその日の仕事をマッハで終わらせて帰宅し、ALOにログインした

「よおラツシユ！随分と久しぶりじゃねーか！」

「お前さんはリアルのウチの店にも来ないからな。SAOをログアウトしてからどうしてんだ？」

イグドラシルシティのキリトとアスナのホームに集った一同。ラツシユは数少ない彼を理解する人たちに囲まれ、昔話に花を咲かせている

「さて、男どもは男同士で話し始めちゃったし、こつちも女の子同士で話しますか」

リズベットの言葉に、リーファやアスナ、シノンが集ってソファに座った

「そうだね。まずは自己紹介からかな……名前はアスナ。細剣使いで、SAOでは攻略

組のギルドの副団長をしていて、迷宮区攻略なんかでラツシユさんとはたまに顔を合わせたりしてました」

「アスナ・・・ああ」

アスナの自己紹介に、シノンは聞き覚えのある名前だったので、ポンと手を打つ

「ラツシユが言ってたキリトの嫁ね？」

「ブフツ!!」

シノンの言葉に、リーファとリズベットが飲みかけた紅茶を噴出した

「うん、まあ・・・その通りです」

「ぐぬぬ」

「ふーん・・・モテる恋人を持って大変そうね」

アスナの肯定の言葉と、リーファとリズベットの反応で、全てを察したシノンであった

「そういうシノンはラツシユとどうなのよ？ラツシユに合わせてALLOにまで来るんだから」

「私とラツシユは・・・」

—私がラツシユのことを・・・？つてあれ？そもそも地球人とキャーティア人って付き合えるのかしら？

リズベットに仕返しされるように質問されたラツシュとの関係に、シノンは初めて生き物としての種族の違いというものを実感する

—まあ、ラツシュがキャーティア人だと知らなかったときは、結構自由にモノを言い合える人だから、一緒にいて楽しいし、好意が無いって言えば嘘になる。それは今も同じ・・・とりあえずリアルなラツシュは何歳なんだろう？見た目20歳前後って感じだけど、母親であるジェーンさんも還暦前って言われながら見た目30代、いや20代後半くらいにしか見えないし・・・

「うーん・・・」

「おーい、そんな深く考え込まれるとは、あたしや予想外だよー」

「！」

リズベットの声に、思考に没頭していたシノンが復帰する

—とりあえずこの件は香蓮さんと相談しつつ、改めて考えよう

「そうねえ・・・好意的な感情はあるけど、仲間とか戦友って感じのが大きいと思うわ。それに私は高校生だし、ラツシュは社会人だから、すぐ付き合うとかはないかしらね」

「おー、この手の話題にクールに返す・・・割りと初めてのタイプかも」

ラツシュとの付き合いいで、煽り耐性のできているシノンであった

「じゃあ自己紹介の続きで、あたしはリズベット。SAOにいた頃からの鍛冶師で、さっ

きいたリズベット武具店はアインクラッドでもやっていたのよ」

「改めて、私はリーファです。私はSAO生還者ではなく、ALOをずっとやってます」
「あとは、シリカがいるのだけど、今日はリアルの用事で来れないみたい。まあそのうちすぐに会えるわ」

簡単に自己紹介がされ、次はシノンの番かと思いきや・・・

「私はユイです。パパとママの娘です」

アスナの肩に降り立った小さな妖精がシノンに向かって自己紹介をした

「娘？」

「ああえつと、SAOで出会ったAIなの。消されそうになったところを、キリト君がシステムから切り離して助けて、こうして引き取って一緒にいるの」

「AI・・・」

—これって本来は驚くところなんだろうけど・・・キヤートエアの技術力を目にしたら、もう地球の技術で驚くことなんてないわよね・・・

大抵の人には驚かれるユイの存在に、シノンは動じない。なぜなら今、詩乃の部屋にも高度な学習AIを積んだロボットが2体いるからである

「じゃあ最後に私ね。名前はシノン。B0Bの本戦の中継を見てたなら、準優勝してたのが私。とはいえ、ラッシュに助けられたり、勝ちを譲られたりで、全く実感が無かつ

たりするのだけど」

「そういえば、本戦でラツシユさんが毒ガスで殺したプレイヤーって・・・」

「ええ、あなたたちと同じSAO生還者だったらしいわね。菊岡って人から全部聞いたわ」

「そう・・・」

攻略組の最大ギルド、血盟騎士団の副団長だったアスナ。当然、彼女はラツシユの行っていたことも知っていた。立場も力もあつた彼女は、キリトの言う『ラツシユに背負わせていた』プレイヤーの1人だったのだ

「私が標的だったのは、また別の事情があつてのことなのだけど・・・それも全部解決してる。あれはもう終わったのよ」

「そうですか。ごめんなさい・・・これからよろしくね」

「よろしく」

9 話

ラツシユがALLOに戻ってきてから2週間。ALLOもGGOも、現実でも特に何も起こらない平凡な日々を過ごしていた。そうしてクリスマスマスが迫ったある日のこと

「25日のアップデートでアイコンクラッドの21層から30層までを実装か・・・」

「ああ、もう20層のフロアボスは討伐済みだから、実装されれば即21層が開放される」

暇つぶしがてらに行つた20層の迷宮区での狩りから帰つてきたラツシユに、キリトはアップデートの情報を伝えていた

「そんで？それだけをわざわざ言にくるほど、お前さんもヒマじゃないだろ？」

「それでなんだけど・・・アップデートしたその日に、21層のフロアボス討伐をしたいんだ。誰よりも早く、いの一発で。手を貸してくれないか？」

「なんだ？ボスからのドロップ品狙いか？つて待てよ・・・ハハーン、そういうことか」
「うぐっ・・・」

キリトの頼みの理由がわかつたラツシユに、キリトは気まずそうに顔を逸らす

「OKだ。シノンにもメッセージで要請しておこう。えーっと、タイトルは、『キリアス

夫婦の思い出の愛の巣、再ゲットの協力依頼』つと」

「ちよ、ま?!」

ラツシユの、聞いてるだけで恥ずかしくなるようなメツセージのタイトルに、キリトが止めようとする。しかし、ラツシユはキリトを片手で抑え、器用にもう片方の手だけでメツセージを打ち込んでいく

「ホイ送信つと、残念だったな」

あつという間に入力し終え、送信ボタンが押された

「あとは今のをコピペして、風林火山とエギルに、この間知り合ったケットシーの領主のアリシヤにも・・・」

「お願いします止めてください恥ずか死にます!」

「SAOで彼女作ったりア充は爆発しろ!!」

どうやらラツシユの悪役ロールはまだ続いていたようであった・・・

「周りからの視線が生温かい・・・」

アップデート日の25日、21層の迷宮区のボス部屋の前、現在ボス戦前のローテアウト中。集ったレイドパーティーのメンバーからの視線に、キリトが肩身狭そうに呟いた

「もう！ラッシュュさんが変なタイトルで参加を呼びかけるからですよ!!」

「んー？本当に俺のせいかなあー？」

「ま、メッセージのタイトルのセンスはともかく、目的は間違っていないでしょ？」

「そ、それはそうんだけど・・・」

シノンの返しに、アスナは口籠った

「あれ？ひよつとして今俺デイスられた？」

「そう？気のせいじゃないかしら？」

初めてのフロアボス攻略に参加するシノンだったが、意外と落ち着いているようで、ラッシュュを軽くあしらっている

「っつーかラッシュュ、GGOでも違和感あったのに、ALOでもスーツ姿なんだな」

「別にいいだろ。カッコいいんだから。こういうのはファンタジーな世界だからこそ映えるんだよ。所謂ギャップ萌えてやつだ。リアルじゃ着てるだけで疲れるけど、ゲーム内ならそういうものもないしな」

この2週間でラッシュュは一通りの装備を揃えた。刀はオーダーメイドではないが、リズベット作の店頭販売の品。防具扱いのスーツは金にものを言わせ、SAO生還者で腕利きの針子のアシュレイに作らせたものである。GGOでしていたビシツとした着こなしではなく、ネクタイを適度に緩めてワイシャツの上のボタンを開けるといいう、ラフ

な着こなしである

「スーツに刀。イツツアジャパニーズ●クザスタイルってやつだよ。女のセーラー服に機関銃と並ぶお決まりのスタイルってやつだ」

「いや、それなんか違う気がする」

「俺は仕事を思い出しちまうぜ」

つとクラインが会話に割って入る。他にも数人の社会人プレイヤーが、ラツシユの姿を見てはウンウンと唸り声を上げていた

「相変わらずラツシユは●クザスタイルなのね・・・レンとも話したことあるけど、あなたのカッコいいの基準がイマイチわからないわ」

「そう言いつつ、シノンの衣装だって学校の制服風じゃねーか」

「あら？私にはラツシユが周囲から浮かないように合わせただけよ」

シノンの格好はブレザーの制服で、下はもちろんスカートだが中にスパッツを穿くという、鉄壁のパンチラ対策がされていた。もちろんアシユレイ作である。武器は、なんとか間に合ったリズベツト作のオーダーメイドの弓である。残念ながら200メートルの射程はシステムの実現しなかったようだが、それでも100メートルの射程は確保されている

「テーマはアーチェリー部の女子生徒ってところかしら」

「こつちもこつちでマイナーなフェティシズムを擽る格好を・・・」

「キーリートーカーン？」

「ハッ！・・・アッ！ちよ?!耳を引つ張るのは・・・」

シノンの格好を眺めていたキリトがアスナに引つ張られていった。妖精の長い耳を強く触られ、キリトが苦悶の声を上げている。ALOでは現実の人間には無い、妖精の長く大きい耳やケツトシーやインプの尻尾などは、触覚が敏感になっているのだ

「ありや新しい扉開きそうだな」

「ラツシユ下品」

「すんません」

ククク・・・と笑うラツシユをシノンが嗜める。そして流れるように謝るラツシユであった

「でも、ここだけの話。俺にはわからん感覚なんだけどな」

「ああ、そういえばあなたはリアルでも持つてるものね」

少し声を抑えつつ話す。キャーティア人のラツシユは、現実の体でもケツトシーと同じ猫耳と尻尾を持っているので、触覚が敏感になるということは無いのである

「ただ、副耳がある位置に何も無いのが違和感だな」

「副耳？」

「人間の耳のほうのことだ。構造も人間の耳と同じで、主に音の方向を知るために使うものだ」

「へえ。なら耳が4つあるってこと？」

「そういうこと。おつ、ローテアウトの最終組も戻り始めてきた。そろそろ始まるな」

「あ、これアカンヤーつや」

ボスが現れて早々に、ラツシユはそんな声を上げた。というのも、ボスがラツシユのようなAGI寄りの刀使いとは相性が最悪に近い岩石ゴーレム系のモンスターだったからである。タダでさえ繊細な刃を持っているので耐久値の低めの刀の、さらに低いAGI寄りのそれは、堅い体を持つ敵は天敵とも言えた

「悪い、これ俺戦力外だわ。刀の耐久が持たん」

「うおおおい?!いきなり何言ってるの?!」

「文句はこんな刀売ってたりズベツトに言え。資金もカツカツだったから予備の刀も無い。俺は終盤まで積極的な攻撃は仕掛けない方針でいく。それまで遊撃でタゲ分散に務める」

「つたく、仕方ないか」

「アンタらあとで覚えてなさい!!」

ボスに突撃する攻撃部隊。その中にいるラツシユとキリトのやりとりである。もちろん同じ攻撃部隊にいるリズベツトには丸聞こえである

ダメージによるヘイトとは別の、接近状態を保つことによるヘイト上昇を利用し、ボスの攻撃ターゲットを自分に向けるラツシユであった

「もう、ラツシユさん、また危なっかしい戦い方をしてる。SAOでもアレやってたのよ」

「へえ、でも攻撃は喰らってないみたいよ」

後衛の魔法支援ポジションのアスナは、そんなラツシユの戦い方にハラハラとしている。同じく後衛で、弓矢による射撃支援ポジションのシノンは、パーティーメンバーであるラツシユのHPが減っていないとアスナに伝える

「いやはや、彼はすごいねえ・・・動きが人間離れしている気がするよ」

—その人間が、地球人って意味なら、ラツシユは人間ではないことになるわね・・・アスナと同じウンディーネで、男性プレイヤーのクリスハイトがラツシユの動きを見て呟いていた

—そういえば、このプレイヤーはあの菊岡って人なのよね・・・政府の人間だけど、ラツ

シユの正体は知らないのかしら？

「ALLOがレベル制でもセルフでステータス割り振り制でもないからそう見るだけで、レベル制で自由にステ振りのできるGGOならザラにいるわ」

「ゲームが違うだけで、あれも普通の動きになるのか・・・いやはやVRゲームの世界は複雑だ」

シノンにはラツシユのフォローをしておいた。菊岡という人物が信用できないからこそ、キヤーティアの存在は知られないほうがいいと踏んだからだ

シノンの言葉に、クリスハイトは疲れたようにため息をつき、戦いに集中しようと頭を振って余計な思考を断ち切った

「タンク部隊、30秒後にA隊からB隊への入れ替え！メイジ隊は撤退サポートを！ヒーラー隊は回復準備を！」

攻略の指揮を取っているアスナの指示が飛び、メイジ扱いの長射程アーチャーのシノンも弓に矢を番える

アスナの指揮や統率力も、年齢を考えるとありえないくらい堂々としててスゴイと思うわ・・・しかもかつてはSAOで、命がかかった戦闘で周りに指示を出してたつて言うのだから・・・

初めてのフロアボス攻略戦で、その激しさを体感しているシノンは、冷静に指示を出

しているアスナの胆力に驚かされていた

「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・魔法放て！魔法命中後タンク部隊スイッチ！」

アスナの合図でボスに向かって一齐に魔法が放たれ、それらが命中し一瞬タンクへのヘイトが相対的に下がる。その隙にタンクが交代し、キリトたち攻撃部隊の盾役が復活する。最後に攻撃部隊がボスに攻撃を行い、上昇した後衛へのヘイトを上書きする

「・・・うん、今の状態での攻撃パターンは拮めたわ。偵察無しのおつつけ本番だったけど、今のところ想定外の要素もない・・・ゴーレム系だから防御堅めだけど、その分スピードは遅いから、じっくりやれば勝てるわ」

「HPがレッドゾーンに入るぞ！攻撃パターンの変化に注意しろ!!」

攻略は進み、前衛でキリトが周囲に警戒を促す

「さて、終盤だし、そろそろ俺も積極的に攻めていきますかね」

「ああ、そうしてくれ。できれば一気に片を付けたい」

ボスのHPがレッドゾーンに入り、パターン変化を知らせるかのようにボスが咆哮する。そんなボスを見て、ラッシュユが刀の鯉口を切る

「パターン変化後の最初の動きを見て、行けそうなら行く」

「わかった」

咆哮を終えたボスは拳による薙ぎ払いからの振り下ろしの2連攻撃を繰り出した。タンク部隊が薙ぎ払いで吹っ飛ばされ、振り下ろしの衝撃で攻撃部隊の足が止まり、前衛の隊列が崩れる

「クッ!!」

「出るぞ！俺が相手してる間に、隊列を組み直して体勢を整えろ！」

ラッシュは刀の柄に手をやり、抜刀術の構えをとる。それをトリガーにデータが読み込まれ、僅かに見える刀身が光り輝く

「ソードスキル?! 初っ端から放つのか?!」

「いや、おかしいぜキリの字よ！刀系スキルに、あんな構えから始まるモーションは存在しねえ！」

「なら考えられるのは・・・OSS?!」

OSS・・・オリジナルソードスキル。独自のモーションを登録することでソードスキルを製作する機能。しかし製作における成功条件が非常に厳しいために、一種の奥義扱いされているものである

データの読み込みが終わり、ポンツとラッシュがボスの顔の前にジャンプした瞬間、

ソードスキルのモーションが始まる。抜刀からの右やや上に向かつての横薙ぎに始まり、斬り返しの右上からの袈裟切り、それを右下から左上への斬り上げに繋げ、右やや下向きの横薙ぎに持っていく。一点で交差する4本のダメージエフエクトのラインがボスの顔に刻まれた。そこで刀は鞘に戻された

「4連撃か・・・」

誰もがそこでラツシユのOSSが終わったと思った。しかし空中にいるラツシユにソードスキル後の硬直が来る気配がないことに、一部のプレイヤーたちが気付くと同時に、ラツシユの刀は再び鞘から抜き放たれた

「まだ行くぞ?!」

「ならなんで一旦鞘に戻したし?!」

再び抜かれた刀でラツシユはボスを斬り始める。初めに付けた4本の切り傷を補助線にするかのように、星型八角形を刻む。最後にその中心に突きを放ち、素早く抜き去る

「必殺、『なんか適当に図形描いて点打ったらできた13連撃』切り!!」

「「ネーミング悪つ?!」」

「つてか、なんでモーション中に鞘に戻す動作入れたんだよ・・・? 13連撃だけど隙だらけだろ・・・」

「そういう無駄なところに拘るのはラッシュユらしい気がするぜ」

周囲がツツコミを入れるが、そんなことお構いなしにラッシュユは納刀してソードスキルを終え、静かに着地する。キリトとクラインは呆れたようにボヤいていた

13連撃を叩き込まれたボスはというと・・・

「うわー・・・微妙に残ったよ・・・この刀がもうちよつと強かつたらイケてたぜ？」

「なんですつて?!」

「事実だろ?・・・あ」

数ドットだけHPが残っていた。ソードスキル後の硬直で動けないラッシュユは、それを見て刀のせいにした。製作者であるリズベットが文句を言おうとするが、直後にラッシュユの刀は壊れて消滅した。SAOからの引継ぎで刀の習熟度は上限に達している。もちろんラッシュユは刀に無理な力を掛けたわけでもない。しかし、いくら耐久値の低いAGI寄りの刀で堅い相手を斬ったとはいえ、13連撃で耐久値が全て無くなることは通常ありえない

「13連撃を1回やって、耐久値全損・・・なにか言いたいことは、リズベットさん？」

「あー、うん、その・・・ごめんなさい」

ラッシュユのジト目での追及に、流星に自分でも不良品だったと認め、謝罪をしたリズベットであった

ちなみにボスは、後衛からアスナが特攻仕掛けて倒していた
ともあれ、こうしてキリアス夫婦の思い出の愛の巣への最難関は突破されたのである

10話

「なあレン……最近ラツシユのやつがドロップ品を売りに来る頻度が減ったような気がするんだが……?」

「そうですねー。今別アカウントでシノンとALOに行ってるみたいですから、仕方ないですねー」

GGO、商人ロールの個人バイヤーが経営するガンシヨップ・ブラックアロー。GGO内のラツシユたちの補給の拠点となっている場所である。店主はコレクシヨン兼商品の銃たちを満足そうに見つつ、やや退屈そうに、消耗品の補給にやってきていたレンと話していた

「何? ALOだと? あんなメジャータイトルを今から始めても、上位プレイヤーのお零れ頂戴プレイしかできないんじゃないか?」

「ラツシユさん、元々ALOにアカウント持つてるらしいですよ。新規アカウントはシノンだけですよ」

—ラツシユさんがSAO生還者だつてことは、言わなくてもいいかな?

店主は人気タイトルVRMMOの競争の激しさと出遅れを取り戻す難しさを指摘す

る。事実、VRMMOはそれ以前の非VRのネットゲームよりもプレイ人口が多い分、競争が激しい。またアバターとはいえ顔を合わせて会話ができるので、人間関係にも気を使わなければならない。先を行くプレイヤーに追い付くことも困難と言われている。ただゲームが上手いだけでは、ほぼ上位に上がることは不可能。しかし、シノンのように人や運に恵まれたら新規プレイヤーも上位に名を連ねられるチャンスがあるという、ある種現実よりも厳しい世界である

「もう最前線まで行ってるらしいですよ。昨日はアップデートで追加された場所を大人数で攻略したって」

「ほーお．．．ま、アイツのコミュカなら、人付き合いに苦労はせんか．．．にしても、ラッシュがシノンとばっかりつるんでALOに行つて、お前さんとしては面白くなかったりするののか？」

「え？いやべつに．．．」

「つていうか私がラッシュさんの背中押して、行ってもらってる感じなんだけどなあ．．．」

「あれ？そういうもんか？まあ、俺はそういう目的でVRゲーしてるわけじゃねえから興味無いが、他人がやってるのを否定もしないスタンスのつもりだ。俺はてつきりお前さんやシノンは、ラッシュのことをそういう風に見てると思つてたぜ？」

店主のからかいにレンは冷静に返す。そんなレンの反応は、店主にとっては意外だったようで、核心を突く質問がされる

—私がラツシユさんを・・・？んー、この前詩乃ともそれ話したけど、まず地球人とキヤーティア人が付き合えるのかって問題が・・・

「確かに、そういう感情はある、ことにはある・・・って感じかな」

—仮に生物学的に問題がなかったとして、ラツシユさんと・・・悪くない気がする。リアルでも私より背が高かったし、リアルでもGGOでも普通に接してくれて話し易いし・・・お母さんであるジェーンさんの印象もいいし、結婚してからもいい関係で・・・近くに既婚者の姉が暮らしているためか、恋愛を結婚前提として見ている感があるレオンであった

「たぶん、シノンも同じ感じだと思う・・・でもGGOで会える時間なんて限られてるし、取り合うのに時間を割くくらいなら、どうせゲームだし2人でラツシユさんを振り回したほうが楽しいだろうなあ・・・」

—現実でも、私は大学1年生、詩乃は高校1年生、ラツシユさんは社会人・・・すぐにどうこうなることもないだろうしなあ・・・折角仲良くなった2人とピリピリしたくないし・・・

現実で顔を合わせたことがあることは店主は知らないため、予防線としてGGO内の

こととしてレンは返した

「エグイこと考えるなあ．．．お前さんらに目を付けられたラツシユに同情するぜ」

「さて、GGOに入るのは今年は今日で最後。明日は帰省しなきゃだし、そろそろ落ちますね。よいお年を〜」

「おう、よいお年を〜」

今日もGGOは平和な1日であった

「え？何？エクスキャリバー？」

『ああ、今年最後の大クエストってことで、アスナたちとヨツン Heim のダンジョンに行くんだ。移動方法の都合で7人の1パーティでしか挑めないってことなんだが．．．』

年の瀬も迫った28日。現実世界でラツシユのスマホにキリトの中の人こと桐ヶ谷和人からの着信が来た

「悪い、俺は無理だ。ちよつと来年から職場の人員が増えるから、今大掃除がてら受け入れ準備してるんだ。ゲームに入る余裕が無い」

『そうか．．．』

「代わりに詩乃を誘ってやってくれ。香蓮がもう帰省して、俺がこんな状態だから、たぶ

んヒマしてるだろうさ」

『わかった。じゃあまた』

電話が切れ、ラツシユは作業に戻った

『つてラツシユが言つてたからかけてみたんだが・・・』

「ええ、まあヒマだったけど・・・」

年末ではなく、年が開けてからの帰省の計画を立てていた詩乃は、キリトからの電話に、顔を顰める。越してきて1年目であるため、そこまで大掃除も手がかららず、またキヤーティアから与えられたアシストロイドたちの手伝いもあつたおかげであつという間に終わり、詩乃は久方ぶりの余裕のある年末を過ごしていた

—まるで私がラツシユやレン以外の友達がいなみたいじゃないの・・・否定できないけど

—デスガン事件以降、正確には銃に対するPTSDをある程度克服し、イジメから抜け出してからは、学校内で話をするくらいに友達はできている詩乃だったが、休みの日に遊ぶまでの友達はまだいなかったりする

—ま、ラツシユ抜きでもALOで人付き合いをするにはいい機会か・・・

これまで、ALLOにはラッシュと一緒にログインしていた詩乃にとって、初めてラッシュ抜きでALLOにログインすることになる。キリトとは、デスガン事件の説明で現実でも顔を合わし、初めてALLOにログインした日から数日後には、エギルのカフェで現実のアスナたちとも会っている。ラッシュ抜きでもなにか問題が起こると思えないため、詩乃も安心して参加を決める

「それじゃ、あとのことはログインしてからでいいわね？」

『ああ、それじゃALLOで』

つと電話を切り、ふうつと一息

「それじゃ、準備しますか・・・」

「いつてらっしゃい」

アシストロイドのプラカードに詩乃はクスリと笑う。アミュスファイアを装着してベッドに横になる

「それじゃあ、留守番お願いね」

「まかせて」

「リンクスタート」

それから数時間後のこと・・・

現実世界、東京御徒町にある『ダイシーカフェ』は夜の営業時間に入り、昼間のカフェからバーとしての営業にシフトしつつあった

店の入り口のドアが開き、ドアに付けられたベルが音を鳴らし、店内に客の訪れを告げた

「いらつしやいませ」

「よ、エギル。いいところだな」

夕食時ではあるが、年末の忘年会シーズンということもあり、やや少な目の入りの店内で、スーツ姿の客はカウンター席に着き、カウンター内で料理を作っている店主に話しかけた。それに驚き、店主であるSAO生還者、アンドリユー・ギルバート・ミルズ、通称エギルはその客をまじまじと見た

「お前、ラツシユか？」

「店に來ねえつて嘆いてたから、仕事終わりに来てやったぜ。カフェだつて聞いてたが、夜はバーなんだな」

お客は地球人に変化しているラツシユである

「おうよ、クラインのヤツなんかはよく呑みに来るぜ。酒はイケる口か？」

「イケるが悪い、車なんだ。そのコインパーキングに停めてきてな」

「そりや残念だ」

エギルは作業をしながらも、肩を竦めた

「飯は何が・・・つと」

「おつと悪い、電話が・・・」

ラツシユがメニューを選んでいると、店の電話が鳴る。エギルは電話の子機を取つて肩を頭で挟み、応対しながら作業を続けた

「はい、ダイシーカフェ・・・ああキリトか？・・・そうか、終わったか・・・それで、打ち上げをウチで・・・まあ1時間もすれば空くからできるぞ・・・わかった、準備しておく」

「なんだ？キリトたちが来るのか？」

「ダンジョン攻略と聖剣エクスカリバー獲得の打ち上げだとき。それと今年最後の現実での集りだよ」

電話を戻したエギルはラツシユに内容を話す

「若いねえ」

「お前さんも見た目変わらんだろ。そういやお前さん歳は？」

「今年22になった」

「クラインより下かよ。アイツ25だからな。それでもう仕事してんのか？」

22歳ならば普通は大学4年生辺りである。そんな年齢でスーツを着て仕事をして
いるラツシユにエギルは驚く

「海外育ちだからな。飛び級で少し早めに学生は終えてた。SAOに入ったときは、も
う今のところに就職してたな。だからってわけじゃないが、今だに下っ端なんだけ
ど
な」

「お前が人の下で働いてるなんて、俺は想像もできんがな」

「そうか？リアルじゃ結構真面目にやってるつもりだぜ？」

キヤートイアの外交団は日本で例えるならば外務省と自衛隊を足したような組織で
ある。ラツシユも当然それらの教育を受けた人なのである。ここでアルコールを取れ
ないのも、車で来た以外の理由として、外交団の一員としての行動制限もあるからであ
る

「さて、じゃあキリトたちが来るなら、軽めのものにして待つて、飛び入りで参加するか」
「そうだな。あいつらも喜ぶだろうさ」

キリトからの電話から1時間ほど、打ち上げの参加者は集り、クエスト達成お祝い兼
今年1年の納会は始まった

「ALLOでSAOの引継ぎアバターを見てて思ったけど、ラッシュってホント絵に描いたようなイケメンよね」

「いきなり凄い絡み方してくるなあ・・・おい、リズベットに酒飲ましたの誰だよ？」
「飲んでないわよ。スーツでキメちゃってモデルかって」

開始早々にリズベットの中の人である篠崎里香がラッシュに絡み、ラッシュは辟易とした表情をする。遺伝子調整で美形揃いのキヤーティアにとっては、イケメンは何の褒め言葉にもならないのである

「私は、初めはSAOからの引継ぎだって知らなかったですから、ALLOのアバターがそのままいるような感じがします」

「私もSAOでは会ったことありませんでしたから・・・それにALLOでもスーツ着てますし・・・」

リーファの中の人である桐ヶ谷直葉と、今回のクエストに参加していたSAO生還者のシリカの中の人こと綾野珪子が違和感あると言いたげな表情を浮かべている

「なんでえ！俺だってスーツぐらい仕事で着てらあな！」

「アンタが着てても、普通のサラリーマンにしか見えないわよ。しかしこんなイケメン、会社の女性たちがほっとかないんじゃないの？」

女性陣からのウケがいいラッシュにクラインの中の人こと壺井遼太郎が妬みの声を

上げ、それに里香はツツコミを入れつつ、大変そうねえ……つと詩乃を煽る視線を向ける。もちろん詩乃はそんな視線をクールに受け流した

「ま、ウチの会社は女性が強いらな。それに、会社のカウンセラーで俺の母親がいるせいか、あんまりそつち系の話はないな。ぶつちやけ子ども扱いだ」

「あら？ そうなの？」

「社内カウンセラーがいるなんて、結構大きい会社なんですね」

「まあな、福利厚生はしっかりしてるよ」

適度にボカシつつの世間話に付き合うラッシュユ。この手の本当の部分を隠す会話は、VRゲーム内でのリアルの話話を話すときとあまり変わらないものである

つと、ラッシュユについてはそこそこに、徐々に話題は今日行ったクエストにシフトし、打ち上げは進んでいくのであった……

「ごめんなさいね。わざわざ送ってもらっちゃって」

「いや、構わんよ。そんな遠回りしてわけでもないしな」

打ち上げ終了後、詩乃はラッシュユの運転する車で自宅に送ってもらうことになった
「あいつらとのクエストは楽しめたか？」

「ええ、友達とこんな風に遊ぶのは凄く久しぶりだから、少し戸惑ったりもしたけど、楽しかったわ」

「そっか、それならいい。人生楽しいが一番だ。そのために俺たちキヤーティアは宇宙を渡って楽しいことを探してるんだ」

キヤーティアの宇宙外交は、7年以上にも及ぶ平和なときが続き、文化的な行き詰まり感が強くなったために、それを打破することを目的としている

「ねえ、そういうえばキヤーティアと地球人って付き合えるの？」

「ああ、リズベットの言ってたことか？」

話の流れで詩乃はラツシユに、ここ最近で気になり始めていたことを聞いた

「・・・まあ、お互い越えなきゃならんハードルはあるが、医学的、あるいは生物学的に不可能じゃないさ」

少しの思考の後、ラツシユは真面目な表情で詩乃の質問に答え始めた

「ハードルって・・・？」

「まずは寿命だな。俺らキヤーティアの平均寿命は200〜300歳だ。一方で地球人、日本人は90歳くらいか。その差は大きい・・・必ず地球人がキヤーティア人を残して逝くことになる。それをお互いがどう感じるかだ」

「そうね・・・」

ラッシュの説明に、詩乃は表情を曇らせた。自身の母親は、夫の死で精神を病んだ。愛する人を残して死ぬ重さ、愛する人に先立たれることの悲しみ、苦しみを詩乃は一番近くで見えてきたのだ

「次は、単純に競争率の問題。キャーティアは男女比が1対30とかなり女性に偏っている。それでいて一夫一妻制だ。女性側の競争率は単純に考えて30倍。そこに種族の違う女性が割って入ることになる」

「それは……」

「さらにやっつかいなのは年一回の発情期だ。男も女も子孫を残す本能が強くなって理性がほぼ無くなる。投薬で止めることはできるが、『止めるのもやむを得ない』という理由と、医者の方箋がある。基本的は安全上の理由や怪我等の治療上の理由以外では認められない。これは俺たちキャーティアの法律で決まっている」

「止められない人は、どうなるの?」

「女性は、運よく番つがいとなる男性を見つけて妊娠して止まるか、VRでそういう行為をして脳を騙すかで止める。問題は男は時が経つのを待つしかないってことだな。1人でも多くの子孫をつて本能で、1回ヤっても発情期が収まらん。その辺りは元が猫だから仕方が無い」

かなり赤裸々なキャーティアの男女の事情に、聞いた詩乃は顔が真っ赤になっている

が、ラツシユとしてはあくまで生物学の授業のような意識で話している

「トラブル防止から、番を持った男性は、相手を妊娠させたら、投薬で止められるが、それもその年と次の年だけだからな・・・」

詩乃としては、結婚などを想定しての質問ではなかったが、発情期のあるキヤーティアとしては『付き合う＝結婚＝子どもを持つ』である

「えっと、他にも何かハードルはあるの？」

「そうだな・・・まだキヤーティアと地球人との間に子どもが生まれた前例は無い。恐らく初めの数例は研究としてデータを取られるだろう。医学的、生物学的に成長過程が記録として細かく残されることになる。これはその子どもが母親の胎内にいるときから始まるだろう。母親は妊娠中、キヤーティアシップの医療エリアで管理されることにならる。ある意味観察動物扱いだ」

そして最後に・・・つとラツシユは続ける

「生まれる子どもが、地球人、キヤーティア、どちらの容姿かは胎内での成長を見ていかないとわからない。キヤーティアの生物学者は、地球人とキヤーティアではキヤーティアの容姿になる可能性が高いという意見を示してる。自分が生んだ子が、自分には無い猫の耳や尻尾を持っている。それを受け止める覚悟はあるだろうな」

「随分と詳しく語るのね・・・まるで」

「今の質問を想定してたようだ、か？」

車が詩乃の住むアパートの前に着く。しかし、会話は続く

「ええ」

「してたよ・・・俺じゃなく、母さんがな。GGOでシノンとレンと出会ってから、すぐに過去の事例を調べて、俺に釘を刺してきた。『もしも2人がそういう素振りを見せたら、ちゃんと説明をすること』ってな」

「そう・・・」

あのとときの詩乃や香蓮は、ラッシユと現実で会うことになるなんて、予想もしていなかっただろう。そのときから想定していたとは、母親とはすごいものである

「それで、『その上で、2人があなたと一緒にいたいと望むのなら、あとはあなた次第よ』だとさ」

「でもキヤーティアは一夫一妻なんですよ？ラッシユは、私と香蓮、どちらを選ぶの？」
突き放すだけではない言葉に、詩乃は少し安心しつつ、軽いからかいのつもりで聞いてみた。しかし、その問いに、ラッシユは気まずそうに詩乃に顔を見られまいと、フロントウインドウから運転席側のドアウインドウに顔を向ける

「これも母さんが言ってたことだが・・・『大丈夫、キヤーティアの一夫一妻制なんて建前で抜け道だらけだから』って・・・」

「ええー・・・」

「まあ、詩乃も香蓮もまだ学生だ。その気であっても、今すぐどうこうつてわけじゃない。ゆっくり時間をかけていけばいい。母さんの言ってることは、あくまで拗れたらそれで無理矢理解決って意味だろう」

「それはどうかしら・・・?」

ラッシュユの母親であるジェーンとはまだ短い付き合いだが、案外本気で言ってるそう
だ、と詩乃は自分たちのそんな将来を少しだけ想像してしまうのだった

2026年1月

11話

年が明け、2026年になった。正月休みの3日間も過ぎた1月4日

香蓮が東京に戻ってきたこともあり、また、年末年始の帰省ラッシュを避けて帰省する詩乃が、香蓮と入れ替わるように次の日に東京を発つこともあり、ブラックアローのメンバーは夜にGGOで会っていた

「今年もよろしくお願いします」

「よろしくね」

「ことよろ」

「今年も儲けさせてくれよ」

4人がそれぞれ挨拶をしつつ、適当に世間話に興じ始めた

そんな中、店主が『あつ！』っと何か思い出したように、手をポンと打った

「そういえば、お前さんら、スクワッドジヤムって知ってるか？」

「知らん」「知らないわ」「わかんない」

「お前ら、最近俺に冷たくね？」

店主の問いかけに、3人は考える素振りすら見せず即答で返し、聞いた店主は涙目になる

「おっと、先に言っておくが、イカのジャムじゃないからな？」

「そんなボケ、誰がするかよ」

（そういうえば、猫ってイカを食べさせたらダメって聞くけど、キャーティアはどうなんだろう・・・？あれ？そもそもこの前一緒に食べたもんじゃに、切りイカが入ってたよ
うな・・・）

店主とラツシユのやり取りを余所に、レンとシノンの思考は脱線していた

「簡単に言えば、B O Bのチーム戦バージョンだ。どこぞの誰かが個人スポンサーでザ・スカーに開催を要望したらしい」

「個人スポンサーって、ザ・スカー金儲けに貪欲すぎだろ。他V Rゲーより高い接続料に、公式R M T、グロツケン内に現実の企業の広告出したり・・・その上個人スポンサーの大会開催とか」

「ま、デスガン事件で報道されたから、焦ってるのもあるんだろうな。どれもプレイヤーがいなきや話にならないシステムだし。プレイヤーを繋ぎ止めるのに苦労してんだらうさ。他にも、対物ライフルがアップデートで大量に増えるって話があるしな」

デスガン事件の報道で、ガンゲイルオンラインの名前は悪い意味で世間に広まってし

まっている。その影響はプレイヤーのみならず、広告を出してる企業にも及び、ザ・スカーは苦境に立たされると言えた

「ついで？俺らもそれに出ようぜ、と？」

「ま、お前さんらは第3回BoBの本戦の1位から3位なわけだし、個人スポンサーの小さな大会じゃ余裕で優勝だろうが、話題作りくらいにはなるだろうさ。日々稼がせてもらってるこのGGOに、ちよつとくらい恩返しするのも、悪くないだろう？」

「なるほどな」

店主の言葉に、ラツシユは頷きを返す

「ついで、本音は？」

「お前がALLOに行くようになって刺激が無くて寂しいんです」

「キモツ！俺、男同士の絡みは現実、妄想問わずNGなんで」

店主が泣きながら本音を口にするが、ラツシユはそれに対し距離を大きく取りながら返した

「ハッ、俺だってBLはゴメンだよ。だが、お前がドツサリとドロップ品を持ってくる、あの滾る感覚が、もつとほしいだよ」

「それ単純に、もつとコレクション増やしたいとかお金稼ぎたいってだけじゃ・・・」

「そうとも言う」

レンのツツコミに、店主はケロリと表情を変えた

「とりあえず日程はいつなの？」

「2月1日だよ」

「まあ、私は特にリアルの予定に影響は無いわね。ラツシュやレンが出るなら私も出るわ」

ただし・・・っとシノンには店主に向く

「弾薬運搬係は任せたわよ。私、ストレージにはヘカートIIとグロッグ18のマガジンが1つずつしか入らないから」

「おいおい、マジかよ。そんなの聞いてねえぞ・・・通りで前の戦争のとき、ハンヴェーの中に実体化させたままでマガジン置いてると思ったらそういうことかよ」

シノンのビルドは通常のスナイパービルドよりSTRを多めに振っている、対物ライフル用スナイパービルドというものである。STRが多い分ストレージの容量も大きくなっているが、肝心の対物ライフルがその容量のほとんどを占めており、予備弾薬の携行数が大幅に制限されてしまっているのである

「私は一応実体化、ストレージ合わせて50発入りマガジン18本だからP90はなんとかなるかも。だけどハンドグレネードは2個だけだし、あとラツシュさんにもらったサブのビームナイフ壊しちゃったから・・・」

「チーム戦なら1回の戦闘の時間も長くなるだろうな。前の戦争で浮き彫りになったが、俺の武装は戦闘が長期化すると、1マガジン当たりの装弾数が少ないからリロードが増えて面倒臭い。そもそもの話が、俺のやってるドロップ漁りのMOB狩りが1マガジンで1グループの敵集団を殺しきる短期決戦だからな・・・」

どんなビルドにも一長一短があり、プレイヤースキルで長所を伸ばしつつ短所を補うことが必要になるのである

「レンはともかく、ラッシュとシノンによく2位3位になれたな・・・」

「レンが他を倒したから、俺らの順位が上がっただけだ。俺らのキル数は上位陣の中じゃ少ないほうだ。俺とシノン、あと4位のキリトを足してもレンのキル数には届かない」

店主は知らないが、ラッシュたちはデスガン討伐の裏ミツシオンを遂行していたので、戦闘は可能な限り避けていた。その結果のそれぞれの順位であった。あまり褒められた戦略ではないが、ラッシュもシノンも予選で実力をしっかりと見せているので、観客から批判されることはなかった

「どつちにしろ、そのスクワッドジャムに出るなら、粗を潰しておかないと、案外簡単に負けもありえるかもな。お前も商人ロールだからレベル上げないと頭数にもならんし」

「うっ・・・戦闘は苦手なんだよなあ」

「最悪、俺のドロップ漁りに連れてってパワーレベリングするからな。出るつもりなら時間は空けとけよ」

「わかったよ……」

店主は肩を竦めた

次の日、帰省する詩乃を東京駅まで見送りに来たラツシユと香蓮

「そういうえば、2人に言っておくことがある」

新幹線の待ち時間を潰していた3人に、ラツシユが話を切り出した

「年が明けて無事にウチと先方との交渉は始まった。それで、2人は一般人だけど俺らの現地協力者ということにしてある。特になにかやってもらうことがあるわけじゃない。今までどおり口は固めで頼む」

「わかったわ」

「はい」

周りの人に聞こえないよう、やや声を抑えて2人に連絡事項を伝えた。こういうことは直接会って伝える。自分たちが突破できたアミスファイアやザ・シードのセキュリティはもちろん。スマホなどの通信機器すらキヤーティアにとっては信用できないも

のなのである

「基本、何か連絡事項があるときは、俺か母さんが伝達役になってる。2人からも俺や母さんに連絡くれれば、優先して時間を作れるようになってるから。何度も言うが俺は下っ端で、そう重要な仕事をしてるわけじゃないから、気楽に連絡してくれて構わない」「自慢になってないわよ」

「アハハ・・・」

ラツシユの軽い言い方に、詩乃と香蓮は乾いた笑みを浮かべた

「緊急時は別の人が行くかもしれないが、そのときはそのままの姿で君らの前に現れるから、わかると思う。だから知らない人にはちよつと用心深くしてくれ。君らはもう、非日常に半分足を踏み出している状態だつてことを、忘れないように」

「・・・わかりました」

「わかったわ・・・」

緩んだ雰囲気から一転して、真面目な警告をするラツシユ。振り幅のギャップがより警告の重さを彼女たちに印象付けることになったのだった・・・

詩乃を見送り、東京駅に残されたラツシユと香蓮。香蓮が帰省から戻ってきた移動疲

れも残っているの、ラツシユが車で真っ直ぐ送っていくことになった

「わざわざ送ってもらわなくてもいいのに・・・豊洲とは方向逆だから」

「そう言いなさんなって。最近ALOに入ってるから、香蓮との付き合いが薄くなってる気がしてるしな。GGOでもブラックアローで会えるときもあれば、会えないときもあるし」

「そういえば、リアルで2人きりって初めてかも・・・？」

車内で男性と2人きり。恋愛経験の無い香蓮は少しラツシユを意識するように頬を赤らめた

「あ、あの・・・詩乃から聞いたんだけど・・・私たち地球人と、キャーティアが結婚できるとって・・・色々問題はあるみたいだけど」

「ああ、聞いたか・・・本当は俺が話さないといけなかったんだけどな」

一旦意識しだすとそのことばかりが頭を占領し、恥ずかしさがあるのに香蓮は話題を振る

「ラツシユさんは私や、詩乃のこと、どう思ってるの？」

「直球で来るなあ・・・」

「ジェーンさんに言われたから、それだけで真面目に私たちにそういうことを説明しよってのは、少し理由としては弱い気がしたんです。私たちのこと、少しもそういう目

で見てないなら、『ありえない』で終わる話だと思えますし」

「確かに母さんに言われたこと、あれが単に母親として言っただことなら、少なくともまだ、2人には言わなかっただろうな。早いタイミングで話したのは、あれは母親としてじゃなく、外交団の医務官の1人として告知してきた事項だったからだ」

ラツシュとジェーンは親子であるが、仕事上の上下関係もある、複雑な間柄である。親としての注意したことが、仕事の遵守事項にもなることもあるのだ

—命令だから話したの？

詩乃に話したあの内容が、仕事上の命令で行われたことに、香蓮はショックを受けた「じゃあ・・・」

私や詩乃とは、仕事だから関わってるだけ？つと香蓮が問いかけようとした次の瞬間だった

「ありえないわけないだろう」

「っ！」

ラツシュは香蓮の言葉を遮って言い放つ

「ありえないなら、2人の前に現れるかよ。マンションに呼んで、秘密晒すかよ。その後アシストロイド送って安全確保したり、現地協力者として外交団が緊急時に保護できるようにするかよ。現にデスガン事件の関係でハッキングして個人情報得たプレイヤー」

たちに、謝罪なんてしてないし、協力関係だったキリトには何の情報も渡してなんかないからな」

少し自棄が入りつつラツシユが胸の内を語りだした

「ぶつちやけ見てるよ、そういう目でさ。だってGGO内だけの付き合いで終わるかと思つたら、色んな巡り合わせで現実で会えるチャンスが転がつてきたんだぜ？内面や本音が出やすいVRゲーで、気軽にモノを言い合える仲の女性を、好きにならないわけいだらう」

「・・・っ」

『好き』の言葉がはつきりと出てきたことで、香蓮の顔は真つ赤になった

「日本の感覚なら、香蓮は19歳で、詩乃は16歳だし相手として若すぎるのかもしれないが、キヤーティアは大体16歳で最初の発情期が来る。感覚の違いとしか言えないが、キヤーティアの中じゃなんの問題もない。ま、学生つてのは少々問題だが、地球人より長生きの俺らは、社会人になる5、6年後まで待つのも苦じゃない」

「あうあう・・・ちよ、ちよつとタイム・・・」

あまりにも直球に語られるラツシユの言葉に、香蓮はどうとう根を上げる。ラツシユも我に返り、自分の言った内容の恥ずかしさに、居たたまれない表情をしている

お互い落ち着くために、しばし無言の時間が過ぎていく

「・・・まあ正直、この問題は俺の気持ちどうこうじゃなく、女性の側である2人の気持ちが一番重要になる。越えるハードルは女性のほうが多いし、1つ1つも大きいからな」

「そう、ですね・・・」

「だつてさ」

「だつてさ、じゃない」

「香蓮さんのその肝の座り方は」

「いったいどこから・・・？」

その日の夜、香蓮はトークアプリで詩乃に、車内での会話の内容を伝えていた。返ってきた詩乃の文面には、呆れが表れていた

「私も聞くべきか迷ったんだけど」

「やっぱ気になったから・・・」

「男女比1対30の中で、違う種族の私たちをどう思ってるか？」

「それは・・・」

「そうなんだけど」

「この文章で見てるだけで」

「顔から火が出そう」

「だよー……私はそれを直接言われたんだよ」

詩乃の返信を見て、香蓮は一旦スマホから目を離して、寝転がっていたベッドからボーッと天井を見る

「一応私はラツシユさんのことを、好きではあると思ってる。けど、それがラツシユさんの言ってるハードルを越える覚悟を持てるほどかと言われると……ラツシユさんの言ってるハードルを越えてでも、ラツシユさんの傍にいる覚悟……難しいな。わかんないよ……」

小比類巻香蓮、19歳。初めての恋の悩みは、かなり難題なものであった

一方その頃ラツシユはというと……

「なあユイちゃんや……お前さんのパパは、実は凄いヤツだったんだな……」

「？」

「あれだけ周りの女性陣とキャツキャウフな展開を経験しても、アスナ一筋なんて……」

「おいラツシユ、ユイに変なこと教えんな」

自己嫌悪の真つ只中であつた。ALOにログインし、偶々見つけたキリトと一緒にいるAIのユイに、悩み相談をしていた

「なんだよ。レンかシノンに惚れでもしたのか？」

「ああ、そうだよ。悪いか・・・でも俺は社会人で、あいつらは学生。さらに俺は日本人じゃない。こつちからアクション掛けることもできん。このもどかしさがわかるか？」

「わかんねーよ。つてかあいつらつて言つたか？最低だな」

「うっせーよ。わかつてんだよ・・・」

キリトに言い返す言葉にも気力が無いラツシユであつた

「どうでもいいけど、あたしの店で暗い空気漂わせないでくれる？客足が悪くなるわ」

「元から俺ら以外に客なんて来ないくせに」

「あ、？」

ラツシユたちが駄弁つていた場所の主であるリズベット。ラツシユの言葉に、今まで鉄叩いていたハンマーを投げ付けようと振りかぶつた

そのとき、ドアベルが来客を告げた

「あの一・・・お取り込み中、だつたり？」

「いえいえ、とんでもない！いらつしやいませ、リズベット武具店へようこそ！片手剣か

ら戦斧まで、なんでも揃えております！」

来客にリズベツトが表情と態度を一変させて対応し始めた

しかし、その来客はリズベツトではなく、なぜかラツシユのほうに視線を向け、ラツシユに近付いていく

「わあー、ホントにいたー！この店に来れば、噂の13連撃の人に会えるって聞いたから来たんだ！」

「俺？」

来客の用事がラツシユであったことに、リズベツトは再び表情を一変させ、来客者の背後からラツシユを睨みつける

「ねえ、ちよつと、僕とバトつてくれない？」

1 2 話

イグドラシルシティの中央広場。そこで2人の決闘が行われようとしていた。周囲には100人以上の観戦客が集っていた

「観客多すぎね？」

「僕が呼んだんだー。ちよつと事情があつて、僕はこの決闘に勝つて強さを証明しなきゃいけないから」

「はあ、強さねえ……」

自己嫌悪十色ボケ中のラツシユは決闘にやる気なさげな態度で、対戦相手のインプの少女に向き合う。2人の間には立会人としてキリトが所在なさげに立っている

「ルールはなしありの羽有りでもいいのか？それで一撃決着」

「んー、そうだね。なんでもいいよ。僕はこの剣だけだから、なしなしでもありありでもいいし、地上戦も空中戦も僕は問わないよ」

対戦相手は腰の提げた剣の柄に手を当て、やや挑発気味にラツシユを見詰めて言う

「ただ、できれば全損決着でやりたいんだけどなあー」

「自分が先に一撃もらうことは確定してることか？」

「そういうわけじゃないけどさー。むしろなんで一撃決着？」

対戦相手のHP全損ルールのリクエストを、ラツシユは拒否するために煽る。しかし対戦相手は煽り言葉を受け流して理由を問いかけてきた

「別に？強いモン同士なら、1合でもやり合えば、どっちが上かわかるだろうって思ってた？それに、こっちは斬り合うには刀の耐久値も不安だしな。修理代払ってくれるわけじゃねーだろうし」

それに・・・つとラツシユは言葉が続ける

「ぶっちゃけ俺、SAO生還者なんだわ。その俺にHP全損の勝負をさせる意味、わかるか？」

ラツシユの、自身がSAO生還者であるという暴露に、キリトは驚きの表情をする。観客とした集ったプレイヤーたちも、その発言に口々に驚きの言葉を発している

ALOはSAO生還者が多く接続しているVRMMOではあるが、偏見やトラブルを避けるため、SAO生還者は自身がそうであると公言することはまず無い。キリトやアスナなどSAOで有名だったプレイヤーは、公言しなくても人伝にそれが知られているが、自らが簡単にそれを言えるような、軽い内容では決して無いものである

「命賭けて戦って、お前さんを殺せってか？冗談キツイぜお嬢ちゃん。俺に君みたい可愛い女の子を斬り殺せって？」

「おいラツシユ……」

流石に発言にマズイものを感じたキリトが止めに入る

「……すまない。ラツシユの言い方はともかく、SAO生還者の中には、まだHP全損の意味を重く捉えているプレイヤーが少なからずいるんだ」

「……わかった。それなら仕方が無いね。じゃあ半減決着でやろう。それならいいよね？」

キリトがフオローしてその場を納め、対戦相手も事情を聞いて、無理を通すべきでないかと悟って引いた

「ラツシユも、半減ならいいだろ？」

「はいはい、わーったよ。それで、賭け金はいくらにする？最近だと10万は賭けてるが、半減決着だから上乘せして……30万くらいか？」

「えっと……お金はちよつと勘弁してほしいかなー……」

「はあ？」

ラツシユが決闘で賭けるお金について聞くと、今度は対戦相手がそれを拒否し始める

「いやーその、お金はちよつと別に使う当てが……」

「いや、ちよつと待てよ……金賭けずになに賭けるんだよ……？」

バツが悪そうに顔を逸らして言う対戦相手

「最強の座、とか?」

「最強の座がほしいなら、サラマンダー領に行ってユーージン將軍とやるか、そこにいるキリトとでもやれよ。俺は別に最強なんて称号持ってねーよ」

コテンつと首を傾げながら言った対戦相手に、ラツシユは話にならないといった態度である。観客はラツシユが賭けデュエルで成り上がったことを知っているので、野次が飛ぶことも無い

「・・・わかった。ただ、今30万ユルドなんて持つてないから、出世払いで!」

「言ったな?マジで取り立てるから覚悟しろよ?」

「か、勝てば逆に30万ユルドもらえるんだし!」

「声震えてるぞ?あと、そっちから決闘申し込め」

対戦相手がラツシユに決闘を申請し、ラツシユが半減決着でそれを受けた。決闘開始のカウントダウンが始まり、対戦相手が剣を抜く。ラツシユはお決まりのスタイルである抜刀術の構えを取った

「そういえば、名前を聞いてなかったな」

「デュエルの申請に載ってたけど?」

「周りの客は知らないだろう?」

ラツシユの言葉に、対戦相手はああそうか・・・つとといった表情をする

「そうだね。ギルド『スリーピングナイト』リーダー、ユウキ」

「ギルド無所属、そうだな・・・13連撃のラッシュ、とても言うておくか」

名乗りが終わって、カウントダウンが0になって決闘が開始された

「っ！」

対戦相手、ユウキが開始と同時にラッシュに突っ込む。素早い突きと振りの連撃を、ラッシュはキャーティアの動体視力と反応速度、SAOで磨いた見切りで回避する

「っ！速いな」

それまでやる気なしかった表情が変化し、気合を入れ直したラッシュ。そんなラッシュの変化に、ユウキは警戒度を上げる。その直後、ユウキの踏み出そうとした足を、ラッシュが軽く蹴り、ユウキは体勢を崩す

「クッ！」

体勢を崩されながらも、追撃を避けるために大きく後ろに飛んで距離を取ったユウキ。しかしユウキの右腕の内側には切り傷のダメージエフェクトが付いていた

「綺麗に戦いすぎだな。騎士様ロールか？」

「いつの間に・・・」

「抜く、斬る、納める。とことん突き詰めた結果だ。ま、一撃決着なら俺の勝ちだったな」
ユウキがバックステップで飛ぶ瞬間、ラッシュは刀を半分鞘から抜き、ユウキの腕に

傷を付けたのだ。小さな傷で、ダメージ自体は微少なものであったが、この攻撃の本質はダメージではない。納刀状態だから、どこかで油断が生じていたユウキは、ラツシユの刀を扱うテクニツクの高さに驚く。そして、攻めの意識が鈍る

「……っ」

「どうした？ 来ないか？ お前は挑戦者としてここにいるんじゃないのか？」

決闘開始前のラツシユの言葉通り、1合の打ち合いで彼我の実力差を悟ってしまったユウキ

「ま、折角大金を賭けた決闘だ、こっちから攻めるのも悪くないか」

これまでの賭け試合では徹底して抜刀術でのカウンター戦法を取っていたラツシユが、スツと刀を抜いた

「っー」

高い敏捷値で一気に距離を詰めユウキに斬りかかる。ユウキは剣で打ち払って防御しようとする。しかし、ラツシユの狙いはその剣を持つ腕だった。ユウキの右腕にダメージエフェクトがさらに増える

「(っんのおっ!!)」

「やっぱ腕じゃダメージ小さいな」

ユウキの剣を回避しながら呟いたラツシユが、刀を鞘に戻す

「頼むから、死んでくれるなよ」

「っ?!」

鞆の隙間から漏れるソードスキルの光りに、ユウキは危険を感じ取り、先にラツシユを倒すべく剣を振るうが、それがラツシユに当たることは無い

13連撃のソードスキルの読み込みが終わり、モーシヨンが開始された。21層フロアボス攻略戦よりも速い振りで、初めの4連撃がユウキに刻まれる

「意外と持つな」

4連撃でのHPの減り具合を見て、残りの9連撃を叩き込めると判断したラツシユは、攻撃を続行しようとする。周りからの意見でモーシヨンを改善して、一旦鞆に収める動作は排除された

「負け、られないんだっ!!」

しかし、ユウキもただそれを待つわけではなかった。ユウキの剣もソードスキルが読み込まれ光る

そしてそこからはソードスキルの斬り合いになる。八芒星を斬り結ぶラツシユと、斜めに十字を刻んでいくユウキ。お互いソードスキルの最後の1撃までモーシヨンをこなし、ソードスキルに付与された魔法が発散することで起こる煙が観客からの視界を遮った

「つたく、だから一撃決着で済ませたかったんだ」

徐々に晴れていく煙の中で、ラツシユが呟いた声が、周りのプレイヤーたちの耳に届いた。煙が晴れ、姿が見えたラツシユの手から、刀が光となつて消えていく。立会人のキリトは一瞬、ラツシユの敗北かと思つた

「出世払いの30万が入るまで、まーた金欠プレイだ」

次の瞬間、ラツシユの目の前にウイナー表示が出現した

ソードスキルでの斬り合いの中、先にHPが半分以下のイエローゾーンに達したのはユウキであつた。ラツシユはユウキのソードスキルを、致命傷となる部位を避けて喰らつてダメージを緩和させていたり、ソードスキルのモーシヨンの僅かな遊びを利かせて、ユウキの剣筋をズラして命中を回避させたりしていた。刀が壊れたのは、ユウキの剣筋をズラすのに、耐久がゴツソリ持つていかれたためである

ガツクリと膝を付き肩を落としてその場に崩れるユウキ

「負けた・・・あ、あれ？」

やや放心状態だつたユウキは、自身の頬を涙が伝っていることに驚く

「お、おかしいな・・・もう、泣かないつて決めたのに・・・っ！」

拭つても流れ続けるユウキの涙を隠すように、ラツシユがユウキを抱き寄せた

「つたく、何抱えてんだかしらんけどよ、泣きたきや泣けばいいだろ。泣くことはストレ

ス発散に一番いいって、俺のカウンセリングをしてる人が言ってた」

「うっさい……」

抱き締めて慰めるラツシユ、ユウキはそんなラツシユの行為に純粹に悔しさが沸き、それをぶつけるようにラツシユのわき腹をボコボコとやや強めに殴る。しかし決闘モードは解除されているのでダメージは入らない

「ぶっちゃけ、強かったよお前さんは。俺がここにいる奴らと同じ人間だったら相手にならなかった」

ラツシユの言葉通り、今回の決闘に勝てたのは、地球人とキヤーティアの運動能力の差が全てである

「もうーいつまで抱き締めてるんだ?!」

「おっと、スマン」

いい加減、恥ずかしくなってきたユウキはラツシユを押し退けるように離れる

「うし、泣き止んだな。よかったよかった……さて、じゃあ30万ユルドは借金としておいおい返してもらおうから、とりあえずフレンド登録しよっか」

「うげっ」

ニツコリと笑顔で告げるラツシユに、キリトを含めた周囲のプレイヤーは、『こいつ鬼だ……』っと思っただった

次の日、ユウキの辻デュエルには多くのプレイヤーが来た。そもそのラツシユとの決闘の理由が、辻デュエルの告知を出したのにイマイチ人が集らず、その原因が自身を持つ11連撃より強い13連撃をラツシユが編み出していたからであった。ラツシユの13連撃は今のところ誰かに教える予定は無いが、11連撃が手に入るかもという情報はプレイヤーたちをやる気にさせた。しかしそれを鬼のような強さで悉く返り討ちに、ユウキはあつという間に勝ち星の山を築いた

そんな中・・・

「んー、おねーさんに決ーめた！」

「へ？え？」

ユウキは自身の目的を果たすための、運命の人を決めた

その運命の人、アスナの手を取ると、ユウキは羽を出して空中に舞い上がる

「おーい、アスナー？」

「アスナさーん！」

—まあ、あの子はラツシユとの契約があるから、滅多なことではできないし大丈夫だろう・・・それにたぶんあの子は・・・

アスナを連れ去っていくユウキの行動に、リズベツトたちが戸惑いを見せる中で、キリトは安心して見送る。キリトのそんな様子に、アスナも多少落ち着きを取り戻して、ユウキの誘導に従って飛び始めた

そしてしばらく飛び、2人きりになったところで、ユウキはアスナに向き合う

「あの、僕たちを助けてください！」

「わかった」

ユウキの頼みをアスナは即答で了承した

「え? いいの? つというか何も聞かないの・・・?」

「事情は全部わかってるよ・・・」

「え?」

アスナの言葉に、ユウキは『どうして?』つと戸惑いを見せる。そんなユウキの疑問を余所に、アスナはやや怒りの表情をして続きを口にする

「ラツシユさんへの借金だよね? キリト君から聞いてるよ。まったく・・・ラツシユさんったらこんな子にデュエルで30万ユルドなんて大金賭けさせるなんて・・・ホント大人気ないんだから!!」

「違ーうーいや、それもあるけどー!!」

「え？どっち・・・？」

ユウキの矛盾した言葉に、アスナは混乱する

「だから、僕たちのギルドを、助けてほしいんだよ！」

「ギルドの権利を担保にさせられたのね？なんて酷い・・・」

「ちーがーうーのー！！僕たちのギルド6人にお姉さんを足した7人で、フロアボスを倒したいんだよ！！」

「え？フロアボスの討伐を？7人で？」

ユウキは仕方なく、メンバーに会わせる前に目的を話すことにした

今年の3月で自分のいるギルドが解散すること、その前に記念となること、ゲーム内に名前が残ることを成したい。そこでフロアボス討伐をギルドメンバー6人でやろうとなったこと。だけど1パーティのフルメンバーに満たない6人ではそれが難しく、何度も失敗したから、仕方なく1人メンバーを募集しようということになったこと・・・

「えつと・・・なんで私、なのかな？それこそラッシュユさんとか・・・」

「それは絶対嫌！！あんなお金の亡者に頼むなんて・・・あのひとのことはあくまで僕個人の問題だから、ギルドには絶対に持ち込みたくない！！」

—随分な嫌われようですよ、ラッシュユさん・・・

心底嫌そうに言うユウキに、アスナは昔の自分を重ねる。アスナ自身も、SAO時代

にはラツシユを嫌悪していた時期があつた。ラフコフ討伐戦、事前に計画が漏れていて、レッドプレイヤーの奇襲で乱戦になつてしまった。そのときラツシユは躊躇なくレッドプレイヤーを殺して排除していった。そんなラツシユを味方の攻略組プレイヤーはレッドプレイヤーを見るような嫌悪の目で見ていたのだ。もちろんアスナもその1人であつた

「うん、わかつた。微力ながら手伝うよ」

13話

1月7日、平日

都内の多くの学校が3学期の始業式をしているこの日、ラツシユの母親であり、GG Oでジェーンを操作するキヤーティアの女性、ケニーは、医務官として地球の医療技術についての調査をしていた。もちろん、キヤーティアのハッキング技術を用いて、勝手に論文やデータを盗み見ているわけである

「VR技術を医療転用した機器の臨床試験・・・」

ケニーは日本でのメデイキュボイドの臨床試験の経過データを読んでいた

「試作1号機、被験者、紺野木綿季、15歳。病名、後天性免疫不全症候群」

キヤーティアにはかざすだけで診察から治療までを行え、擦り傷から遺伝子治療まで可能な万能な、医療コミュニケーションターという医療機器が存在する。しかし、それでも生命の大切さは変わらず、医者という職業はなくならず、医療の研究は日夜続けられている

—ターミナルケア目的にしては機器が大きすぎて高額。導入できるのは一部の富裕層を相手にしてる病院や介護老人ホームってところかしら？それでも実用化したら需

要に供給が追いつきそうに無いけど・・・さて、患者の家族から、いったいいくら取るつもりなのかしら・・・？

仕事モードのケニーは、モニターに映るデータを冷めた目で読み続ける

「この子のような、本当に必要とする患者に行き渡るのは、10年単位の時間がかかりそうね」

つと、ケニーが別の論文の調査に切り替えようとしたそのとき、ケニーの仕事部屋である医務室のドアが開く。そしてラツシユが医務室に入ってくる

「あら、トスカ君。どうしたの？」

ケニーは仕事モードの医務官から一転して母親の顔になり、ラツシユこと本名トスカに向く。子ども扱いされることを嫌う彼が仕事時間中にケニーのいる医務室に来ることとは、珍しいことなのである

「ちよつと専門外のデータが出てきたから、意見をもらいに」

「なるほどね」

トスカはそう言うのと、端末から調査中のデータを空中モニターに映し出す

「例の交友関係の調査ね」

「全く、デスガン事件なんか起こるから、全部洗い出さなきゃならなくなった」

「わざわざ介入するからでしょ。上が言うには、そんなの放っておけばいいってことな

のよ。所詮は余所の星の小さな事件なんだから」

デスガン事件に関わってからというもの、ゲーム内にラツシユとしてログインした際の関わる人物の簡単な周辺調査が仕事として増えたトスカ。不穏分子の洗い出しは、外交団の安全に関わる問題なので、キツチリこなさざるを得ない

「えーつと、アカウント名YUUUKI。本名紺野木綿季……あら、偶然ね」

ハッキングで得た個人情報を読み上げたケニーは少し驚くと同時に、それまで読んでいたメデイキュボイドの臨床試験の被験者データを横に並べる

「トスカ君の聞きたいことは、この子の病気のことね？」

「うん、まあ……ぶっちゃけ治る見込みがあるのかどうか」

医療は専門外のトスカでも、臨床試験の期間が長いことはデータから読み取れた。それだけ長い期間治療を要する病気ならば、完治するかどうかを疑うのは当たり前とも言える

「無理ね。今の地球の医療ではこの子の病気は治らない。治せないわ。今も医療用VRマシンを用いて、体感覚をカットして苦痛を無くすことが精一杯のようね。持つてあと1, 2ヶ月つてところじゃないかしら？」

「そうか……」

ケニーが医務官として、冷静に病気の進行具合からの余命を見積もる。トスカはやや

ショックを受けつつも、調査書にケニーの意見を記入した

「あまり深入りしちやダメよ。可哀想と思つても、この子に医療コミュニケーションは使用することはできないのだから」

キヤーティアにはキヤーティアの守るべき法があり、それによつてキヤーティアと比較して医療レベルの低い星での医療コミュニケーションの使用の制限が入っている

「わかつてるよ……」

力なく言葉を返し、トスカは医務室から出ていた

「まったく、あの子つたら……」

1月の第2月曜日、日本は成人の日という祝日であり、その前の土日と合わせて3連休になる

そんな3連休の初日の土曜日、アスナとスリーピングナイトのフロアボス攻略戦は決行された。しかしそれは失敗に終わり、2度目の挑戦に向かっているとき、トラブルは起こった

「そう、じゃあ……戦うしか、ないよね……」

スリーピングナイトの挑戦を盗み見て、フロアボスの攻略を有利に進めるギルドが、

2度目の挑戦をしようとするスリーピングナイトの行く手を阻む。レイドパーティーのメンバーが揃っていないにも関わらず、挑戦権を主張するギルドに、ユウキは剣を抜いた

「へッ、後ろを見ても同じこと言えんのか?」

「っ?!」

相手のプレイヤーたちの中の1人が、そう挑発する。ユウキたちが振り返ると、相手のギルドの残りのレイドパーティーのメンバーが押し寄せて来ていた

これは流石に……っとユウキもアスナも思った……そのときだった

「悪いな。ココは通行止めだ」

押し寄せる集団に紛れていたキリトが、スキルの壁走りを使用して前に出て、集団を止める

「おいおい、ブラッキー先生よ?この人数相手にやる気か?勝てると思ってんのか?」

「そうだな。俺じゃキツイかもな……」

だけど……っとキリトが言うと同時に、集団の背後から断末魔が響く。集団が後ろを見ると、1人のプレイヤーの死亡後のリメインライトと、異彩を放つスーツ姿のプレイヤーが1人

「じゅ、13連撃のラッシュ……」

「・・・」

刀を構えたラッシュの姿に、集団がザザッと距離を取り、道ができた

「お、お前はSAO生還者で、PKをしないんじゃない？」

「ハッ、この前の決闘の観客がいるのか。俺は可愛い女の子を斬りたくないって言ったんだ・・・お前らムサイ男共なんざ、いくらでも斬ってやるよ」

氷かのような冷たい表情で言い放つ。そんなラッシュの姿に、味方であるはずのキリトですら背筋に冷たいものが走る

「そ、それでもたった2人だ！なにができるってんだよっ!!」

「そうだな。50人を相手に皆殺しできたGGOじゃなく、ALOだもんな」

「ぶ、50人?!」

フロアボス攻略のレイドパーティの上限人数は49人である。ボス部屋の扉の前に待機しているメンバーが十数名いるので、キリトとラッシュの間にいる集団の人数は大体30名ほどである

「アイツには、この刀の代金30万ユルドを払ってもらわなければならない。じゃないと、俺がリズベットに殺されるからな」

「ひ、人殺し・・・」

「安心しろ。命が担保されてる世界だ。町で復活するさ」

「行こう、ユウキ！」

「え？あ、う、うん！」

後方で始まった戦闘に、ユウキは釘付けになつていた。ラツシユの殺気は彼女も感じ取ることができた。圧倒され、恐怖も感じた。そんな彼女を我に返らせたのは、アスナの声だった

—どうして？どうしてラツシユはそこまで・・・

扉の前にいる残りメンバーとの戦闘をしながら、ユウキはラツシユの行動をずっと問い続けていた

—借金があるから？ただのネットゲの貨幣にそこまでするの？どこかのゲームみたい
にRMTできるわけでもないのに？

ユウキの、ラツシユへの印象は2つ。お金ガメに汚ツいこと。そして見た目や言動に反して異様に人の反応を気にしていることだった。決闘のときもHP全損を避けていたのは、周囲の目を気にしているからだ、ユウキは読み取つていた

—それをどうして、こんなところであつさりと・・・僕ボクなんかのために

「ハァー、疲れた」

ユウキたちが扉の前のメンバーを倒し終わる。それとほぼ同時に、ラツシユとキリトと、それに遅れてきたクラインが集団のプレイヤーを倒しきったのだった

辺り一帯にプレイヤーのリメインライトが残る中、ラツシユは刀を納める

「耐久も残ってるな。いやぁー流石30万ユルドの予算で頼んだオーダーメイドだ。いい仕事してるぜ」

「どうして・・・？」

刀が壊れなかったことに安心するラツシユに、ユウキが近付いて問いかける

「言っただろ。お前さんに30万ユルド払ってもらわんと、俺がリズベットに殺されるってな」

「そんなの、わざわざこんなことしなくたって・・・例え、僕が払えなくても、また賭け試合で稼げば」

「いいか？賭けはちゃんと支払い分を取り立てるから成り立つ。支払いから逃げるのは詐欺師のやることだ。お前さんは詐欺師になりたいのか？」

親が子を諭すように言葉をかけるラツシユ。ユウキはそれに首を横に振って返す「なら、行つてこい。まずはギルドの目的を果たせ。借金返済はその後まで待つさ」

ユウキの体をクルッと回し、背中を叩いて仲間の下へ送り出すラツシユ

「待ってて！絶対、絶対返すから！行こう、みんな！」

そしてスリーピンググナイトとアスナがボス部屋の扉を開けて中に入った。それを確認し、ラツシユとキリト、クラインの3人は撤収しようとして来た道を戻り始める

「ラツシユ！ありがとう！」

扉が閉まる最後に、ユウキの声が隙間から飛び出してきた

「ありがとう、だよ」

「ラツシユにだけかよ。俺やキリの字も戦ってたつての」

キリトとクラインがニヤニヤと、からかうような表情でラツシユに言う

「お前は遅刻しただろ」

「それを言うなよ。この道が複雑なのが悪いんだぜ」

「それに、ほとんどラツシユが倒したからな。ザツと半分以上はラツシユだろ？」

「知らない。MOBもプレイヤーも数は数えんようにしてる」

「サラツと重いこと言うなよ・・・」

スリーピンググナイトの27層フロアボス攻略戦は成功した。しかし、ユウキはそれ以降ALLOにログインしなくなったのだった

そして2日経った月曜日

「ねえー？そろそろ代金支払ってほしいんですけどー？」

「それはユウキに言ってくれ。まあ今日もログインしてないが」

リズベットからの代金の催促に、ラッシュユはフレンドリストを見ながら返す

「まさか、容態が悪化したのか？いや、でも母さんの見立てではまだ……でも『持つてあと1、2ヶ月』なら、もういつ何が起こってもって状態だと思えばきか……」

「ログインしてないなら言えないじゃない。あたし明日から通常授業でインできる時間がかかなり減っちゃうんだから」

「じゃあアスナに伝言でも託しとけよ。同じ学校なんだろう？アイツが最後に会ってたんだからよ」

「それがアスナに聞いても、突然のことではわからないって。他のメンバーも知らないみたいだし」

「じゃあ諦めようぜ。お互いユウキに騙されたってことで」

「あ……？刀差し押さえるわよ？」

「スンマセン……」

リズベットの剣幕に、ラッシュユが即行で謝罪した

「でも、マジでどうすりゃいいんだか……そりゃあ支払いだけなら、賭け試合で稼

げばどうにかできるんだが・・・それをするのもアイツを信じてないようで・・・ああ
クソツ、メンドクせえ

次の日

「トスカ君、外へ出ましょう」

「外？」

ユウキの情報をモニターに開いたままウンウンと唸っているトスカに、ケニーが車の
キーを見せて誘った

「ちよつと行きたい場所があるのよ」

「行きたい場所？」

「横浜港北総合病院つてところなんだけど」

「それって・・・」

モニターに映る、ユウキの情報をもう一度見た。逆探知で出たアクセス場所の施設名
がケニーの言うそれであった

「深入りしちゃダメって言ったのに、こうもすぐに破つちやうのだから・・・会いた
いでしょ？彼女に」

「つで、認識そん霍乱なも装置のまで使つて、昼間つから病院の関係者エリアに忍び込みとは……」

トスカとケニーは今、横浜港北総合病院の関係者専用区画にやってきていた。もちろんアポ無しの彼らは無許可での立ち入りである。認識霍乱装置という、人の意識に干渉する装置を使い、病院関係者の注意を逸らしての侵入である

「それだけじゃないわよ。ハッキング班の子にお願いして、監視カメラ映像をインターセプトしてもらつてダミーに差し替えてるし、ドアの開錠記録も残らないようになってるわ」

「もう何でもありだな。俺らキヤーティアって日本と外交を結ぼうとしてるんだよな？」

「交渉に裏工作は付き物よ」

呆れるトスカに、ケニーは『まだまだ甘いわね』つとといった表情である

「ここね。心の準備はいい？」

「別に想い人に会うわけでもないのに、心の準備なんて」

「誰もそんな準備をしてとは言つてないわ。3年間フルダイブし続けている人間がどんな姿になるのか、分からないあなたではないでしょ？」

「軽率な発言、失礼いたしました・・・」

医務官としての顔になったケニーに、トスカは子としてではなく、部下として丁寧に謝罪した。トスカもS A Oで2年間フルダイブしたので、彼女の体がどんな状態になっているのかは、容易に想像することができた

「ちなみに、メデイキュボイドから病院のサーバーにアップロードされる彼女のバイタルデータも、ダミーになってるから」

「おいおい・・・ま、うん、とりあえずオツケー」

トスカの心の準備もでき、2人は臨床試験室の携帯式ハッキングツールでドアを開錠して開ける

「このガラスの向こうはエアコントロールのようね」

ケニーがその場にあるパネルを操作して、ガラスの向こうが見えるようになった
「っ！」

「終末期はどんな種族も似たような姿ね。トスカ君は見たことないでしょうけど、老衰で死亡する前のキヤーティアも同じような感じになるわ。トスカ君もあの2年間は似たような状態だったわ」

ベッドに横になり、骨と皮といった状態のユウキの中の人、紺野木綿季の姿。点滴や機材のセンサーが体から伸びていて、周囲のモニターには、彼女の生体情報が全て表示

されていた

そんな姿にトスカはショックを受けるが、医務官のケニーには見覚えのある光景だった

『・・・誰？』

14話

『・・・誰?』

「っー!」

ガラス越しの会話用に付けられたスピーカーから、か細い声が発せられた

「あ、あのー、母さん?見られてるみたいだけど・・・ハッキングや認識そ霍乱れ装置は?」
「切ったわ。ハッキングはまだ継続中で、今この部屋と外は完全に隔離されてるから安心して」

『・・・ラツシユ?』

「ああ、そうだ・・・俺がラツシユだ。本名はトスカって言うんだが・・・まあ好きに呼んでくれ」

スピーカーから発せられる木綿季の声に、トスカが戸惑いながら返す

『どうして・・・ここに?』

「言っただろ?絶対取り立てるって。お前さんも絶対返すって言ったじゃないか」

『アハハ・・・そうだったね・・・でも、ゴメン。フロアボス討伐で得たお金、祝勝会で使っちゃったんだ・・・』

「おいマジかよ……」

『そっちの女の人は？さっきお母さんって……』

状況に頭がついていかないトスカに、気を使った木綿季が話を振った

「トスカ君の母、ケニーよ」

『若いお母さんだね……お姉さんにしか見えない』

「ありがと。私は医者をしてるのよ。あなたに1つ質問があるのだけど……もしも、あなたの病気が治って、生きられるなら、全てを失える？」

ケニーのその質問に、木綿季だけでなくトスカも固まった

『どういう、こと？心理テストかなにか……？』

「そうね、あなたの思想に関するテストと受け取ってくれるかしら？全て……あなたの持つてるもの、個人資産はもちろん、思想や戸籍といったアイデンティティーなんかもね。それら全てを失ってでも、病気が治って生きていられるなら、どうする？」

『そんな例え話……考えるだけ無駄だよ……』

「それがそうでもないのよ。こっちにしてみれば」

つとケニーがそう言うのと、鈴の付いたチョーカーを2つ取り出した

「え、えつと、母さん？どういふことコレ？」

「いいから」

チヨーカーを首に着け、鈴にタッチして地球人からキヤーティアの姿に変化する2人
『え?え?猫耳・・・?あれ?ケットシー?』

「随分と混乱しているわね。モニターにも出てるわ」

キヤーティアの姿を見た木綿季のバイタルデータが顕著な変化を見せ、ケニーは笑いを堪えて言う

「えっと、紺野木綿季さん。私たちキヤーティアは、あなたたちから見て宇宙人であり、あなたの病気を治す技術を持っています」

『ホント・・・?』

「ええ、本当よ。しかし、それを行うには1つだけ、あなたが越えなければならぬハードルが存在するの。それは、その技術で治療を行ったあなたは、私たちキヤーティアと同じ体に遺伝子変換を行わなければならない・・・簡単に言うと、地球人であることを捨てなければならない」

「あのー、母さん?医療コミュニケーションケーターは使えないんじゃない?」

ケニーの突然の提案に、トスカは完全についていけない

「法には抜け道が付き物よ。地球人には使用できないなら、対象を地球人じゃなくせばいいのよ」

「だからって、キヤーティアシップの遺伝子変換機まで、あれは艦長クラスの権限でしか

動かせない代物……」

外交団が乗ってきた宇宙船であるキヤーティアシップには、遺伝子構造を変換して、他種族をキヤーティアに、キヤーティアを他種族に、体を作り変える装置が存在した。しかし、そんな神をも恐れぬその行為を成す装置を動かすには、外交団のトップであり、キヤーティアシップの艦長の許可が必要不可欠であった

「話は通してあるわ。向こうも交渉があまりうまく進んでないそうよ。キヤーティアシップがあまりにもコッソリとやってきたから、きつと舐められてるのね。派手にドーンと地球の傍に現れたら、いったいどんな反応してたのかしらね？」

「力の差を見せ付けたらいいか？木綿季を使って……」

「武力を見せるわけにもいかない。だから逆の技術を見せる。どんな種族も命は惜しいものよ」

『あ、あの……』

キヤーティアの内情の話に、今度は木綿季がついていけない

「さて、今日来たのは、この提案を示しに来ただけ。判断までは求めないわ。そろそろあなたの主治医も来るだろうから、ここらで私たちは退散するわ。私たちが来たことは、先生たちには秘密ね」

ケニーとトスガが再び鈴に触れ、地球人の姿に戻る

「私たちの医療を受けるにしろ受けられないにしろ、早めの決断を私たちは望むわ。キャーティアのことで何か聞きたいことがあるら、ALLOでトスカ君が答えるから」

「ただし、コツソリと、だぜ？まあ、とりあえずALLOに戻ってこいよ」

『わかりました・・・？』

最後にパネルを操作し、ガラスを不透明に戻した。そして呆気にとられたままの木綿季を残し、2人は臨床試験室から去っていった

その日の夜、ALLO内、ユウキが決闘を行っていた24層の小島

「ユウキー！」

「アスナ・・・」

—お姉ちゃんに抱っこされる感じだ・・・懐かしい。もしもあと1年、あの人たちが早く来てくれていたら・・・

フロアボス攻略戦の以来の再会に、アスナはユウキに抱き付く。ユウキも再会に喜ぶが、頭のどこかにキャーティアのことが引っかかっていた

—もし、あの人たちの治療を受けたのなら、全てを失う・・・つという事は、このアカウントも・・・

「・・・ユウキ?」

「アスナ・・・アスナに渡したいものがあるんだ」

アスナからそつと離れ、OSSのスクロール製作モードを起動させる。剣を抜き、自身の編み出した1ー1連撃を行い、OSSのスクロールを製作した

「アスナ、受け取って」

「え・・・?」

「技名は『マザーズロザリオ』。ラッシュのOSSには劣つちやうけど」

「どうして・・・?」

アスナから見て、それはユウキ自身を表すものだと思っていた。それをなぜ自分に・・・?つとアスナは戸惑う

「アスナ、僕はね・・・いつ、どうなるかわからない。だから、渡せなくなる前に・・・」

「ユウキ・・・どうして、そんなこと言うの・・・?」

ユウキの言葉に、アスナは涙を流す

「まだ、これからいっぱい、いろんなことして・・・」

「うん、そう、だね・・・」

「それにラッシュユさんへの借金も返さない」と

「アハハ、それは忘れたかったなあー」

—『絶対取り立てるからな!』って現実の僕のところまで来ちゃうくらいだし．．．
とにかくシリアスな空気を変えたかったアスナが出したラツシユのことが、今のユウ
キには深く刺さる

「忘れられたら、困るんだがな．．．」

「っ—」

そんな中、突然聞こえてきたラツシユの声に、2人は驚く。豊洲のマンションに戻つてログインしてきたラツシユが、小島にかかる橋からゆつくりと歩いてきていた

「．．．ラツシユ」

リアルでされたキヤーティアの治療の話の間こうと思ったユウキだが、アスナが傍に
いることで思い直し、言葉が出てこなくなる

「ぶつちやけ俺もあの話には驚いた。俺もあるとき初めて聞いたからな」

「．．．どうして?どうして、僕なの?」

—あのとときケニーさんが言つてた理由なら、僕である必要はないはず．．．
ラツシユがその話題を振つたので、ユウキも改めて質問する

「理由は聞かないほうがいいぞ?慈悲とかそんな甘いものじゃないからな」

「聞かせて」

ラツシユのほうを向き、しつかりと目を見て問いかけるユウキ

「・・・お前さんには、もう家族がいない。だから関わる人間が減って、余計な仕事が無くて済む。リアルルの居場所が拠点から近い。俺と面識があったから説得がしやすい・・・くらいだろう。最後のは無くてもいいものだからおまけもいいところだ」

「そう、だね・・・」

ラツシュの言葉に、ユウキは頷く。説得など必要ない。拒否しても待っているのは、苦痛の日々とその先にある死のみ。キヤーティア側としては候補者など、掃いて捨てるほどいるのだ

「はつきり言つて、不治の病で死にそうだ、というデータが揃つてる都内かその近郊の病院に入院している患者なら、上はある程度誰でもよかつたはずだ。真つ先に話が行つて、考える時間を与えられた。その点ではユウキは優遇されてるかもな」

「ホントはつきり言うなあ・・・」

あまりにも明け透けに語るラツシュの言葉に、アスナが怒りの表情で口を開きかけるが、当のユウキがそんな言葉を受け入れてしまい、何も言えなくなる

「ラツシュは、僕にどうしてほしいの?」

「どうって・・・」

「口では僕に拒否させようとネガティブなことばかり言つてる・・・」

だけど・・・っと、言葉が続けながらユウキがラツシュの前までやってくる。すぐ前

まで来たユウキは、ラツシユの顔を見上げる

「ラツシユの顔には、『治療を受ける』って書いてあるよ」

「ハッ、顔に文字を書いた覚えはねーよ」

ユウキの言葉に、ラツシユは顔を逸らす。しばしの無言の後、ラツシユが折れる

「・・・俺だつてわかんねーよ。お前の命が政治的な駆け引きで弄ばれるなんて、いい気するわけがない。だが、それを差し引いても命が助かるならつて思うと、否定もできん。そもそも俺には否定する権利すら存在しないしな」

「どういう、ことですか・・・？治療とか、政治的駆け引きとか・・・」

話の内容が掴めなかったアスナが、話に割つて入った

「ユウキの病気を、ラツシユさんは治せるんですか・・・？」

「そんな感じだ・・・だが、その方法は日本では認められていない。だから日本を離れる必要がある」

「そんな・・・あんな状態のユウキを・・・」

ラツシユの言葉にアスナはショックを受ける。アスナがショックを受ける分、そんなアスナの姿を見ているユウキは幾分か落ち着きを取り戻していた

「(本当は、治療を受けてから移動するから、死ぬ危険はないから。移動もこつちが完璧にこなすから安心していい)」

「あ、そうなんだ・・・」

ラツシユはユウキに顔を近づけ、小声で伝えた

「治療自体も一瞬だ。ただ、お前さんの場合は寝たきりだったから、日常生活に戻るにはリハビリは必要だがな」

「えっと、体を変えられるってのは？」

「(それも一瞬で終わる。大丈夫だ、宇宙人つても、一般的に想像されるようなエイリアンとかじゃない。さっき見せた俺らの姿と同じだ。とりあえずはリアルのお前さんの体に、猫耳と尻尾が生えるだけだ)」

「(うわー、それなんてラノベ?)」

ついでに治療後の話も一気に早口で説明していく

「(ラツシユのお母さんが言ってた、全て失うってのは?)」

「(戸籍上は、紺野木綿季は死亡になる。もちろんキャラクターティアの戸籍が用意される。お前さんの年齢的に、母さんが養子として引き取る予定だ)」

「(じゃあ、ラツシユの義妹になるの? えーウソー・・・)」

「(ハハハ、それは諦める。もう母さんはその気だったから、俺にはどうすることもできん。あとはやっぱり今使ってるアカウントは、後々の面倒を避けるために破棄してもらおう。まあ、リハビリが終わったら頃には新しく取得もできるだろうから安心しろ)」

早口での説明を終え、『何か質問は?』つとラツシユはユウキに小声で問いかける。ユウキは、今だ呆然としているアスナに視線を向けた

「(アスナたちと、また会える?)」

「(会えないことはない。ただ、紺野木綿季は死亡したことになるから、アスナたちからすれば、『ユウキに似た別の誰か』だろうな。アスナに対してはちゃんと再会させられなくもないが・・・)」

「(どうやって?)」

「(実はな、俺らキヤーティアには既に一般人の現地協力者がいる。俺としては、キリトとアスナをそれに勧誘したいと思ってる。現地協力者になれば、何の障害もなく会うことができる。リアルでもな)」

ラツシユとしては、和人と菊岡の繋がりを絶ちたい思いもあり、明日奈はそのついで
の感じなのだが、ユウキのためになるのなら、それだけで意味のあることだと認識でき
た

「(ぶつちやけ話を切り出すタイミングを見てる段階なんだよ。お前さんと一緒にアスナをこつちに引き込めたら、キリトも芋蔓式でいけるだろ)」

「(僕はエサってわけ・・・?)」

ラツシユを見るユウキの目がジト目になった。ラツシユは目だけを逸らした

「実行には多少根回しがあるから、早くて4、5日後つてところだ。今週末辺りでどうだ？」

「(僕まだ受けるって言っていないけど?)」

「(じゃあ死ぬのか?)」

「・・・」

ラツシユの直球の問いに、ユウキは答えることができない。ラツシユはこちらから話すことはなくなったと、近づけていた顔を離す

「俺の母さんは医者だ。医者つてのは、患者に命よりも大切なものがあつたとしても、それを捨てさせてでも命を救う。なぜなら、生きていれば、また別の大切なものができると思ってるからだ。生きてナンボの人生つてやつだよ」

「ズルいなあ・・・」

ユウキは目を閉じ、心に焼き付けた『大切なもの』を思い起こした。両親、姉、スリーピングナイツの仲間、アスナ、それら人々との思い出たち・・・そして

「ラツシユは、僕に生きてほしい？」

「当たり前だろ」

「!」

ユウキの問いに即答で返したラツシユ。そんなラツシユに少しドキリとしたユウキ

「・・・ど、どうして?」

「そんなの決まってる。お前にいなくなるとゲームが楽しくなくなるからだ」
ラツシユの言葉に『はあ?』つという表情になるユウキ

「ユウキという強いプレイヤーがいなくなると、ライバルが減る。それはそのままゲームの楽しみが減ることと同じだ。俺たちは楽しいのために全てを懸ける・・・」

いいか、よく聞け・・・つとラツシユは言葉に溜めを作る

「楽しいは最強で、楽しいは正義で、楽しいは・・・無限大だ」

「・・・」

——瞬でもときめいた僕がバカみたい・・・

ドーンつと言いつつ切ったラツシユに、ユウキはポカーンと口を開けて呆気にとられていた

「プツ、クハハハツ、アハハハハハツ!!」

「ゆ、ユウキ?!」

そして、可笑しさが込み上げてきて、笑い声を上げた。そんなユウキの笑い声に、アスナが我に返った

「アハハハツ!!最高だよ、ラツシユ!!うん、そうだね。楽しいって大事だよね」

一頻り笑って、落ち着いてきたユウキ

「うん、わかった。僕、治療を受ける」

「そうか・・・よかった。勇気ある決断に感謝するよ。ユウキだけに」

「あ、？」

「オウフツ！」

ラツシュの寒いダジャレが、ユウキとアスナの腹パンで制裁される。ALLOではAG I型であるラツシュに、同じAG I型のアスナと、そこそこのSTR値を持つユウキのパンチはかなり効いたのだった

「・・・と、とりあえず、日本にいるうちに、やりたいことは済ませとけよ・・・協力してほしいことがあれば、ゲーム内のことでもリアルのことでも言ってくれ」

「うん・・・」

「それと、この件は他言無用で頼む。アスナもな」

「はい・・・その、ユウキのこと、お願いします・・・」

「アスナ・・・」

「もしものことが起こったら、絶対許しませんから」

「ア、ハイ」

この日ラツシュは、初めてアスナの殺気を感じ取った

15話

ユウキが、キヤーティアの治療を受けると決めた日から2日後の木曜日

「よう、キリト・・・いや、桐ヶ谷和人」

「いい加減リアルでの呼び方を決めろよ・・・別にキリトでも構わないから」

朝、トスカは和人たち10代のSAO生還者が通う学校にやってきていた。ユウキはやりたかったこととして、『学校に通いたい』と言い、明日奈が自身の通っている学校に働きかけ、トスカたちキヤーティアがそれに乗っかる形で協力をしたのだ

「それで、モノは？明日奈とユウキが使う前に見てみたいんだが・・・」

「ああ、お前さんらが開発してる視聴覚双方向通信プロープ。ウチの会社で作ったモデルだ」

トスカは一応アタツシユケースに入れてきた、キヤーティアの技術力で作られた機材を見せる。キヤーティアとしては数世代前のモデルであるが、とはいえ和人たちのグループが開発したものと比べ物にならないほど、高性能で小型軽量であった

「すげーな・・・この大きさと重さで、機能を満たしてるのかよ・・・」

「俺らの作ったものがおもちゃに感じるよ」

「それは違う。お前さんらは学業の一環で、限られた予算や期間、人員でそれを作った。その意味が大きいんだ。ウチの会社はこれを開発して、このレベルにまでするのに、莫大な予算と年単位の長い期間を使ってる。関係者なんかも100人単位だ」

キヤーティア製の機材を見て、性能の違いにショックを受ける和人のグループの生徒に、トスカは言葉をかける

「今回、こうやってお前さんらに見せたのも、その熱意を買って、後学になればって思っ
てのことだ。日本人は技術の吸収力が凄いからな。期待してるぜ」

「うわ、ラッシュュがなんか真面目なこと言ってる・・・」
「おい」

トスカの真面目な言葉に、和人は気味悪がる

「あと、今はトスカって呼べ。ここには、お前や明日奈以外の攻略組だったヤツもいるんだろ？」

「・・・スマン」

トスカの注意に、和人が謝った。このSAO生還者の学校に来るに当たって、トスカはわざわざ伊達メガネをかけ、軽く変装をしていた

「さて、そろそろ木綿季のところと通信を接続するか。お前の嫁が来る前にチェックは済ませておきたいだろ？」

「ああ、そうだな」

その日の夜。ALOにて

「ラツシユ、ありがとう」

「気にするな。善意でやってるわけじゃないんだから」

ユウキのお礼に、ラツシユは照れくさそうに言う

「またまたー」

「なんだよ?」

ニヤニヤしながら言うユウキに、ラツシユは少し構える

「学校にいるラツシユたちに通信を繋げる前にケニーさんが来て、機材を使って通信による授業を受けることを先生に説明してくれたんだけど。そのときに、ラツシユが機材をわざわざ用意してくれたって。その・・・母星から転送してもらって」

「っ!・・・母さんめ・・・」

最後の部分だけボソツとラツシユの耳元で言ったユウキに、ラツシユは苦々しい表情をする。ケニーが木綿季に伝えた通り、今回の機材はトスカが母星に要請して、地球で使える技術レベルのものを備品として取り寄せたものである

「地球の技術レベルの向上も狙つてのことだ。別にキリトたちが開発したものでも性能的には問題なかっただろうからな」

「本当に〜」

「そ、それより、借金を返す当てではできたのか？ いい加減リズベツトも待つてくれそうにない」

「んー、それがさー、全く無いんだよね。11連撃のOSSはアスナにあげちゃったから、賭け試合もできないし」

相変わらず借金を返さないユウキにラツシユはため息をつく

「助けてよ、お義兄ちゃん」

「ハハハ、例え兄妹でも借金は有耶無耶にはさせんから安心しろ」

「チツ……」

兄妹の情に訴えるが、素気無く返され、ユウキが小さく舌打ちした

つとそのとき、2人の近くでガシャンつともものが落ちた音が……

「……ちよつと目を離れた隙に、何やってるのかしら？」

「あ……し、シノン……」

帰省から戻つてきて、学校の始業式などの諸々のリアルな事柄が済み、ようやくAL Oにログインしたシノンであった。足元には彼女の愛用のロングボウが落ちている。

そんなシノンの前に、モロに浮気がバレた彼氏の表情をしているラツシユである

「へえー、そう・・・ラツシユは妹萌えなの・・・ふーん・・・」

「あ、あの、これは俺の趣味じゃ・・・」

「リアルで香蓮にあんなこと言っておいて、すぐ別の子？流石オス猫ってわけね？」

「お、お願いだから説明する時間をくださいあ」

シノンの剣幕に、涙目で弁明しようとするラツシユ

「す、すごい・・・口に出した言葉で誤字ってる・・・ん？リアル？オス猫？・・・あ、

お姉さんもしかして、ラツシユの言ってた現地協力者の人？」

「正解。あなたがユウキね。ジェーンさんから聞いてるわ。私が帰省してる間、どっか

のオス猫は一度も連絡してこなかったけどね」

「うぐっ・・・」

シノンの、相手を射殺するような視線がラツシユに突き刺さる

「い、いやあ、だって、里帰り中に連絡するのは重いかなーつと・・・」

つと言つて視線を逸らすラツシユ。単純にユウキの件で気を揉んでいたために、連絡

を疎かになってただけである

「私、6日の夜には東京に戻ってきてたわよ？7日から普通に学校行ってるし。まあ冬

休み明けで色々あったから、今日までログインはできなかつたけど」

「か、帰ってきた途端に、アレコレ聞くのもなんか・・・束縛してる感が・・・」

「それが、戻ってきた私への言葉が、『おかえり』の一言だけだったワケってこと？アシストロイドのほうはまだ言葉が多かったわよ」

「そ、その・・・今回のユウキの件も含めて俺個人の裁量で言えることが少なくて・・・世間話の話題にできることも特に無くて・・・ごめんなさい」

―まるで仕事にかまけて放っておかれた彼女に謝罪する彼氏だ・・・

ラツシユとシノンのやり取りを見て、ユウキはそんなことを思う

「えっと、その、2人は恋人同士なの？」

「いいえ、違うわ・・・でも、妹萌えでデレデレの姿を見せられて、イラツとくるぐらいには好意はあるつもりよ」

「うぐぐぐ・・・ネクタイを引つ張るな」

シノンが目の笑ってない笑顔でラツシユのネクタイを引つ張り、首を絞める

「SJでは精々後ろに気をつけることね。嫉妬で集中が乱れてフレンドリーファイアするかもだから」

「本当にごめんなさい・・・」

「えすじえー？」

ラツシユが涙目で謝罪する中、ユウキはシノンの言葉が気になった

「スクワッドジャム・・・私とラッシュは別アカウントでGGOってガンシューティングもやっているの。そこで今度チーム戦バトルロイヤルの大会があつて、それに、私やラッシュ、あと向こうの仲間3人の計5人で出場するの」

「ん？人数増えてね？店主とレンと誰だ？」

「ジエーンさんが出るって」

「おいおい、ユウキのリハビリの経過見たり、養子として引き取る手続きとか、いっぱいやることあるんじゃないのか・・・」

「下っ端の調査員のトスカからしてみれば、医務官のケニーがこなす仕事の量は途方も無く見えるのだ」

「まあ、でも、うん、戦力としては申し分無いんだよ・・・そろそろ店主のビルドのプランニングとレベリングをしたり、準備をしていかないとな」

「いいなー・・・僕がリハビリやつてる間、ラッシュたちはゲームしてるんだ・・・」

「そう言うなよ。GGOは公式RMTで現実通貨を稼ぐことだつてできるんだから、俺たちにとつては収入源の1つなんだから。それに大会は来月頭だ。流星に2週間じゃリハビリも終わらんし・・・」

「でもずっとリハビリつてわけじゃないんだしき・・・」

「それは母さんの判断次第だけど、新規アカウント取つて、GGOに慣れながらゼロから

ビルドしていくことを考えると、どうやっても間に合わないだろう」

ラツシユの言葉にシノンも頷いていた。レベル制のGGOでは、対人戦専門のプレイヤーでも初めはMOB狩りをしてレベルを上げる。そうしてステータスやスキルを成長させないと、対人戦では全く歯が立たないからだ。運営が定めたレベル上限までレベルングをして、その過程でステータスやスキルを自分好みのスタイルに仕上げていくのが、GGOの楽しさでもあり、難しさでもあるのだ

店主のように商人ロールで戦いを重要視しないプレイヤーでもない限り、それを他人任せで短期間で作業のように済ませるなんてことは、つまらない行為だとラツシユは思っていた

「それよりお前は、30万ユルドの返済方法を考えろ」

「もうー！いい感じで話題を逸らせてたと思ったのにー!!」

「何？30万ユルドって？」

「俺とユウキが決闘で賭けた金。そのときは手持ちで無かったから借金ってことにした」

事情を知らないシノンに、ユウキとのこれまでの経緯を説明していくラツシユ

「ユウキの支払いが滞ると、ラツシユの刀の代金が入りに支払えず……でもユウキにお金の当てはない」

「お恥ずかしながら……」

「とりあえず、ユウキへの取り立てとは別に、ラツシユは刀の代金を自分で払えばいいんじゃない？」

「ま、それはそうなんだが……」

ユウキのリアルな事情が変わった今、ラツシユがユウキの返済金でリズベットへの代金支払いをする必要はなくなっている

「仕方が無い……じゃあちよつと、血の気の多いって噂のサラマンダー領まで出張してくるか……」

その後、1時間ほどで刀の代金分を稼いだラツシユであった

それからさらに2日経った土曜日。木綿季の治療と移送が行われる日

「すまん。呼んでおきながら傍にいさせてやれなくて」

「いえ……呼んでもらえただけで」

木綿季の治療は外交交渉の一環で行われるので、外交団の上層部と医務官のケニーが、それを行うことになっている。下つ端のトスカは病院内に入ることができず、病院の外の駐車場にいた。ここまでの高級セダンではなく、それと同じくらい高級なミニバ

ンであり、トスカは運転手の役目を与えられたのだ

「なんで俺も?」

「明日奈だけ呼んで、それでお前が安心できるなら別に今からでも帰っていいぜ?」

「殴るぞ」

「おお、怖い怖い」

この場には、トスカが呼んだ明日奈と和人、それに現地協力者扱いの詩乃と香蓮もいた

「そろそろ移送準備が行われてるはずだ。ところでお前さんら、木綿季がこれから具体的にどこに運ばれるか、気にならないか?」

トスカは4人に問いかけているように見せて、実際は和人と明日奈の2人に質問する「えつと・・・ラツシユさんの出身国?あれ?そういえば・・・」

「ラツシユ、お前の国ってどこなんだ?」

当然答えを知らない2人はそれがわからない

「もし、木綿季の移送先に、一緒に行けるとしたら、どうする?しかも日帰り可能で」

「え?ど、どういうことですか・・・?」

「海外に行くんじゃないのか?今から一緒についていくなんて不可能だろ?しかも日帰りでなんて・・・」

「それが行けるんだよなあ・・・」

　　っとトスカがニヤリと笑ったそのとき、トスカのスマホに連絡が入る

「はい、トスカ・・・はい、わかりました。こちらでも移動を開始します」

　トスカは連絡に短く言葉を返し、連絡を終えた

「たつた今、木綿季の移送が開始された。こちらでも移動を始めるぞ。車に乗ってくれ」

「って、向かってるのは東京・・・でも羽田じゃなかった。成田か？」

　　高速に乗って東京方面に走る車。和人が車の走行経路から予想を立てていた

「キリト、いい加減わかってるくせに無駄な予想をするなよ。この地球上に、アイツの病気を治せる治療法があると思ってるのか？」

「なっ！」

「じゃ、じゃあ、ユウキをどうするつもりなんですか?！」

　トスカの言葉に、和人と明日奈が驚き、トスカを問い詰めた

「簡単だ。地球上に無いなら、地球外の治療を受ければいい。宇宙は広いんだ。アイツの病気を治す方法くらいあるんだよ」

「ふざけないでください！」

「宇宙人がいるとしても言いたいのか？」

「いるぜ。お前らの目の前にな。目的地に着いたら、色々見せてやるから、待つてろ」

やがて車は高速を降り、一般道を走って豊洲に・・・拠点のマンションの地下駐車場に止めると、高層階用のエレベーターに乗り、普段は入れない屋上に上がった

「さて、キリトに明日奈。今から見るものは全てこの世界の現実だ。そして他人には話してはならない極秘事項だ」

トスカはチョーカーを取り出して装着し、鈴にタッチして地球人からキヤーティアの姿に戻った

「え？」

「は？」

初めてキヤーティアを見たときの詩乃や香蓮と同じ反応をした2人。そうなるよねーつと言った表情でそんな2人を見ている詩乃と香蓮だった

しかし、そんな詩乃と香蓮も、すぐに2人と同じ表情になる

「ルース、光学迷彩を解除。搭乗口を開けてくれ」

トスカがもう一度鈴に触れて、何かに命令を出す。すると何もなかった屋上に、SF映画に出てくるような小型宇宙船が現れた

「それでは4名様、キヤーティアシップへご案内」

僅か数分で、トスカたちはキャーティアシップに着いた

「もう、何がなんだが……」

「いつそ夢であつてくれと思う……」

宇宙空間にあるキャーティアシップに上がるまでの間、トスカから説明されたキャーティアのことに、明日奈と和人が頭を抱えた

5人は発着ピットから木綿季が移送された医療棟に向かう

「キリトと明日奈……お前さんらは今日付けでキャーティア外交団の現地協力者として登録された。おめでどう、君らはこれでめでたく、こつち側の人間だ」

「ええー……」

「別になつたからつて、何かあるわけでもないわよ」

現地協力者としての注意事項を言っている間に、5人は医療棟に着いた。そこで木綿季の移送に付き添っていたケニーと合流し、木綿季の病室まで向かう

「あの、今ユウキは……?」

「安心して、もう治療は全て終わつて、安静にしてるわ。これまで寝たきりだったのもあつて、体力が無くなっているから、移送の疲れで眠っているけど」

「そうですか……」

「でも顔を見るくらいならできるわよ」

つと、一行は1つの部屋に入る。木綿季が横浜の病院でいたメデイキュボイドの試験室とは違い、エアコントロールされていない病室、そこで寝かされている木綿季の体には最低限のバイタルを読み取るセンサーしか付けられていない

「ユウキ……えつと、本当に治ったんですよね……?」

「ええ、この子を蝕んでいた病は全て完治したわ。あとはリハビリで体力を付けていけば、何の支障も無く日常生活を送れるようになるわ」

「よかった……」

ケニーの言葉に、明日奈が涙を流して喜ぶ。そして木綿季に触れようと手を伸ばして……止まる

「耳……それに尻尾も……」

「ええ、この子の体はもうキヤーティアになった……ここにいるこの子は、日本人の紺野木綿季ではなく、キヤーティアのユウキということになるわ。この15年間、地球で生まれ育った人間としてのアイデンティティーは、無くなってしまった……これから先、そのことで悩むことがあるかもしれない。そんなときは、あなたたちが頼りよ」

「はい」

明日奈がしっかりと返事をし、再び手を伸ばして、ユウキの頭に触れた。長期の臨床試験で艶の無くなった髪の毛を撫でる。そしてキャーティアの主耳である猫耳にも触れた。ユウキの主耳は、触れている異物を外そうとパタンと動く

「んっ……」

触覚が敏感な耳を触れられ、眠ったままのユウキが小さく艶のある声を出した。そんな反応に、明日奈は『え?』つと固まる

「あら、大胆……」

「地球人でも耳は敏感だろ……」

ケニーとトスカの言葉に、明日奈は顔を真っ赤にしたのだった

16話

「ハア、やっとGGOに戻ってこれたぜ・・・」

「でもケリが付いたかどうかは微妙だけど」

ユウキをキヤーティアシップに移送した次の日、約2週間ぶりにGGOにログインしたラツシユとシノン

「ケリは付いたか知らんが、区切りは付いたって感じだな。それで十分だろ」
「そうね」

「それじゃ、本格的に月末のSJに向けて、各々の弱点の対策をしていかんとな」

つというこで、ブラックアローのバックヤードに集った、ジェーンを除くSJに出場するチームメンバー4人によるミーティングが行われようとしていた

「まず、俺の使ってるスパス15やデザートイーグルの1マガジン当たりの装弾数の少なさ。それによる長時間戦闘の不利について。ぶっちゃけ、これは銃を変えるしかないな。散弾銃からアサルトライフルにでも変えれば問題ないだろう。習熟度は店主のレベリングと平行してやれば、実戦レベルには間に合うはずだ」

「モノは何を使う？」

「そうだな．．．5．56のアサルトライフルなら特に何でも．．．適当に在庫で残ってるのを見繕ってくれ」

「あーいよ」

GGO内にいるのに、割と真面目に意見を言っていくラツシュ。出るからには当然優勝を狙う。ガチになるから楽しいのだ

「次、レンが壊したビームナイフ。店主のレベリングついでに漁りに行ってドロップを狙う。以上」

「早っ?!」

「あと、ハンドグレネードの携行数に関しては、爆破担当のジェーンがいるので、使う機会が少ないと思うのでこのままでいいだろう。AGI型は先人が多いから、情報量も多い。ビルドの欠点の対策法も色々と出揃っているのが利点だな。まあ結局はプレイヤースキルの一点に尽きるが」

「はーい．．．」

腕^{テカ}の問題と言われ、レンは少し憂鬱そうに返事をした。BoBで闇風に勝って優勝したことで、GGO内で彼女はかなりの評価をされているが、本人としては状況や作戦がうまくハマっただけで、過大評価されていると思っただけだ

「次、というか最後。シノンの携行弾薬数の少なさと、店主のビルドについて」

「一つにまとめたってことは、やっぱり俺が弾薬を運搬するのかわ？」

「そうなる。だけど、運ぶのは弾薬だけじゃない。回復キットも運んでもらう。店主のビルドはポーター兼メディックにしようと思う。俺らチーム全体の欠点として、VIT防御力やDEFの低いメンバーばかりであることが、大きいと思うからだ」

「確かにな・・・」

ラツシュの指摘に、店主のみならず、レンやシノンも頷いた。レンのAGI型ビルドとシノンのスナイパービルドは、共通の欠点としてVITとDEFの低さが知られている。ラツシュのLUK型も、初期値ではないがVITは低く、DEFもレンやシノンよりは多少マシといった感じである。生産者ビルドのジェーンも、VITやDEFはレンやシノンとほぼ同等とである

本来ならばVITやDEFに長けたタンクがチームには必ず1人はいるが、ラツシュたちにはそれがいないのだ

「ステはSTRとVITの二極上げ。スキルで医療を取って、それによってアンロックされる通常のよりも回復量の多くて即効性のあるキットを使用できるようにする。武装はシノンのサブと同じグロッグ18だな。少しでも弾薬とマガジンを共通にしてストレージを効率的に使いたい」

「なるほどな」

「ポジションとしては、後衛でシノンとの行動が主になるだろう。狙撃をサポートするスポットターなんかも任せられるかもしれない。敵とドンパチしない代わりにこなす役割が多くて、そのほとんどが俺らの都合の悪い部分を尻拭いさせる感じになってしまつて、申し訳ない気がするが……」

「構わんよ。自分でドンパチ苦手だつて言つておきながら、お前らと戦いたいつて言つたんだ。そういう役回りでしかチームに貢献できそうにないつて、前の戦争で身に染みてるよ」

ラツシユの提案した、自身のビルドのプランを聞いた店主。チームの都合重視のビルドであるそれを、店主は受け入れる

「さて、チームの連携確認なんかは店主のレベリングをしながらやっていくが、ジェーンがリアルルの仕事で大会までほぼイン不可能なので、5人での戦闘は大会でのぶつつけ本番になる。まあ、トラップメインの戦い方だから、俺らがドンパチやつてる間は目の前の戦つてる相手以外のチームを警戒したり、足止めする役割を任せることになるだろう」

「あのよお……そのジェーンって誰だ？」

店主が面識のないジェーンについて質問する

「俺のスーツを作った人。生産者ビルドでトラップマスター」

「あとラツシユさんのお母さん」

「リアルを持ち込むのはダメだぜー、レン」

ラツシユが目の笑ってない笑顔で、レンの頭を片手でガシツと掴む

「イタタタタ・・・頭が割れる！」

「ハハハ、安心しろ。俺のSTRによる握力じゃ頭を割ることはできんから」

「その分ギリギリミシミシと痛い痛い!!」

「それじゃ、早速装備を揃えてレベリングに出発！」

無理矢理誤魔化し、ミーティングから狩りの準備に移った4人であった

3日後・・・

「緊急ミーティングってなんだよ？」

「大会について、エントリーしたチームに運営から連絡メールがきた」

再びブラックアローに集った4人に、店主が運営から来たというメールを見せた

「えーっと・・・『開催日等変更のお知らせ』」

代表してラツシユがメールを読み上げる

内容としては、運営の想定を越える参加チームのエントリーに、通常サーバーと回線

の容量に不足が予想され、急遽大会用の大容量のサーバーと回線に切り替える対策を行うために、準備期間として1週間開催日を延期する。つとのことである

「さらに土曜日に予選。次の日曜日に本戦と、B o Bと同じ流れになるようだな」

「現状エントリーしてるチーム数は60チーム。本戦に進めるのは25チームだ。B o Bと違ってチーム戦の分、プレイヤー数が多くなるから、処理リソースの確保のために、本戦のチーム数を絞ってるみたいだな」

「というか、なんでこんなにエントリーが多いのよ？ただの個人スポンサーの小さな大会じゃなかったの？」

「それが、G G Oの情報交換やってる掲示板をちよつと覗いてみたら、お前らが原因っぽいな」

「ええウソー」

店主の言葉に、レンが疑いの目を向けた

「そもその発端が、前の戦争だ。腕の立つヤツがチームを組み、ザコを一掃する。こういう設定は、物語ではよくあるものだ」

「●パン三世しかり、●グリーン商会しかりな」

「なぜそのチョイスなのかしらんが、まあそうだ。そして、そういう精鋭のチームは憧れの対象でもある。そこでこれまで個人主義の強かったG G Oに、スコードロンとは別に

少人数でチームを組む流れができた」

「そいつらが腕試しをするのに、S・Jはもってこいの機会ってことか」

「おまけにその流れを作ったこのチームが参戦するわけだしな。お前らは個人でもB・Oのトップスリーなわけだし・・・ホレ、これ見てみるよ」

店主は現在エントリーしているチームの一覧を出して見せる。主にレンに向けて

「あー闇風さんまで?！」

「うわ、アイツ誰と組んだんだよ・・・」

つと、ラッシュユが疑問を持つが、エントリー表にはチーム名とリーダーの名前しか載っていないので、知ることはできない

「しかも今も参加チームは増え続けているとききた。B・Oと違って予選はある程度まとまったチーム数でのバトルロイヤル。このまま行けば、4、5チームくらいで1枠を争う感じだろうな」

「マークされるだろう俺らは予選からキツそうだな。でも、うん・・・面白くなってきたぜ。準備期間も延びたことだ。バツチリ準備して乗り込もうじゃねーの」

ラッシュユがニンマリとイイ笑顔で言った

「とりあえず開催日変更に対しての再エントリーはやっておいていいんだな?リアルの予定は大丈夫か?」

「私は問題ないわ」

「私も」

「俺も問題は無いが、ジェーンには確認を取るから、ちよつと再エントリーは待つてくれ」

つということで、その日のプレイを終えてログアウトしたラッシュユことトスカは、ジェーンことトスカの母のケニーに通信を繋ぐ。ユウキのリハビリに付き添っているケニーは、現在宇宙空間にあるキャーティアシップにいますので、チャージャーに付いている鈴の通信機能を使用する

「母さん、今大丈夫?」

『どうしたの?』

鈴から映し出される空中モニターに、ケニーの姿が現れる

「GGOの大会の件なんだけど、開催日が1週間ズレて、開催期間も2日間になるから、母さんの予定は大丈夫なのかなって・・・?」

『えーつと、1週間ズレて2日間なら、2月7日と8日ね・・・大丈夫よ』

ケニーも特に予定は入っていないということで、トスカはホッと一安心した

『あ、ラツシユ・・・いや、トスカ?』

「どつちでも構わんつて」

つと、そこに声が入り込み、ケニーが声の主であるユウキの姿を映した

『じゃあ・・・お義兄ちゃん』

「な、なんでやねん」

ALOのときと違い、真面目に兄と呼ばれたことに、動揺したトスカであった

「調子はどうだ?」

『うん、今まで苦しかったのが、ウソみたいに調子がいいよ』

「そうか・・・」

調子がいい、つという割には表情が曇って見えるユウキに、トスカは話が続かない

―病気が治って、少し時間が経ったから、色々と思うこともあるか・・・

「・・・」

『いいなあ・・・僕もゲームしたい』

「あ?」

―コイツ、まだ根に持ってやがる・・・ちよつとも心配した俺がバカだった・・・

メイキキュボイドの臨床試験で仮想空間にフルダイブし続けたユウキ。その分普通の15歳よりもVRゲームができる時間が多く取れた彼女。急に病気が治ったからと

いって、そこでVRゲー絶ちができるほど、彼女は大人ではなかったのである

『あらあら・・・トスカ君、メンバーの追加はまだ可能なかしら?』

「開催日の変更になって、再エントリーが必要になったから、できるが・・・」

『リハビリの経過次第で、ユウキちゃんにアミュスフィアの使用の許可を出すわ。そうねえ・・・1週間、様子を見てから判断するわ』

「甘すぎませんか、先生? 義娘に甘くしてポイント稼ぎしてるように見えるんだが・・・」
ケニーの判断が医者としてではなく、母親としてのものになっているように見え、トスカはジト目で追及する

『そう・・・なら、SAOからログアウトしてきて、たった4ヶ月でGGOを始める許可を求めてきて、それを認めてあげたあの判断も、息子に対するポイント稼ぎと言えるわね』

「ホントごめんなさい感謝してますお母様」

仕事モードの真面目な顔で、抑揚の無い口調で返すケニーに、トスカは即行で謝罪するのだった

『よろしく』

トスカを言い包めることに成功したケニーは、いい笑顔で通信を切ったのだった

「まったく、あの子だったら・・・最近口答えが多くなってきた気がするわ・・・反抗期かしら?」

「アハハ・・・」

通信を切ったケニーは、トスカの言動を愚痴る。ケニーの親としての一面を見て、ユウキは乾いた笑いを浮かべていた

「でも、本当にいいんですか? まだ、リハビリらしいリハビリは、全然やってないのに・・・」

「今は環境や体の変化に慣れるのが先よ。それに、これからのリハビリを考えると息抜きの一つもあつたほうがいいのは確かなのよね」

つい口に出してしまつたが、ワガママを言っている自覚があつたユウキに、ケニーは医者としての意見を返す

「だけど・・・病気まで治してもらつたのに・・・」

「それは私たちキヤーティアが、キヤーティアの都合で、勝手にしたことよ。むしろこちらがお礼をしなければならぬことだから、あなたが恩を感じる必要は無いのよ」

ケニーは優しく微笑み、ユウキの頭を撫でながら語りかける

「私たちが無理矢理治療をしたのだから、命が助かったことを重く考えなくてもいい：誰かのためじゃなく、自分のために、自由に生きていいのよ」

「はい・・・」

「つてことで、ユウキが早ければ来週辺りからGGOに入る件」らっしゅ

シノン「何が」

シノン「へつてことでよ?」

「医務官としての母さんの判断だから仕方が無い」らっしゅ

ケニーとのやりとりの結果をトークアプリで詩乃と香蓮に報告するトスカ

レン「SJにも出るの?」

「かもしれない・・・ちやうど1人枠空いてるし」らっしゅ

「でも店主になんて説明すればいいんだよ・・・」らっしゅ

レン「1人だけ何も知らないですもんね」

「ALOで戦った感じだと」らっしゅ

「前のBOBのキリトと同じ戦法でいけば」らっしゅ

「普通にGGO最強レベルになれるだけのセンスはあるがな」らっしゅ

「地球人のみのプレイヤーでALO最強は間違いなくアイツだったろうな・・・」

「問題は、ユウキのキャラをSJまでに」らっしゅ

「ゼロからビルドしていかないといけないことゝらっしゅ

「実戦レベルに達してたら店主も納得するだろう・・ゝらっしゅ

「つと思いたいゝらっしゅ

レンへガンバ」

シノンへガンバ」

—こいつら即行諦めやがった

SJ予選日まで、あと20日

17話

2月7日S J予選日

当日0時になると同時に締め切られたエントリー受け付け、参加チーム数は最終的には120チームにまで上った。出場者待機エリアになっている酒場に、ラツシユたちが現れると同時に、酒場の空気がピンと張り詰めた

「おーおー、注目されてんねえ」

ラツシユたちに向けられる数百のプレイヤーの視線、それらを先頭で真正面から受け止めたラツシユがニヤリと笑った。入り口から歩いていくラツシユに、シノンやレンたちが落ち着いた表情で続く

「お前らよくこれだけの視線を集めて落ち着いてられるな・・・俺、一瞬思考が止まったぞ」

「僕も・・・」

周囲からの視線に吞まれている店主やユウキが、その後をおっかなびっくりといった様子で付いて行く

「前のB o Bがこんな感じだったから慣れたわ」

「私もB o B優勝してから、街を歩けばこんな感じだし……」

「つと返すシノンとレン。ちなみに今回の大会中も、詩乃は香蓮宅にお泊りである
「あらあら……」

最後に微笑みながらジエーンが入ってきた

「つてか、酒場のキャパに収まる人数じゃねえだろコレ……座るトコがねえ……」
「ホント、早く予選始まらないかしら？」

適当な場所に陣取り、立ったまま待機するブラックアローの面々であった

「よう。堂々の御入場、流石だな」

「お、闇風か。まさかお前さんも参加するとはな」

「つとそこに、闇風が近付いてきて声を掛けてくる。それによって周囲のプレイヤーたちはさらにザワつく

「誰と組んだんだよ？」

「秘密だ。こっちは挑戦者だからな。手の内は晒さんさ」

「ラッシュの質問をさらりと受け流す闇風

「B o Bの借りは返させてもらうぞ、レン」

「受けて立ちます」

闇風はレンに視線を移し、火花を散らすような視線を交わして、真つ向勝負を宣言し

た

「ねえラツシユ……この人、すごく強いよね？GGOに来て、まだ日が浅い僕でもわかる……」

「当たり前だろ。ピラミッドの頂点にいるヤツだ。前のB○Bでレンが勝ったのは、その頂点にいる者としての心構えを利用した作戦がハマったからだ」

闇風の強者としてのオーラを感じ取ったユウキは、そんな闇風と普通に話しているラツシユやレンが異様に見えた

「謙遜すんなよLUK型の。ステで不利なLUK型で戦ってるお前のプレイヤースキルが1番ヤバイのはわかってんだ。今回の大会で機会があれば、後学のために一戦よろしく頼むぜ」

「勘弁してくれよ……」

ラツシユの肩をポンと叩いて去っていく闇風に、ラツシユは肩を竦めた

「僕、もしかして入るチーム間違えた？」

予選第13組

フィールド：山林

SJの予選はB○Bと違い、複数チームでのバトルロイヤルによって行われる。今回の参加チーム数と本戦枠から、1試合当たり4〜5チームで予選は行われる

「さて、予選フィールドは共通して直径2キロの円形、中心付近100〜300メートルが山や建物、池など通り抜けが不可能、または困難な地形やオブジェクトになっているらしい」

「要はそれより外の周囲で戦えってことだな」

試合開始直前の準備エリアの中で、公開されていた予選フィールドの共通情報を確認するブラックアローの面々

「B○Bの予選と同じで、各チームは最低500メートルは離れた場所でスタート…となるはずと個々のスタート地点は予測できる。フィールドに飛ばされて、端末にマップが出たら、すぐにマップ中央を向いて正面を確認、スキャン情報がなくても、そこからだいたい10時と2時の方向に近い敵チームはいる」

「なるほど…速攻仕掛けるのか？」

「それがいいだろう。こっちは一応優勝候補扱いされてるわけだから、待ちはカツコ悪いしな。俺とレンで回ってくる。待ってる間の行動は任せるが、襲撃されんように警戒はしとけよ」

「わかつてるよ」

作戦会議も終わり、試合開始時間となって準備エリアから試合フィールドに転送され、予選が始まった。同時に、チームリーダーの店主が端末でマップ構成を確認した

「正面はこの方向・・・右、左、どっちからだ？」

「右！行くぞ！」

店主の言葉に、ラッシュユが勘で方向を選んで走っていき、レンが後に続く。2分ほど走ると、木々の間に敵影が見えた

「いた！予想通り！レン、左側に回れ。反対側に俺が回る。合図したら突っ込んで殲滅しろ。俺がALLOに行ってる間に、どれだけ腕を上げたか、見せてみる」

「うん、わかった」

ラッシュユの後ろを走っていたレンが、ラッシュユを追い抜いて敵チームの左側に回った。AGIとDEXをフルに使って静かに速く、敵チームに接近する

一方ラッシュユは敵チームの右側の少し離れた距離に回り、挟撃の態勢となる

「さて・・・」

ラッシュユは新しい武器であるステアーAUGA3を構え、スコープで敵チームを観察した。始まったばかりということもあり、端末でマップの把握をしている6人組の敵チーム・・・その端末を持つプレイヤーにラッシュユは狙いを定める

「まずはリーダーをとってな」

引き金を引き、発射された弾丸が端末を持っていたプレイヤーの頭に命中し、死亡した

「なっ?! 敵だど?! スキャン前なのに、なぜ位置が?!」

「頭と足使って探すんだよ、ドアホ!!」

残りの敵の目を引き付けるために、ラツシユが敵の前に姿を晒す。一斉にラツシユに向かつて銃を向ける敵チーム。その1人の胸からビームナイフが生えた

「ゴフツ?!」

「もう1人だど?! ガツ!!」

レンが敵プレイヤーに背後からビームナイフを刺したのだ。レンはその状態で片手でP90を持ち、近くにいる別の1人の頭を撃って死亡させる

「クソツ!!」

一瞬でチームの半分の3人が死亡したことに毒づくプレイヤーを余所に、レンとラツシユがさらにそれぞれ1人ずつ撃ち殺す。そして最後の1人になったそのプレイヤーに、レンがP90を向けた

「ヒイツ・・・」

ゴーグルで目元が隠れているせいで、レンの表情からは感情が読み取れない。そのため最後のプレイヤーには、レンが感情の無い機械のように見え、恐怖を感じた。短く悲

鳴を上げ、そして撃ち殺された。最後にビームナイフを刺さっているプレイヤーから抜き、ドサリと倒れたそのプレイヤーからDEADの表示が上がった

「なんかお前さん怯えられてたぞ?」

「普通に集中して戦ってるだけなのになあ……」

レンは不思議そうに首を傾げる。ラッシュはそんなレンを見て、理由に気付きながらもあえて言わないのだった

一方その頃スタート地点に残ったメンバーたちは……

「たーいーくーつー」

「我慢しなさい」

ラッシュたちが行った方向とは逆の方向にヘカートIIを向け、警戒をしているシノン。近くにはユウキが木に寄りかかって座り、詰まらなさそうに小さく声を上げていた。店主とジェーンは数メートルの距離を空けて別の方向を警戒している

『ん?……来たぞ』

そんな中、外周方向を警戒していた店主の視界に人影が現れる。インカムでそれがシノンたちに伝わる

『外周から回り込もうってハラか。しかし3人だ。他の方向との挟撃だろうな』

「ユウキ、出番よ。コツソリ近付いて最低限の弾で倒しなさい」

「オツケイ」

シノンがヘカートⅡを外周方向に向けながらユウキに指示を出す。ユウキは腰を上げ、低い体勢のまま茂みに隠れて敵チームを横から襲撃するために向かう

『私の分も残しておきなさいよ』

「それは保障できないかも」

ユウキがポイントに着き、背負っていたHK417A2のカービンモデルを手に取り、セーフティを解除する。コツキングを行い、準備が終わる

「行くよ?」

『ええ』

「っ!」

ユウキが隠れてきた木からバツと敵に姿を晒し、適当に定めた1人を撃つ。7.62ミリの弾丸がアーマーを貫き死亡させる

「しまっ……」

敵チームが待ち伏せに気付くも、それはもう遅く、シノンのヘカートⅡによる1発が同一射線上の2人の頭を貫いた

『2枚抜きイタダキ』

「あつ、ズルい！」

そのとき、ユウキの位置からシノンを挟んだ向こう側、マップの中心方向で爆発が起こった

『あらあら・・・誰か引つかかっちゃったみたい・・・爆発物は補填されないから後で回収しようと思つてたのに・・・』

つとジエーンの声がインカムから聞こえてくる。挟撃されようとしてる中で、シノンたちが落ち着いていられたのは、彼女たちの周りにはジエーンが仕掛けたトラップがあったからである。試合が始まってまだ数分ということもあり、時間的に全ての方向に仕掛けられてはいないが、それでも中心方向とラッシュたちが行った方向にかけては、いくつか仕掛けることができていた

『DEAD表示1つ確認。他敵影確認できず』

『敵影1つ発見・・・あ』

店主がトラップの爆発跡で1人の死亡を視認する。そしてジエーンが別方向から接近してくる敵影を発見するが、その敵影は次の瞬間に爆炎に包まれる

『撃つ必要はなさそうね・・・』

『安くないから、あまり引つかからないでほしいわ』

トラップの作動にジェーンが困った声で言うのだった。とはいえ、本来は補助であるトラップ系スキルを極め、また製作者としての高DEX値と合わさることで、ジェーンの仕掛けたトラップは、実質仕掛けた本人であるジェーン以外には発見や解除は不可能なほどのものになっているのである

「クソッ！なんなんだよ?!どうなってんだよ?!コイツらはよ?!」

「ホント、僕も割とそう思う」

「っ！」

最後の1人が自暴自棄に叫ぶ中、いつの間にか隣にいたユウキが、同情しつつそのプレイヤーの頭にそつと銃を向けて1発だけ撃った

「最後の1人を倒したよ」

「おいおい、ブラックアロー開幕5分と経たず1チームやりやがったぞ」

「しかもラッシュとレンの2人だけでだ。開幕即行でチームを割るとは思い切ったな・・・」

観戦エリアの酒場では、予選の全ての試合がモニターに映し出されていた

「あの速さでかつ無音って、忍者かよ・・・いや、女だからのーか」

「待機してたヤツらも半端ねえぜ」

「トラップなんて見えたか？」

「全然。センサー式かと思っただぜ。あれがアナログのブービートラップだとは信じらんねえ」

なんて話している間に、ブラックアローの勝利で予選13組は終了する

「しかし・・・こうして見ると、結構やりそうなチームはチラホラとあるな・・・」

「ああ、始まる前はブラックアローと闇風んトコくらいかと思っただが・・・」

「これは賭けが面白くなりそうだな・・・」

他の組の試合でも、圧倒的な強さを見せて勝ち上がるチームがあり、観客は明日の本戦に期待を高めた

18話

翌2月8日、S J本戦日

「いいたあく敵めつけ！」

2人組チーム『PM』は森からスタートした。そこからビル街へと向かい、森とビル街の境界で敵チームを発見した

『もうすぐスキャンが始まる。詳しい情報をくれ』

「えつとねー、私のいる位置の道路挟んだ向かい側。確認できる人数は5人。全員マシンガン装備」

『わかった。スキャンの情報を確認する』

「撃つ？ヤツちやう？」

先行しているピトフーイは敵を発見したことに、興奮した様子でもう1人のメンバーのMに問いかけた

『・・・今ビル街に複数の敵チームがいる。迂闊に出て行くと、人数が少ない俺たちが集中攻撃を受ける可能性もある。精々潰し合ってもらおう』

「チツ・・・りよーかい・・・っ！」

Mの行動方針に、ピトフーイは舌打ちしつつも受け入れる・・・が、そんな彼女に向かつて複数のバレットトラインが伸びる

「おっと・・・ねえー、仕掛けてきたわよー。撃つていい?」

『距離があるのに無駄なことを・・・まあ、撃たせておけ。太い木の裏にでも隠れていれば当たることは無い、そのうち他のチームがやってくれるさ』

つとMが言うと同時に、敵チームの1人が狙撃で死亡する。別チームからの襲撃にマシガンンの乱射が止まり、ピトフーイが木の裏から顔を出してみると、もう1人のメンバーが狙撃を受けて死亡した

「ヒュ〜♪ヘッドショット決めたわ。いい腕してるわ」

「スナイパーの場所はわかるか?」

「あんたいつの間にな・・・いんや、わっかんない」

ピトフーイは後方から追いついてきたMに驚くも、淡々と質問に答える

「場所がバレるような素人ではないということか・・・いたぞ。あのビルの上」

次々に倒される目の前の敵チームに、相手の狙撃位置を発見するM。Mが差す方向のビルには、外壁をロープで降下するプレイヤーが2人・・・

「あのラペリング・・・スキルだけじゃなさそうね」

「ああ、それに始まってすぐにチームを割る思い切りのよさ・・・というよりは、統率の

取れた分隊行動。ホンモノか？」

「専用のエアガン使って訓練やつてる連中が・・・専用の仮想空間組んでやつてればいいのに」

「平和ボケのこの国じゃ、そんな予算は組めそうにないがな」

Mの言う『ホンモノ』の意味を理解したピトフーイは、つまらなさそうに言い捨てる
「でも、ま・・・ホンモノとやり合える機会なんて、そうあるものじゃないものね・・・やるわよ」

「ハアー、了解」

「おーおー、この国の軍人もやるじゃねーの」

「軍じゃなくて自衛隊。日本はそういうところうるさいのよ」

一方、ビル街の中にいるブラックアローも、PMが目を付けたチームと同じチームを観察していた。ラッシュの言葉に、シノンが注意を入れる

「でも自衛隊が出場してるなんて、マジなのか？」

「さあな、でもシステム上のスキルじゃなく、プレイヤースキルでゴリ押ししてる感じは、他のプレイヤーとは明らかに違うがな。あれだけ撃って動けてなら、リアルでも同

じことやってる人間だろ。警察の特殊部隊とかもありえたが、射殺が許されない日本の警察がこのゲームで訓練して、なにが身に付くって話だしな」

自衛隊の出場を疑っている店主に、ラッシュは観察して得た情報から推理していく「アメリカとかだと、軍の航空機や戦車の操縦訓練は、専用の仮想空間を作って、そつちに移行し始めてたりするらしいわよ。もちろん、だからといって現実での訓練がなくなっているのだけだ」

「イメトレ感覚で本物飛ばしてるのと同等に近い訓練ができるのは大きいはずだ」
ジェーンの情報にラッシュが言葉を足す

「ま、日本はこういう技術を公的機関で取り入れるのは、決まって先進国の中じゃ最後だからな。政治家共の頭の固さは世界でもトップクラスだしな」

「ああホントにな」

店主の言葉に、ラッシュはやや実感の籠った声で返した

「えっと、それで、これからどうするの?」

「その自衛隊チームと戦う?」

レンとユウキがラッシュに問いかける

「ま、GGOはリアルとは違うってことを、先達として教えてやろうじゃないの」

「敵全滅を確認、クリア、損害無し」

『了解。現在地でスキャンを受ける。周囲を警戒されたし』

「了解」

ビル街にて、3チームの争いにグレネードでピリオドを打った自衛隊チーム。リーダー役の隊員の指示に他隊員が周囲を警戒する

「確か、2チームほど付近にいたはずだ。見張りを厳に」

「了解」

前衛の上官役が注意を促し、スキャンが始まる

『スキャン結果・・・南西の1チームが近い位置にいる。恐らくこちらを狙って接近していると思われる』

「了解、現在位置にて迎撃する」

『スキャン結果は高さが表示されない。上下方向からの襲撃に注意があつ?!』

リーダー役の男の通信が途中で切れる。その1秒後、重く響く発砲音がビル街に轟く

「狙撃?!」

『1名死亡!どこからだ?!』

「着弾と発砲音の聞こえた時間からして、結構な距離なのは確かだ。安心しろ。どうせ

システムアシストを使つての狙撃だ。2発目はラインが見える。落ち着いて対処しろ」
『……了解』

前衛の上官役の男の言葉に、後衛に1人残された狙撃手は深呼吸をして落ち着きを取り戻して返事をした

「訓練だからシステムアシストに頼るなつて話では？」

「意図しなくても見えてしまうものは仕方が無い。それを無視するのは逆に不自然だ……っ?!」

つとそのとき、狙撃手が待機している建物の壁が碎け、穴が開く。同時にチームメンバーの狙撃手の欄がDEAD表示に変わる。そしてまた1秒後に先ほどと同じ発砲音が轟く

「なっ……どうなつてる?!距離からしてラインが見えてからでも十分回避可能なはず……」

「!……今はその疑問は捨て置け。目の前の敵に対処するぞ」

動揺を見せる残された隊員に、敵の接近に気付いた上官役が指示する。隊員はそれぞれ建物の壁や放置されている廃車などに身を隠す

「この本戦に1チーム……遊びに水を差す荒らしがおる」

コツコツ……つとわざとらしく靴音を鳴らして歩いてくるスーツ姿の男が、呟いた。

隊員たちが体を半分出して銃を男に向ける

「お前らだろ？」

『いえ違います・・・』つと上官役は心の中で答えた

「3の語呂合わせを言ってみろー!!」

男、ラツシユは叫び、右手にM320グレネードランチャー、左手にデザートイーグルを構えた

「えつと、1. 7320508・・・ヒトナミニヤレレバ・・・あ」

「お前らやー!!」

ラツシユが廃車に向かってグレネードを撃つ。吹き飛ぶ廃車に、隠れていた隊員が慌てて回避し体を晒してしまい、デザートイーグルで頭を撃ち抜かれる

ともあれ、開戦のゴングは鳴らされた

「チクシヨウが!・・・っ!」

建物の陰からラツシユを撃とうとした隊員をデザートイーグルで牽制する。一度引つ込む隊員だが、そこに路地裏を通って背後を取ったレンが・・・

「俺だけに注意向けてていいのか?!俺たちはチームで戦ってんだぞ!!」

「っ?!」

「とおーう」

「ウガッ?!」

レンのA G Iで速度の乗ったドロップキックが決まり、建物の陰から蹴り出される隊員。そしてラツシユに撃たれて死亡する

「クソツ調子に乗るな!!」

生き残っている隊員がラツシユに向けて発砲するが、死亡した隊員を片手で支えて盾にして弾を防ぐ

「マジで弾が貫通しねえのな。爆発も防げたりするのか?」

B O Bでは意識することのなかった死体の破壊不能特性に感心するラツシユ。L U K補正もあり、盾にした死体に弾が集中し、ラツシユにダメージを与えることができない

その隙にレンが隊員を撃ち殺し、残されたのは上官役の男が1人。訓練の継続は不可能と判断し、戦う構えを解いた

「な、なんなんだお前たちは・・・?」

「俺たちか?俺たちはただのゲーマーだ。楽しくゲームを遊ぶ一般人だよ。この世界じゃ、ちよつとばかし強いかもしれんが、リアルじゃ平々凡々だ」

『い、一般人・・・?』つとレンが疑問に満ちた視線をラツシユに向けた

「システムを無視してゴリ押すのは本当のプレイヤースキルじゃない。システムを利用

し相乗効果を出す、あるいはシステムの足りない部分を補うのが本当のプレイヤースキルってモンだ。リアルじゃ役には立たんがな」

「・・・そうかい」

ラツシユのお説教に、上官役だった男は少しの間呆気に取られた後、吹っ切れたように短く言葉を返してリザインの操作をして本戦から去った

戦闘後、集合してスキヤンの結果を見ているブラックアローの面々

「結構減ってるな・・・隣の住宅地エリアとの境界に1チーム、沼地と砂漠と山岳地帯に1チームずつか・・・」

「B0Bと違って生存を示す点がどのチームなのかわからないのが痛いわね・・・」

付近に敵がいらないと言うことで、端末をプロジェクターのようにして壁に結果を映し、チーム全員でそれを見ている

「ま、通常ならここは住宅地エリアのチームを狙うのがセオリーか」

「そうなんだが・・・他の3チームがどう動いてるか・・・三つ巴で睨み合ってくれたらいいけど、こつちに來られて三つ巴四つ巴になったら面倒だぞ？」

店主の意見に、ラツシユはふむと考え込む。ラツシユが気にしている3チームの周り

には、それぞれ全滅を示す白い点がいくつかあり、激戦を潜り抜けたことが想像できた
「でも結構距離あるよ？」

「敵の移動が徒歩ならな。B O Bでも乗り物は用意されてたが、乗り物はチーム戦でこそ活きる。次のスキャンまでに近くまで接近されてる可能性もある。俺らのいるビル街や隣の住宅街のような整地は乗り物での移動もしやすいから、不利になる」

S Jの本戦はB O Bの本戦と同様に各所に乗り物が用意されている。個人戦だと一人で運転と警戒、または戦闘をこなさなければならなくなるため、使用にはリスクも大きい。チーム戦ならば複数人でそれを分担できるため、使用しない理由が存在しないのだ

「じゃあ、どうするんだ？」

「俺としては、森を抜けて山岳地帯にいるチームを狙いに行きたい。森は乗り物では入れんし、徒歩ならジェーンのトラップが活きる」

「だが、俺らも徒歩では10分で山岳地帯までは行けんぞ？」

「そりやそうだ・・・が、そこでまたチームを2つに分ければ、奇襲ができる。まず自分で弾を携行していて、単独での継戦能力があるレンとユウキが先行して森を一気に抜ける。残ったメンバーは次のスキャンはこのビル街で受けて、スキャンが終われば残ったメンバーも森を抜ける。先行した2人が戦闘を始めて、俺らが後詰として加わる・・・こ

んな感じだが、どうだ？」

ラツシユが作戦を説明し、キーとなるレンとユウキに判断を振る

「うん、いいよ」

「僕もやる」

「他は？」

ラツシユがレンとユウキ以外の面々を見る。異論はなく、シノンたちはコクリと頷く
「よし、なら移動を始める」

「森を抜けて敵チームと当たっても、俺らが着くまで無理はするな。耐えられんと思つたら、森へ引き返せ」

「次のスキャンまで、あと6分だ！」

「よし、行け！」

ビル街と森の境界でレンとユウキを送り出す。2人が幹線道路を超えて森の中に消えていった。続いてシノンとジエーンが森の間に移動する

「恐らく住宅地エリアのチームは次のスキャンまでは待つてくれん。ここで戦闘になるだろう。次のスキャン後、即行でトンスラするから、射撃は足止め程度でいい」

住宅地のチームは乱戦を避けるならば、このブラックアローしか狙えるチームが存在しない……つとラツシユが考えていた

『50キヤリバーで足止めとはね……別に倒してもいいのよね?』

「いいが、あまり高望みはするなよ。こういうのは欲張ったヤツから死んでいくんだ」

『LUK型に欲張るなつて注意されるなんて、なんの冗談かしらね……』

シノンはその茶化したつ狙撃の体勢に入り、ジェーンは森の隣から少し奥のエリアにトラップを仕掛け始める

「いいか……下手すると、住宅地のチームを追つて、沼地と砂漠のチームのどっちかがそのままここに雪崩れ込む可能性もあるんだからな?」

「ちなみに、そうなたらどうするんだ?」

「俺が森でジェーンの仕掛けたトラップを使いつつ殿をする。それで俺以外の3人だけで、先にレンとユウキのところに向かってもらおう。俺とジェーンがこっちに残つてるのはそのためでもある」

「そうか……」

ビル街の端に残つたラツシユと店主。ラツシユが適当なビルの1階の窓ガラスを割つて、店主を中に隠す

「スキヤンまで、あと3分だ」

「スキャン結果が出たら、すぐにレンとユウキに山岳地帯のチームの位置を伝える。俺らの周りはその次だ」

「わかった」

「っ！」

つとそのとき、ラツシユの横のビルの外壁に、弾が当たる

「おっと、運がよかったな。対物ライフルならお前は外壁ごとぶち抜かれてたぜ」

「ああ、ホントにな。お前も気をつけろよ」

「ハッ、いらんお世話だ」

店主の入ったビルから離れたラツシユは、ステアーAUGを構えて狙撃のあった方向から身を隠す

「さて、敵チームの構成はどうだろうな……？後衛のスナイパーが最低1人、残り5人が前衛だと、ちとキツイか？」

悲観的なことを言いつつも、ラツシユの表情は獰猛な笑みを浮かべるのだった

19話

「射線上に候補になりえる建物が複数あって、狙撃手の位置が特定できないわ」

『そうか・・・仕方が無いな』

「それより前衛も着いたようよ。さつきからチヨロチヨロと隠れながら動いてるわ」

『何人だ?』

森の際、やや俯瞰してビル街を見ていたシノンには、ビルの合間や廃車の陰で動くプレイヤーを発見する

「1人よ。あのときのイカレ女ね。B o Bの予選といい、随分と好かれてるわね」

『勘弁してくれよ・・・』

シノンの言葉に、ラツシユは肩を落とした

「でも、予選の映像だとあのチームは2人組みだから、ここ仕留めれば・・・」

シノンがバレットサークルを使い、ピトフーイの動きを予測して、照準を先回りさせる

―残念だけど、ラツシユの中にあなたの居場所が無いのよ・・・消えなさい

静かに引き金を引いたシノン。12.7ミリの弾丸が、ビルの陰から飛び出したピト

フリーの胸を貫く。インパクトダメージで胸から上がゴツソリと削り取られた体が残り、DEADの表示が上がった

「どうよ?」

『カウンター!』

「っ?!」

自慢げにキル報告をしたシノンに、ラツシユの怒鳴り声が飛ぶ。シノンが咄嗟に地面に這い蹲ると、弾丸が後頭部の髪を千切り去り、少し離れた地面に突き刺さった

『大丈夫か?』

「ええ・・・ギリギリ。ありがとう、助かったわ」

間一髪で助かったことを自覚し、全身から冷や汗が出るシノン

—相手にも味方がいる。これがチーム戦の怖さってことね・・・でも、今ので相手のいる建物は絞れたわ

シノンはヘカートIIを持ち上げ、自身の位置を少し変えつつ、膝射でその建物に銃口を向け、スコープを覗く。撃ち込まれた弾丸の角度から大凡の高さを逆算し、それに当たる階の窓を鷹眼のスキルを併用して見ていく

『あと一分だ』

『トラップは仕掛け終わったわよ』

『シノン、仕返しは諦めろ。撤退準備に入れ』

「嫌よ！」

『言っただろ、欲をかくなつて』

ラツシユの指示にシノンが反対する。しかし、ラツシユは冷静にそれを諫める

—見つけた！

「今見つけたわ・・・一発で決めるから撃たせて」

そんな中、シノンはビルの中にいる敵のスナイパーであるMを発見する。そのまま引き金に指をかけずに狙いを定めていく・・・

—ダメって言っても撃ってやる・・・

『・・・わかった』

『スキヤンが始まる』

スキヤンが始まる中、シノンは静かに引き金に指をかけると同時に引く。冷静さを欠き、スキヤンを確認することなくピトフーイの敵討ちをしようとしていたMは、狙撃銃のスコープごと頭を吹き飛ばされ死亡した

『山岳にいたチーム、残存。やや南の沼地寄りに移動している。沼地のチームは住宅地エリアに移動した模様』

『入れ違いになつたな。いい感じに乱戦が回避された。レン、ユウキ、そのまま進め。す

ぐに追いかける』

『了解』

『わかった』

敵チームの位置を聞き、ラツシユが突撃の指示を出す

『つて、ヤバツ．．．たぶん砂漠のチームがこっちに来てる!!近いぞ!!』

『たぶん乗り物で一気に距離を詰めてきてるな．．．だが無視だ。撤退するぞ!』

店主がビルから出てきて、ラツシユと幹線道路を渡り、森の際に着いた。シノンとジェーンに合流し、トラップのないルートを通って森を駆けていった

その1分後、SHINCの乗る軍用トラックが、もぬけの殻になったこの場に到着するのだった

『今、森に入った。そっちの状況はどうだ?』

「こっちは山岳地帯に入って、敵チームを見つけたよ。敵チームは闇風さんのところだった」

先行したレンとユウキは、森と山岳地帯の境界を少し越え、更新された敵チームの位置情報を頼りに、遠距離から敵チームを目視で確認していた

『闇風んとコかよ……いや、でも予選しか情報がない他のチームよりマシなのか？全員見えるのか？』

「うん：闇風さん、ミニガンの人、前のB○Bにいた銃士Xって人、それぞれのサポートの3人」

レンが目視で確認した敵チームの構成を伝える。闇風のチームは簡単に言えば、2人組みチームを3つ合わせただけの6人チームである。AGI特化型の闇風、ミニガン使いのベヒモス、スナイパーの銃士^{マスケティアイクス}X、その3人が主力となり、それぞれのプレイヤーの弱点となる部分を補うサポート役のプレイヤーと1人ずつコンビを組む。そういった構成であった

『主力は主力、サポートはサポートって完全に割り切ってチームを組んだのは正解だろうな。全員B○Bの本戦クラスやソロのプレイヤーじゃ、チームが空中分解して終わりだっただろう』

GGOは殺伐としているため、強いプレイヤーは基本的に我が強い傾向にあり、B○Bなどで上位に入るなどの結果を残しているとそれが悪い方向にも出てしまい、他人と組んでの行動に支障が出るケースが多々あるのだ

『スナイパーは位置に着く前にヤつとききたいが、ミニガン相手じゃAGI型でも蜂の巣は確実だ。大きく北に回って、相手の北西側まで行ってくれ。俺らと挟撃に持ち込みた

『

「・・・わかった」

ラツシユの指示に、レンは一度ユウキに視線を向け、彼女が頷いたのを確認して返事をした

.

「・・・来たか」

一方、山岳地帯を移動中だった敵チームのリーダー闍風は、直感で接敵を悟った。残り2人の主力に合図を送り、2人は周囲を警戒しつつ闍風から距離を取る。それぞれのサポート要員は、各々に現実の警察機動隊が持つような形状の防弾シールドを構え、文字通り主力の盾となり、自分のペアに付いて行く

「っー」

先手はブラックアローが取った。スポンツと軽い発射音とともに、空に撃ち上がる1発のグレネード弾。それは高く空に上がり、ゆっくりと大きく弧を描いて・・・

「ベヒモスー！」

「わかつているー！」

重量装備で機動力の低いベヒモスに向かって降る。ベヒモスはミニガンの仰角を上

げてグレネード弾を撃って破壊しようとする・・・が、補助具を使用して装備しているため、ミニガンの仰角が飛来するグレネード弾まで届かない

「・・・クッ！頼む！」

迎撃が不可能と判断すると、ベヒモスは鈍重ながらも回避に移る。そして盾を持ったサポートメンバーが、グレネード弾の着弾予想地点とベヒモスの間に割って入り、爆発の衝撃や飛んでくる弾殻を盾で防ぐ。衝撃をモロに受けて2人が吹き飛ばされるが、HP上では大きなダメージになることなく済んだのだった

「グレネード弾・・・LUK型か」

初撃を凌ぎ、闇風は相手のチームがブラックアローであると当たりをつけた

「100メートル先に敵2、グレネードを発射した相手と推測」

「OK」

銃士Xの付いているサポートメンバーが観測手としての役割をこなし、攻撃を仕掛けてきたブラックアローのメンバーを発見し伝える。それを聞いた銃士Xがその方向へライフルを向けた

「フウ・・・っ！」

サポートメンバーの盾に身を隠しつつ、引き金に指をかけずに狙いを定めて、ラッシュに向かってラインなし狙撃を行う。海外育ちの彼女はリアルでの発砲経験があり、

それがゲーム内で生きていた

しかし……

「なっ……」

軽く体を捻る程度の回避行動で、容易く避けるラツシユに、銃士Xは唾然とする

「アイツに狙撃は無意味だ。スナイパーとはビルドの相性が致命的に悪い。アイツは俺がやる。それよりそろそろ……」

つと闇風が言ったところで、闇風の視界に北西に回り込んでいたレンとユウキの姿が映る

「北西に敵影2だ。アイツらの戦法で最初に姿を現すヤツは大抵囮だ。敵の目を囮に向けさせ、別方向から襲撃、最後は乱戦で各個撃破していくのが常套手段。北西はベヒモスだ。弾幕張って接近を許すな」

「わ、わかった!」

体勢を立て直したベヒモスの持つミニガンが北西から接近する2人に指向する。ユウキが同口径のHK417で牽制をするが、彼のサポートメンバーの盾に阻まれる

「私は?」

「まだ見えていないがスナイパーがいる。スナイパーはスナイパー同士で戦ってもらう」

「了解」

そう指示を残し、闇風は彼のサポートメンバーを連れてラツシユに向かつていく。特化したA G Iを最大限に發揮しサポートメンバーを置き去りにしてラツシユに突撃する闇風。対するラツシユ、向かつてくる闇風に一瞬笑みを浮かべると・・・

「ほう・・・っ！」

メイン武器のステアーAUG A3と、サブのM320グレネードランチャーをその場に落とし、ラツシユ自身から闇風に向かつてきた。一見バカな行動に映るその意味を、闇風は一瞬で見破った

「装備を捨てて重量を削減し、STR依存の機動力ブーストか」

異様な速さを見せるラツシユに、闇風はその理屈を呟く

「そういうこつた！お前の速度にちよつとでも追いつくためには、多少の無茶もせんとな!!」

ラツシユは闇風の言葉を肯定する。今、ラツシユのストレージは空っぽである。武器はホルスターに収まっているデザートイーグルのみ、その予備マガジンも実体化させて携帯している分だけ・・・他はすべて、ラツシユと一緒にいるジェーンに渡したのだ。彼女のストレージを占めていたトラップは半分近く使用されているため、彼女のストレージには空きができていて、そこに入れたのだ

「攻めてくるじゃねえのっ!!」

普段ならば、相手と一定の距離を保つ戦い方をする闇風だが、その一定距離よりもさらにラツシュに接近する。動きながらの射撃では集弾率が低くなるので、より接近しなければ、LUK補正に打ち勝つことができないのだ。もしもゼロ距離の格闘戦に持ち込まれた場合、STRやVITに劣る闇風に勝ち目は無い。それは彼自身も認識していることである。しかし勝つために、特化させたAGI値を信じ、高速での接近戦を彼は選んだのだ

しかし、彼は1つ見落としていた。今、彼がやっている戦い方は、すでにラツシュの身近にいる人物がやっていることを・・・そして彼は知らない。このような高速近接戦はラツシュのALOでの戦法であることを・・・

「っー」

射撃のために距離を詰め、さらに自身の持つ銃を相手に向けたことにより、近づけすぎた銃口がラツシュの左手に掴まれる。ラツシュは9ミリの拳銃弾を手のひらで受けるが、被弾場所や弾種からダメージ量は無視できるレベルであった。ラツシュはLUK型故、STRは決して高くはないが、それでもSTRが初期値の闇風にとつてはパワー勝負は絶対に勝てないものであり、銃に引つ張られる形で闇風は動きが止められてしまった

「つーかまーえたとつと、オラアツ!!」

そうして、動きの止まった闇風の頭に、ラツシユの右ストレートが入る。咄嗟に銃を手放し、その場で受け止めずに飛ばされることでダメージの軽減を狙う。AGI特化型故に頭部を守る防具を装備できない闇風。目元を隠すアクセサリーとして着用していたサングラスが壊れて吹っ飛び、空中で消滅する。VITもDEFも低い闇風は、ラツシユのパンチでHPが1割も減ってしまう

「クツ・・・っ?!」

「ハッ！脳震盪判定入ったようだな」

追撃を避けるために殴り飛ばされた後、すぐに立ち上がる闇風だが、足元が覚束ない。頭部への打撃ダメージによって、システムの『脳震盪になった』という一種の状態異常に陥っていたのだ。平衡感覚が狂い、視界もややボヤけている闇風

ラツシユは闇風の銃を投げ捨て、デザートイーグルを抜いて闇風に向けていた。闇風のボヤけた視界でもそれは認識でき、自身の負けを悟る

「やらせるかよ!!」

しかし、ラツシユの撃った弾丸は間に割り込んだサポートメンバーの盾によって防がれる。片手で盾を支え、空いた手で治療キットをタクティカルベストから取り出して闇風に打つ

「クッ!!」

闇風の回復を待つサポートメンバー。そんな彼の視界の端に、ジェーンがラツシユの置いたステアーAUGを構える姿が入る。盾をそのままに、5・56ミリの弾を体で受けて闇風を守る。習熟度が無いため、ジェーンの撃った弾はバラつきが酷く命中弾は少ない。またサポートメンバーはVITとDEFが高いため、当たっても攻撃を耐えることができていた

「イクスさん援護をくださいー!」

攻撃手段を持たないサポートメンバーは、絶る思いで銃士Xに支援を要請する。数秒後、ジェーンに向かってバレットラインが伸びてきた。そして飛んできた弾を、ジェーンは射撃を止めて横に転がって回避する

「スマン・・・助かった」

時間経過で脳震盪が治り、闇風が復帰する

「クソッ・・・仕方が無いとはいえ、銃を手放してしまった」

「なら、まず拾うところからですか・・・」

闇風の銃は、ラツシユの後方の地面に落ちている。すぐに投げ捨てられたため、特に壊されたような様子は見受けられない

自分の腕テマに自信を持っていたため、サポートメンバーに武器を持たせなかったこと

を、闇風は後悔する。と同時に心の隅にあった『チーム戦でも個人技で戦い抜ける』という思い上がりを恥じた

「第2ラウンドだ・・・協力していくぞ」

「了解です」

20話

「うひゃあああつ?!」

「わわわっ!!」

北西方面、ベヒモスの構えるミニガンから、高速で7・62ミリ弾が連射される。反動と弾薬消費を抑えるため、やや発射レートを抑えているとはいえ、毎秒30発以上の弾丸がレンとユウキに向かって発射されていた

弾を回避するため、地面の窪みに向かってヘッドスライディングしたレンとユウキは、間一髪被弾を免れる

「これどうすんの?!」

「わかんない!」

ユウキの問いかけに、レンは即答で返した。スピードのあるAGI型のレンでさえも、ミニガンの連射力は脅威である。レンよりも遅いSTR—AGI型のユウキでは言わずもがなである。現実では不可能とされるミニガンの手持ち発砲。GGOの中でそれは可能ではあるが無理もあり、過重ペナルティや射撃の制御に難があつて集弾率が悪いなどの欠点がある。しかし徐々に距離が近くなるにつれ、それら欠点を差し引いても

7. 62ミリの火力と自動小銃を超越する発射レートが2人の接近を阻んでいた。現在ベヒモスまで30メートルほどの位置に2人はいた

「あれだけ連射してるから弾切れするかなって思ったら……」

「まさか、サポートの人が弾薬を持ってたって……」

その連射力故、弾薬消費が激しいミニガン。初めはベヒモスの携行する弾薬が尽きるのを待つつもりであった2人。だが、彼に同行するサポートメンバーがストレージから追加の弾薬を出したことで、その望みは絶たれた

「ねえ、ALOで凄い剣士だったなら、弾切って進めない？」

「無茶言わないでよ……」

レンが現実逃避しつつユウキに問いかける。一応光剣も持っているユウキだが、ミニガンの張る弾幕に飛び込むのは無謀であった

「なにか弱点とかないの……?」

「うーん……私も銃は詳しくないから……店主さん、ミニガンの弱点とかがありません? 重さとか弾の消費以外で」

ユウキの呟きにレンが少し考え、知識を持っているであろう店主に情報を求める

『ガトリングの弱点?……『撃つ』と思って引き金引いてから弾が出るまでの時間差とかだな。銃身の回転数を上げないと撃てないからな』

「そういえば、僕らが飛び出しても、すぐに弾が飛んでくることは無いよね」

「あれってなにで回してるの？」

『電気のモーターだな。そういった部分も弱点ではあるな』

店主の情報を聞き、レンはふむ．．．と作戦を考える。しかし、今いるこの場所に止まつていられる時間も少なく．．．

「とりあえず左右に分かれて挟撃を．．．あとは流れで」

「わかった」

レンがとりあえずの策を考え、指示を出す。そして2人は窪みの中で、モゾモゾと匍匐前進をして左右に分かれていった

「クソツ．．．チョロチョロとー」

レンとユウキが苦戦しているベヒモスだが、彼の側もあまりいい状況とは言えなかった

店主の指摘通り、圧倒的な発射レートを誇るガトリングの短所である、銃身の回転の上昇からの発射、そのラグによってレンとユウキに回避、接近を許してしまっていることに、彼は焦っていた

銃身を回しっぱなしにすることは、電動式であるために必要なバッテリーの容量上、

不可能である。なぜなら、このスクワッドジャムの本戦の展開が彼自身の想定以上の激戦になり、サポートメンバーに弾薬と一緒に持たせていた替えのバッテリーが無くなつてしまったのだ

これは彼のチームメイトが、闇風と銃士XというB o B本戦進出レベルであることに対し、ベヒモスはそういつた結果を残していないこと。また、過重ペナルティというわかりやすい弱点を持つていることが大きく、要するに敵チームから狙いやすいカモ扱いをされていたのだ。それを尽く打ち倒した結果、彼の想定以上の早さでバッテリーを消耗してしまったのだ

バッテリーが切れれば、銃身を回転させることができなくなるため、ミニガンは機能を停止してしまい、攻撃の手段が無くなる・・・弾薬以外にバッテリーの消耗を軽減させながらの戦いは、ベヒモス自身も始めての経験であり、ジリジリと後退を続けるベヒモスとサポートメンバーであつた

「っー！」

二方向から分かれて出てきたレンとユウキ、ベヒモスもすぐに反応してミニガンの銃身の回転を上げる。狙うのは2人の内、A G I値の低いユウキである。レンのほうにはサポートメンバーが向き、盾で射線を遮る

「ほっー！」

回転が上がり、射撃を予告するようにバレットラインが伸び始める。ユウキはそれを視認し、進行方向を大きく変える。重量が大きいため、慣性も大きいミニガンは、ユウキの動きの変化に付いていけず、発射され始めた弾が外れる。そしてユウキが応戦するために、射撃を行う。バレットラインを見て、ベヒモスが横にズレてそれを回避するが、そのせいでミニガンのユウキへの指向がさらに遅れる

その一方でレンが、AGIを活かして一気に距離を詰める。それに対してベヒモスへの射線が通らないように、微妙に位置を変えるサポートメンバー。しかしレンの動きに集中するあまり、防御の基準となるベヒモスの位置が、ユウキの射撃を彼が回避することと変わってしまったことに気付くのが遅れる。その隙を突き、レンがP90をベヒモスに向けた

「つとー」

P90から伸びるバレットラインで、自身のミスに気付いたサポートメンバーは、すぐさま位置を修正する。そして今一度ベヒモスとの位置関係を注意深く確認するようになる。しかし、それは同時にレンへの注意がそれまでより疎かになるという意味であった

「クソツ！バッテリーが・・・」

ミニガンのバッテリー残量がいよいよ危なくなってきたベヒモス。最後の博打でピ

ンポイントに対象を狙った射撃から、周囲を薙ぎ払う掃射に撃ち方を変える。やや振り回し気味に弾丸を広範囲にばら撒き、相手を殺すことよりも、被弾させて動きを止めることを目的にする

「つたあ?！」

ばら撒かれた弾丸にユウキも回避しきれず左上腕に被弾する。インパクトダメージで被弾箇所から先の腕が千切れ飛ぶ

「ま、まだまだあ!!」

右腕一本でHK417を構えて撃つユウキ。左手の支えがないことで、銃身がブレて弾は大きくバラけるが、それでも数発はベヒモスに向かって命中コースに飛ぶ。当然バレットラインで見えているので、ベヒモスは回避行動を取り、サポートメンバーもそれを確認し合わせて動く

その僅かにレンから注意が逸れる瞬間・・・レンにはそれで十分だった。腰からハンドグレネードを取り、スイッチを入れてアンダースローで投げる。投げた手をそのままP90に持っていき、両手で構えて射撃に移った。サポートメンバーの盾に激しく撃ち込んで音を鳴らし、ハンドグレネードの落下音を紛れさせる

「無駄だ、無駄だ。この盾は素材と厚さで強度は折り紙付きだ。7.62ミリだろうが余裕で防ぐ。拳銃弾程度じゃ傷すら付かん」

つと余裕をかますサポートメンバーの盾の横を、地面スレスレの軌道でハンドグレネードが過ぎ、サポートメンバーとベヒモスの間に転がり爆発。爆発跡の倒れている2人からDEADの表示が上がった

レンはユウキに駆け寄り、大会が個人に配布した簡易治療キットを使って、ユウキのHPを回復させる。欠損した左腕は時間経過でしか復元しないが、HPだけは満タン状態に戻した

「北西方面、ベヒモスとサポート1名撃破！」

チームに撃破報告をし、2人は右手だけでハイタッチを交わした

少し時間を遡り、スナイパー同士の対決の銃士X。しかしブラックアロー側のスナイパーであるシノンはまだ発見できずにいた

「いるとしたら森の中、ですかね？」

「相手の射程は1000を越えてる。可能性はあるわね。対してこちらは800がやっと・・・」

スポッターを兼任するサポートメンバーが双眼鏡で森を監視する

『イクスさん援護ください！』

つとそこに闇風に付いているサポートメンバーからの叫ぶような援護要請が入ってくる。銃士Xが闇風の戦闘を狙撃銃のスコープで覗く・・・すると、銃を無くした闇風を守るサポートメンバーの姿があつた

「チツ」

仕方なく闇風の援護に入る銃士X。ジェーンに向かってバレットサークルを合わせ撃ち込む。射撃を止めて回避行動をとったジェーンに追加で2発ほど撃って牽制し、闇風から遠ざけさせる

すると、ジェーンがステアーAUGを銃士Xのほうに向けた

「?・・・?!」

チームメイトの銃で、明らかに持て余している感のあるジェーンに、『ここを狙えるのか?』と不信に思っていた銃士Xだったが、直後に精確に自身に伸びてきたバレットラインに驚く。すぐにサポートメンバーの盾に隠れて銃弾を回避する

「!」

同様にサポートメンバーの頭にもバレットラインが伸び、彼は慌てて盾に身を隠す「精確な射撃・・・あの人もスナイパーなのでしょうか?」

「いや、たぶん違う・・・あの銃はもう1人が持ってたものよ。スナイパーなら自前で狙撃銃を持つはず」

銃士Xがそうつと盾から顔を出してジェーンのほうを覗く。すぐにジェーンを持つ銃からバレットラインが彼女の顔まで伸びてきた。顔を引込め、飛んできた弾丸が盾の横を通過する

「あの人は確かトラップ使い……なら高DEX値によるゴリ押しの狙撃だわ。アサルトライフルを単射で撃てば、銃の習熟度不足による弾のバラつきは起きない」

ジェーンの精密射撃の理屈は、銃士Xの推理どおりであった。製作者ビルドによる高DEX値で正確に狙いを定め、大きさが変化するバレットサークルの中で、一番小さくなったタイミングで撃つ……それだけであった。バレットサークルを用いた場合の狙撃は、難しい計算など必要の無い単純なタイミング勝負である

「それでも、牽制としては十分の意味がある……」

そんなジェーンの拙い狙撃だが、閨風の援護どころか、シノンの搜索すら行えなくなった現状を考えると、効果は絶大である。ジェーンの周りに遮蔽物はなく、一見狙われ放題だが、本戦も終盤で他チームの横入りの可能性が低い中では、その堂々さも立派な戦法である。今のジェーンは、盾から顔を出そうとする2人を押し戻すモグラ叩きをしているような状態である

つとそのとき、北西方面で爆発が起こる。同時にチームメイトのベヒモスと彼に付いていたサポートメンバーの欄がDEADの表示に変わる

「ベヒモスさんたちが倒された?!」

この後、ベヒモスたちを倒した2人が、自分たちの背後を突くことは容易に想像でき、切迫した状態に陥る銃士Xたち。彼女たちからすれば、只管に目の前の敵と戦ってるだけの闇風たちのほうが、楽そうに思えるほどである

「仕方ない、こっちは闇風に任せて、私たちが北西方面に・・・」

シノンの搜索を諦め、ベヒモスを倒したレンとユウキにマッチアップをすることを決める銃士X

しかし、それをジェーンは許さなかった。ジェーンは、ラツシユが落としたもう一つの武器であるM320グレネードランチャーを構え、盾に向かってグレネード弾を撃ち込む

「グオツ?!」

爆発の衝撃で盾ごと吹き飛ばされるサポートメンバー。それにより、銃士Xは遮蔽物が無い状態に晒される。そんな中で、ジェーンが再びステアーAUGを向けようとする

「早撃ちならっ!」

ジェーンに撃たれるよりも早く撃とうと、銃を構えて狙いを定める・・・が、ジェーンが狙ったのはサポートメンバーのほうであった

「私じゃない?!・・・っ!」

ジェーンの狙いに気付くも既に遅く、彼女たちの予想通り森にいたシノンから長距離狙撃で放たれた弾が、ジェーンや闇風たちを飛び越え、銃士Xの体は上下に割ったのだった

同時に、倒れているサポートメンバーにもジェーンが撃ち込み。DEAD表示が上
がった

21話

「あとはお前ら2人だけのようだな」

ベヒモス、銃士Xが死亡し、闇風のチームは闇風と彼と行動するサポートメンバーの2人だけになる。ラツシユが勝敗はついたらとばかりに余裕そうな態度を取る

「ま、俺たちがチームワークについて偉そうに言えた立場じゃないが、もうちよつとチームメイトを頼つてもよかつたんじゃないか？」

「そうだな・・・今回の大会は反省材料が多く出た。次はもつと連携について詰めてくるさ」

だが・・・つと闇風はサポートメンバーの盾から体を出して言葉を続ける

「それは終わつてからの話だ・・・ここで即降りなんてツマラン真似はせん。例え負けようが、1人くらいは連れて行くぞ」

「銃も無いのにか？」

「お前こそ、俺に当てられるのか？」

睨み合うラツシユと闇風。デザートイーグル片手に適度に脱力して立つラツシユ。対して闇風は腰を低く構え、駆け出すタイミングを計る

「っー」

シノンからの狙撃を警戒し、睨み合いもそこそこに闇風は駆け出す。目的はラツシユの後方に転がっている自身の銃。格闘戦に引き込まれないように、ラツシユには近付かずに迂回するルートを選ぶ。そしてサポートメンバーが盾を構えたままラツシユに向かつて突撃する

「盾持ちを囚にする単純な時間稼ぎか。この状況で武器を持ってない盾持ちを相手にする必要はねえよ」

闇風に向けたデザートイーグルからバレットラインが伸びる。射撃を妨害しようと、盾ごと体当たりするかのように突っ込むサポートメンバー。それが当たる直前で、ラツシユが少し位置をズラして回避する。盾の重さのせいで急に止まれず、盾の横からサポートメンバーの体が隙だらけに晒される

「ほうら、よつと!!」

「ガッ?!」

横から蹴りを入れてサポートメンバーを転ばせる。そんなラツシユの下にプラズマグレネードが落下してくる

「盾持ちごとかよつ! 割り切ってんな!」

走って逃げるラツシユ、最後はヘッドスライディングのごとく飛び込みで、ギリギリ

爆発範囲外に逃げ仰せて生還することに成功する。なお、着地はズサーっとはいかず、片手を地面についてからの半回転捻りを無駄にキメて足から着地した

ラツシュがそんなことをしている間に、闇風は一気に自身の銃の位置まで駆けていく
「銃は返してもらおう……っ！」

自身の銃に手が届く距離まで近付いた闇風。しかしそこで、自分が踏んだ地面から、カチリと嫌な音がする

その瞬間、闇風の中に色々な思考が駆け巡る……

なぜ、奪った銃を壊さなかったのか？

なぜ、ベヒモスや銃士Xたちが倒された今も、ラツシュが一人で自分たちの相手をして
いるのか？

なぜ、こうも簡単に銃を拾いに来れたのか？

奪った銃は囷に……

すでにラツシュ以外のメンバーの行動が終わっていた……
銃を落とした場所にはトラップが、そこに自分は誘導された……

「ハメヤがったな、コノヤロー！」

このまま闇風が足を動かさず、地面を踏んだままならば地雷は爆発はしない……しないが、スピードに乗ったAGI型は急に止まれない。どれだけ踏ん張ろうと体の勢い

は止まらず、とうとう足が地面から離れた。次の瞬間、その地面が爆ぜ、連鎖して付近の地雷も爆発する

「さよーならー」

「闇風さん?!」

ラツシユが暢気に爆発に向かって手を振る。プラズマグレネードを盾で防ぎ、生き残ったサポートメンバーが叫ぶが、爆発の煙が収まるとそこには下半身の無い闇風の体・・・そしてDEAD表示が上がる

「闇風、お前は強かったよ・・・だが、チームでかかれば、お前もこんなもんさ・・・」
妙なキメ顔で呟くラツシユであった。すでに生き残りのサポートメンバーには興味も無く、彼自身も降参の操作をしてバタリと倒れる

「んー、まだ終わってないってことは、前のスキャンでビル街に向かったチームと住宅街にいたチームが生きてるってことか・・・森の際辺りまで戻ってスキャン待機するか」

「いよいよ最後の戦いだ。まさかここまで来れるとは・・・」

住宅地エリアのビル街との境界付近、荒れ果てた住居の中で、GGOでは珍しい女性プレイヤーが3人、車座に固まっていた

女性だけで組まれたチームSHINC・・・彼女たちがブラックアローと同じく生き残ったチームである。ブラックアローが去った後のビル街でMMTMとの戦闘に辛くも勝利をし、ブラックアローとの最後の決戦に望む

「しかしこちらは既に手負い・・・」

チームリーダーのエヴァは生き残ったチームメイトであるトーマとターニャに視線を向ける。先ほどのMMTMとの戦いで、チームのタンク役であるローザとソフィー、アタッカー役のアンナは死亡してしまっていた

敵も味方も死亡する壮絶な消耗戦の中で、勝敗を分けたのは手に入れた乗り物の違いであった。MMTMの手に入れたホバークラフトは水上では高い機動性を発揮したが、陸上で瓦礫の多いビル街では速度が出せなかった。対して、軍用トラックを手に入れたSHINCは、トラックを盾にして陣地を構築、真つ向からMMTMを迎え撃った。結果として、軍用トラックの高耐久値に助けられ、SHINCはMMTMを撃破することに成功する

「最後の相手はブラックアローか、闇風のチームあたりだろう・・・このメンバーで勝てる可能性は低い。降りたいなら、今のうちに言っておけ」

「まさか」

「ここで降りたら、死んでいったローザたちに合わす顔がねえよ」

リーダーとして、降参の選択肢を提示するエヴァだが、2人ともそんな気はサラサラ無いと言わんばかりに戦う気を見せる

「なら、これから山岳地帯に向け、突撃を行う。作戦は無い。相手に潰されるか、こちらが食い破るかだ！」

「了解！」

3人は立ち上がり、住居から出る。そして北に向かつて駆け足で移動し始める。そこから森の間を通って山岳地帯に向かう腹積もりであった

「最後の敵は住宅地とビル街の境界あたりか・・・向こうからも接近してきてないと10分じゃ接敵は難しいな。移動しながら次のスキャンだな。森の間を移動して北から住宅地に入る班と、一旦南下して沼地沿いに西から住宅地に入る班、2つに分かれて移動しよう」

スキャンの結果を地面に投影して見ながら、ラツシュが行動方針を提案する。生き残りが自分たちを含め2チームだけとはいえ、油断をせずに優勝を狙いにくいため、チームを分けて行動という安全策を取る

「もし、相手がこっちに向かつてくるなら北ルートで行く班が、住宅地エリアで待ち伏せ

するなら西ルートで行く班が接敵する可能性が高いだろう。どっちが接敵しようが、もう片方がその背後を突くことになるから、どう分けてもあまり変わんねーな」

「なら、私は西ルートで行くわ。いい加減森から出たいわ」

「そんじや、俺も西ルートになるな」

ラツシユの作戦を聞き、シノン^のは沼地沿いに降りる西ルートを選んだ。と同時に、彼女の弾薬運搬役の店主も西ルートが決定する

「つとなると、後衛2人だから一応残り1人は前衛で……ユウキ、いいか？」

「オツケイ」

バランスを考え、ユウキを西ルートに振り分け、残ったラツシユ、レン、ジェーンが北ルートと班が決定する

「接敵したら、基本は時間稼ぎに務めて、もう片方の到着を待て。攻めるのはその後だ」
「わかったわ」

沼地沿いまで降りていくシノンたち西ルート班を見送り、ラツシユたち北ルート班も移動を始める

「あの、ところでジェーンさんや、ステア^そーAUG^銃返してくれん？」

「あら、返さなきゃダメ？ 狙撃結構楽しかったのに……」

「……なら、いいです。とりあえずこの本戦中は使って……」

気に入ったと言わんばかりにニッコリと笑うジェーンに、ラツシュが折れる

「この本戦が終わったら、狙撃銃買ってみようかしら……」

「おいおい……」

狙撃の楽しさに目覚めたジェーンにラツシュは、やや呆れの目を向ける

高DEX値を持つジェーンならば、狙撃だけなら習得することはできるだろう……しかし、狙撃手というスタイルは、ただ長距離の的に命中させれば、それで成り立つスタイルでもない。位置取りや索敵などのスキルも必要であり、また最近広まりつつあるプレイヤースキルによるラインなし狙撃もこれからは必須技能となる

—そこまで極めるつもりなのか……？年齢考え……

「ラツシュ君？今何考えたの？」

「は、はひ？」

ラツシュの心を読んだかのようにジェーンが銃口をラツシュに向けた

「戦場での上官の死因の何パーセントかは部下の謀反なのよ？」

「じよ、冗談キツいっすよ、ジェーンさん……」

ニッコリと目の笑っていない笑顔で引き金に指をかけ、銃口からバレットラインが伸びる。それに対して両手を上げて、降参の意を示すラツシュ

「優勝争い中に仲間割れで自滅は流石に……」

「なら、戦いに集中することね」

静かな怒りを感じる低いトーンの声で注意したジェーンは引き金から指を外し、銃を下ろした

「ホッ．．．レン、先行してくれ。もし敵が北ルートでくるなら、できれば森に着くまでに発見したい」

「あ、うん、わかった」

レンが先行して森を進み、ラッシュとジェーンは、住宅地に入って北の道路沿いに進行する

しばらく進み、森の中のレンが、ビル街と住宅地の境界を望める位置までたどり着く

『あ』

「敵か？」

『うん、見つけた．．．だけど3人だけ』

「3人？」

—向こうもチームを分けた？ならシノンたちをこちらに呼ぶのは逆に危険か？

レンの報告に、ラッシュは相手の作戦を読む

『こつちに来るよ。森を通って私たちのいた山岳地帯の方に行くのかな？』

「かもしれない。ヤツらは先行部隊ってトコか．．．」

『最初から3人のチームとか？あるいは途中で仲間が死んじゃったとかは？』

「ありえるが、そうだとわかるまでは、基本相手は6人チームで全員生存していると想定して戦う。楽観視して負けるのはカッコ悪いだろ」

つとラツシユが腕時計でスキヤンまでの時間を確認する

「恐らく森に入る手前あたりで、次のスキヤンになる・・・そこで相手は西ルート班のほうへ向かいだす。そこを叩くぞ」

『わかった』

「西ルート班、まだ敵チームの全戦力の位置がわかっていない。まずはこつちだけで相手を叩いて残りを誘き出すから、背後を突くのはそれまで待て」

『了解よ』

そして、スキヤンの時間が近付き、SHINCの3人が身を隠すために住宅地エリアの一番北東の角地の住居に入る。レンからは道路一本挟んだ向かい側、ラツシユやジエーンからは東に住居3軒の位置であった

「敵は北東の角地の住居に入った・・・他に位置に表示が出たら別動隊だ。そうじゃなくても油断はできません」

『わかった。スキヤンを確認する』

スキヤンが始まり、通信の向こうで西ルート班の店主が結果を確認する

『・・・ラツシユが言った場所に表示が出た。とりあえず、そいつらが本隊ではあるってことか?』

「そういうことだな・・・そっちに向かいだして、少ししたら仕掛ける。西ルート班はゆっくり移動を続けてくれ」

「彼女たち裏口に回ったわよ」

「ん、わかった・・・レン、音を立てないように俺の正面の茂みまで移動してから真つ直ぐ道路を渡ってきてくれ」

S H I N C が 1 本南の通りに移動したのを受け、森に隠れているレンを呼び寄せる

レンが合流し、仕掛けるタイミングを読む

「よし、行くぞ」

2 2 話

荒れ果てた住居が並び、不気味なほど静かな住宅街。その中を堅い靴底の足音を鳴らして走るチームSHINCの3人の女性プレイヤー。住宅地西部にいる敵を目指し、東西に伸びる通りを行く彼女たちは、南北に伸びる通りとの交差点に差し掛かる

リーダーのエヴァ、アタッカーのターニヤが続き、スナイパーのトーマが交差点に入った瞬間、北方向から1発の銃弾が飛んでくる

「ウツ?!」

「トーマ?!」

銃弾はトーマの足を貫通し、トーマは交差点の中心に倒れる。すぐにターニヤが弾が飛んできた方向を警戒し、エヴァがトーマのフォローに入る。しかし、エヴァが差し出した手をトーマが掴もうとした瞬間、エヴァの腕にバレットラインが伸びてくる

「っ?!」

咄嗟に手を引っ込めるエヴァ。わざとダメージの低い四肢を狙われ、弄ばれていることに、苛立ちを覚える3人

「いたー! ブロック北の交差点、住居の塀のところ!」

「当たらなくてもいいから撃て！」

エヴァの指示に、ターニヤが短機関銃で応戦する。拳銃弾ではやや遠い50メートルほどの距離だが牽制にはなったようで、狙撃をしたジェーンは弾を回避するために塀に隠れた

「なぜ一気に仕掛けてこない・・・?」

「私たちが3人で行動してるから、残りの3人が別で動いてると考えているんだろう。私たちを適度に攻撃してそれを炙り出す算段か・・・」

「敵はかなり慎重ね」

「だからこそ生き残ったんだろう」

エヴァが改めて手を差し出し、それを掴み立ち上がるトーマ。そこに、第2波としてレンが住宅の塀を跳び越えて現れる

「っ！ピンクの暴風?！」

「最後のチームはブラックアローか！」

ジェーンが隠れた塀のある住居と3人がいる交差点に面した住居、その敷地の境界あたりから跳び出てきたレンは、着地とともにAGI全開のダッシュでターニヤの射撃を回避する

「クッソ!!速い!!」

「トーマ、狙撃手の相手をしろ！」

「了解！」

立ち上がらせたトーマの背中を押して送り出し、エヴァが突っ込んでくるレンに向かつていく

「ターニヤ、2人で掛かるぞ！」

「オツケー!!」

BoB優勝者の実力者相手に、2対1で挑む。エヴァの銃はフルオート射撃可能な狙撃銃のVSS。2人の銃から伸びる多数のバレットライン・・・流石にレンも回避がしきれない、つとエヴァが確信する。そんな中、彼女の視界の端、彼女たちのいる交差点の北東側の角地の住居の敷地から、ラツシユが出てくるのが見える

「しまっ・・・」

ラツシユはデザートイーグルを構えると、ラインなし狙撃と同じ要領で発砲する。発射された弾は、短機関銃を持つターニヤの右肩に当たり、44口径のマグナム弾の衝撃で体勢を崩されて短機関銃の狙いがレンから大きく外れ、エヴァの射撃はレンが自分で回避する

「クソツ！LUK型が・・・よりもよって！」

最悪の相手の登場に、エヴァの表情がより険しくなる。ジェーンからステアー^スAUG^{武器}

を返してもらえなかったラッシュュは闇風との戦い同様に、ストレージ空っぽ状態の機動カブーストで、素早い動きで接近していく

「バカな・・・こんな速くはなかったはず?!」

「ボスー」

機動力カブーストに驚くエヴァ。レンに向かって射撃をしているエヴァを守るため、ラッシュュに撃たれたターニヤが体勢を崩されながらも、左手で抜いた拳銃でラッシュュを狙い、接近を妨害する。しかしレンへの射撃もラッシュュへの射撃も、簡単に回避されて牽制にすらならない

「っ・・・舐めるなあっ!!」

VSSのマガジンが空になり、状況からリロードを諦めてそれを手放したエヴァ。突っ込んでくるレンに向かって拳を繰り出す。レンはそれに対し拳の軌道を冷静に見極め、左手で取りやすいように右肩口に納めているビームナイフを掴み、エヴァの拳と腕を縦に切り裂いた

「っ?!」

「いめんね」

同性だからか、レンが一言謝り、右手で持ったP90をエヴァの胸部に軽く押し当てて10発ほど撃ち込む。高い貫通力が設定されている5・7×28ミリの銃弾が、タク

ティカルベストも防弾ベストも貫き、エヴァの体に突き刺さり、エヴァのHPを削り切った

体から力が抜け、倒れるエヴァ・・・しかし、そこで彼女が執念で行動を起こす

「うわっ!」

レンに向かって倒れこむエヴァ。彼女の左手から、戦死した仲間であるローザから取ったハンドグレネードが、スイッチが押された状態で転がる。お土産グレネードである

「ちよ、まつ、重?!ヤバイッ?!」

上に乗つかるエヴァの重さで動けないレン。死体となったエヴァの体は破壊不能オブリエクトとなり、ビームナイフで切ることもできない・・・

「ひ、ひいっ!!」

地面とエヴァの死体の間から見えるグレネードに、もうダメかとギョツと目を瞑るレン。そんなレンの耳に、弾が地面に当たる音、そして5.56ミリの発射音が聞こえる。聞こえてきた音にレンが目を開けると、そこにあったグレネードが無い・・・

「つと思つたらあるー?!」

しかし、グレネードはエヴァの足のほうへ少し移動しただけで、爆発範囲にレンを捉えたまま存在していた。グレネードは銃弾を受けたことで、タイムリミットよりも早く

爆発の前兆であるスパークを発し始める

「つたく、世話が焼けるっ!!」

つと、そんなグレネードをラツシユが缶蹴りの缶よろしく思いつき蹴っ飛ばした。すぐに後ろに跳び、地面に伏せるラツシユ。蹴り飛ばされたグレネードは、レンもラツシユもギリギリで巻き込まず起爆した

なんとかピンチを脱したレンとラツシユ。しかし相変わらずエヴァの死体に押し潰されているレンはもちろん、地面に伏せたラツシユも、ターニヤとトーマからは隙だらけである

「ボスの仇!!」

「ファッ?!なんで俺?!」

「アイツはボスの死体で撃てないからだ、よっ!!」

ターニヤが短機関銃をラツシユに向けて発砲。伏せた状態で横に転がって回避するラツシユ

『まったく、何遊んでんのよ?』

そこに、シンンからの呆れまじり通信とともに、ターニヤの頭を吹き飛ばす一発が届く

「レンが敵のボスとやらと熱い抱擁をしててな」

「うう……ちょ、ちよつと油断しただけだし!」

やつこのことでエヴァの死体の下から這い出たレン。立ち上がるラッシュとレンは、2人の狙撃手に狙われて動くに動けないトーマの下へ……

「ヒイツ……」

「いや、そんな怯えんでも……降伏勧告くらいはするつて。警戒していた別動隊はいないみたいだし」

追い詰められた状況に、小さく悲鳴を上げるトーマに、ラッシュが優しく言葉をかける

「勝負は決したし、こちとら対MOBが本業だから、撃たなくていい弾は撃ちたくない。だから降参してくれないかな?あとお仲間伝言ね。『できればフルメンバーの君らと戦つてみたかった』つて」

「……わかった」

ラッシュの説得と伝言を受け取り、トーマが降参のウィンドウを開いた

「あ、最後にね、こういうときは悲鳴じゃなくて、『くつ、殺せ!』つて……」

つと話す途中で、ラッシュの頭にバレットラインが2本伸びてくる

「うわっ?! あっぶね!!」

「?!」

慌ててバク転で回避するラツシユに、トーマは意味がわからないといった表情をする。「あ、気にしなくていいよ。私も意味わからなかったけど、どうせロクでもないことだろうから」

「そうなの?」

「ロクでもなくねーよ!素晴らしき様式美ってヤツだよ!」

レンの言葉に反論するラツシユ。そしてラツシユの頭に再びバレットラインが刺さる。それをラツシユは機動力ブーストを無駄に活かしてアクロバットで回避する

そんなラツシユを見て、レンは頭痛を堪えるように額に手を当てる

「はあ・・・ごめんね。あの人たちが本気で撃ち合い始めちゃう前に、降参ボタン^そ押しちやっつけてくれる?」

「あ、はい」

レンのお願いで、トーマに手が降参ボタンに触れた。死亡扱いになり倒れるトーマの体を、レンが受け止めてそっと地面に寝かせた

『コングラツチレイション!!第1回スクワッドジャム、優勝はチームGSBA!!総発砲数は59997発でした!!』

なんとも締まらない終わり方であるが、一応ブラックアローの優勝で大会は幕を閉じたのだった

次の日……

「あー……眠たい……」

「あの後、公開された本戦の映像見ながら打ち上げて騒いで、結局0時越えたものね……」

朝、香蓮と詩乃は、それぞれの学校に向かうために歩いていた

「ホント、最後ラツシユさんに撃ち始めたときはどうしようかと……」

「だって、用意した弾がかなり余ってたから……」

——そんな、冷蔵庫の消費期限切れそうな食品使っちゃおう的なノリで仲間を撃たないでよ……

詩乃の言葉に香蓮は呆れる。店主に大量に持たせた12・7ミリ弾。だが実際に本戦中で使用したのは、ラツシユに向けて撃つたのを含めてもたった2マガジン分である。「ジェーンさんも森に仕掛けたトラップに誰も引つかからなかったからって、トラップ無駄にしたって言うてたし」

「あれは、たまたま追いかけてきたチーム同士が争ってくれたから、森に入ってこなかっただけなの……」

—まあ、部品レベルで自作したトラップだから、もったいないって気持ちもわかるけど……

ジエーンが森に仕掛けたトラップは、NPCが売っている基本的なトラップではなく、敵に触れるワイヤーやそこから爆弾に繋がる部分などが手作りで、隠蔽性が高くて繋げる爆弾も選択可能というハイスペックものであった

「それに、店主が持ってた高度回復キットも、結局誰も死に掛けるようなダメージ喰らわないから意味なかったし」

「DEFが低い私は、持つててくれるだけで安心して戦えるから、それで意味があるけどなあ……」

「あの一……」

そんな会話をしている2人に、1人の女子高生が声をかけてきた

—あれ？この子、うちの大学の付属高の生徒で、道でよく擦違う子……

その女子高生に、香蓮は見覚えがあった。彼女は香蓮が大学へ通う道でよく擦違う、大学に併設された高等部の生徒であった。彼女の後ろには、同じく見覚えのある彼女の友人たちが5人……

「よく擦違うお姉さんですよね？そちらは、12月に学園の高等部のエリアに来たときに一緒にいた同い年くらいの子」

「うん、そうだね」

「ええ」

明るい笑顔で話しかけてくるその女子高生に、寝不足の香蓮も詩乃も少し引いた返事をする

「御二人が一緒にいるところ見るの、あの時以来だったので、つい声をかけちゃいました」

「あ、うん。久しぶりに泊まりに来たからね」

「そうだったんですか。あ、自己紹介がまだでした。私、新渡戸咲っています」

「小比類巻香蓮です」

「朝田詩乃です」

つと自己紹介を交わしたところで、1人違う高校の詩乃は通学の時間が迫ってきたので、お話もお開きに……

「あ、最後に……」

「？」

つと言った咲の表情から笑みが消え、急に真剣なものになる

「優勝おめでとう。せめてあなただけは道連れに思ってたけど、それすら阻止されて悔しかったです。伝言通り、私たちも次はフルメンバーでぶつかりたいです。そして

勝ちたいです」

「あ……あなたまさか……」

「はい、チームSHINCリーダー、ボスことエヴァです」

―世の中って思ったより狭いんだな……

驚きを通り越し、悟りを開いた香蓮であった

「つてことがありました」レン

らっしゅ〈身バレm9〉

シノン〈まあ今思うと〉

シノン〈あれだけゲーム内のことを話してたら〉

シノン〈わかる人には普通にバレるわ〉

らっしゅ〈数少ない女性プレイヤーの中の人だったことが救いだな〉

―うう……確かに

らっしゅ〈へにしてもこれからは〉

らっしゅ〈こんな個人スポンサーの大会が増えていくのかねえ?〉

らっしゅ〈GGOも変わっちゃうな……〉

シノン「へ去年までの殺伐さがなくなっていくのは」
シノン「賛否あるわね」

ともあれ、GGO初の個人スポンサー大会、スクワッドジャムは終わったのだった…